サキュバスサッちゃん

片弓和美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サキュバスサッちゃん

【Ｎコード】
Ｎ５９２９Ｃ

【作者名】
片弓和美

【あらすじ】
ゴスロリに身を包んだ、ちょっぴり古風で気の強い美少女サキュバスちゃん。彼女は光希を食べる為に訪れた悪魔だった。退屈な日常に飽き飽きしていた光希が異界を駆け回り、サキュバスちゃんとの奇妙な関係の先に見た物とは……。※２００８／６／０２リニューアル完了しました。

第一章　地上

「あ……車だ」
車道に差しかかった時だった。
微妙な距離だったが渡れる気がして、かまわず横切った。
車は思ったより速かった。
タイヤが悲鳴を上げる。
窓を下ろした主婦っぽいおばさんが、なんかわめいてる。
道行く人達が振り返る。
関係ない。
さっさとやってくれればよかったのに。
おばさんの家庭が、俺なんかのせいでメチャクチャになるのは気の毒だがな。
重苦しい曇り空の下、灰色にたたずむ学校へと俺は吸い込まれてゆく。

三学期の授業も今日から通常どおり。やっと一息ついた昼休み。
弁当なんて作ってくれる人もいない俺は、コンビニの玉子パンで昼食を済ませた。午後の授業中に腹が鳴らなきゃそれでいい。
クラスには椅子を寄せ合う女子グループと数人が残っているだけだ。この薄暗い天気の中、他の連中はどこで飯を食っているのか。
「大沢、ユリの脚見んなって」
女子グループから非難の声が上がる。対象は俺だ。暇をもてあまし、短いスカートからのびた太ももを眺めていたのがばれたらしい。
「大沢、最悪。ちょーキモイんだけど」
クラスで一、二を争う美脚の持ち主、ユリがだるそうに言った。
言い争いも面倒だから、ここは謝っておいたほうがお互いのためってもんだ。
「はいはい、ごめんなさいよ」

そんな俺の気も知らず、まだブツブツ言ってる女子達に言ってやった。
「だいたい、そんな短いスカート履いてくるから悪いんだろ」
「うわ、何こいつ。エロオヤジじゃん。有り得なくね？」
過去にこんなやりとりが何度かあったが、それでも女子全員から総スカン食らったりしてるわけじゃない。こいつらも暇で、誰かに怒ってみせたいだけなんだろう。俺は格好の的（まと）、イジラレキャラってことだ。
俺がモテモテハンサム君で特筆すべき才能でもあれば
「大沢君、恥ずかしいよ……」
とか
「このスカートどう？　ちょっと短いかな？」
なんて顔を赤らめて言ってくれたりするんだろうな、こいつらも。
誰か俺と人生取り替えてくれないかな。誰でもかまわない。たぶんそいつは俺なんかより多く幸せってやつを持っているだろうから。

放課後。
いつもどおり『鏡を見る度にため息をつく習性がある』友人四人が、俺のアパートに集まった。『それなら見なきゃいいのに鏡ばかり気にしてしまう習性』もまた、俺達の特徴である。
俺の両親は転勤で東京にいる。そのおかげで俺は気ままな一人暮らし。高校生の誰もがうらやむ一人住まいも、野郎の巣窟（そうくつ）になっていては浮かばれないってもんだ。
錆びた鉄の階段が歴史を物語る、地方都市ゆえに家賃三万という安くてボロっちいアパート。だだっ広い長方形のワンルームでは、野郎五人がゆったりと座ったり寝そべったりできる。
短い一辺に玄関があり、上がりこんですぐに薄っぺらいベニヤ板張りのドア。それを抜けて正面の一辺に数えるほどしか開けたこともない窓。その下にはベッド。中心にコタツ。左手の長い一辺にキッチン。その横に全自動洗濯機がある。右手の一辺にはカラーボッ

クスに載った液晶モニター。自作したパソコンに積んだチューナーでテレビも見られる。カラーボックスの脇にある冷蔵庫は飲み物と食べ残し以外の用途に使った試しがない。
靴を脱ぎ散らかして我先にと上がりこむと、家主に特権があるわけでもなくコタツの争奪戦が繰り広げられ、あぶれた一人はベッドにゴロ寝する。この日、俺は首尾良くコタツに入ることができた。しかもテレビを正面から見られる特等席である。
席次が決まるとモテナイ軍団による定例会議が始まる。会議なんて言っても議題があって進行されているわけでもなく、ゲームをやりながら絵空事（ええそらごと）の女心論なんぞ喋ってるだけだったが。
結局、晩飯時になって
「あー女ほしい」
という、身も蓋もない結論をため息とともに吐き出し、会議が終わる。これが俺達のルーティンワークなのだ。
そして、勤めを終えた我が同胞達は、交換し合ったエロ動画のディスクなど手に帰っていった。

翌朝。
目が覚めると即座に洗濯機をまわした。トランクスに不祥事（ふしょうじ）を起こしてしまったからだ。さすがに小便など漏らしてはいない。
それにしても、妙にリアルな夢だったな。細かく震える洗濯機を眺めながら、しばらく夢に出てきた女の子を思い浮かべていた。
ゴスロリっていうんだっけ？　真っ黒でフリフリのドレスを着た女の子が、口に出すのも恥ずかしいような『あんなことやこんなこと』をしてくれた。宝石みたいな真っ赤な瞳を輝かせ、ピンクの髪をサラサラ俺の身体にからませて。
頭に服とそろいの飾りっぽい布を結んであったのが、不思議と魅力的に感じた。女の子には、犬歯をちょっとだけ長くしたような、白くて鋭い牙があった。
おっかない女子達に飼い慣らされた俺は、とうとう夢の中にまで

恐ろしげな美少女を作りだし、都合のいいことをしちまったってことらしい。
それにしても綺麗な子だったな。俺の夢に出てくるんだから、俺のタイプにピッタリ当てはまるのは当然かもしれないが。
「おっと、いけね」
目覚まし兼用の埃にまみれた時計が遅刻警報を発令していた。

「大沢……。大沢！　おまえどこ見てんだ。俺の授業はそんなにつまらんか？」
先生の声だった。今は日本史の時間。板書をノートに写すだけの授業のどこが面白いのか、こちらが質問してやりたいぐらいだったが、俺にそんなガッツはなかった。
「すんません。ちょっと考え事を」
「授業より大事な考え事か？　あとで職員室な」
――放課後。
職員室に出向いた俺はありがたいお説教を頂戴した。
「来年からは三年だぞ？　気を引き締めてかからないと、受験やばいぞ？」
話しは五分もかからなかった。次からは教室で言ってほしいものだ。
大学なんてモラトリアム（就業猶予）な四年間を過ごせるなら、どこだっていい。間違って女子学生と大恋愛でもすれば俺の人生変わるかもしれないが、それにしたってガリ勉して一流大学にいく必要なんてない。
鞄を取りに教室に戻ると、モテナイ軍団の面々が俺を待っていた。
「光希（みつき）、今日ちょっとパソコン使わして？」
光希こと俺のパソコンはこいつらのエロ動画収集マシンになっていた。親と共用のパソコンでエロ動画収集などするといろいろ不都合が起こるから、俺のパソコンで焼いたＤＶＤを持ち帰ってゲーム機で読みこめば、『ガサ入れ』にでも遭わない限り安全ってことだ。

今日もモテナイ会議開催決定である。

地上2

――本日の会議も滞り（とどこおり）なく終了し、仲間達が帰っていくと、俺はたまらない眠気を感じてベッドに入った。

――例の夢だ。

女の子が俺にのしかかっている。俺は右手をのばし、豊満とまではいかないが形よく十分な大きさで手に収まる女の子の物体をつかんだ。

マシュマロ。マシュマロ。……あったか～い水風船……やわらか～いな……。

「ちょっと、お放しなさいな」

その声に目を覚まし、反対の手で目をこする。赤く光る瞳が俺をにらんでいる。

「……なんだって？」

胸に感じる重みと体温。シルエットを上から下まで、下から上まで眺めていると、再度迷惑そうな声を浴びせられる。

「さっさと手を放しなさい、無礼者」

俺の手は現実の女の子にも夢と同じことをしていた。

「ご、ごごごめん！」

柔らかな名残（なごり）を惜しむ手に今生（こんじょう）の別れを告げさせる。

「君はいったい……？」

「レディに名を訊ねたい（たずねたい）のなら、先に名乗ってはいかが？」

レディ？

「俺は光希。大沢光樹（おおさわみつき）。で、君は？」

「わたしはサキュバス。若い精気を吸い取って力に変える『魔族』よ」

ヘッドボードに取り付けられた読書用のランプを点す（ともす）。やっぱり夢で見た女の子そのままだ。こんなに可愛らしい物体がこ

の部屋に訪れるとすれば、血迷ってアニメキャラの等身大フィギュアかリアルな空気嫁を購入した場合以外には有り得ないと考えていた。だがしかし、現実はどうだね？　ああ、神様だかなんだか知らないが、とうとう俺に『彼女』をプレゼントしてくれたのですね。それもとびっきりの美少女を。アーメン。そう、これこそ真実ですよ。でなければ困りますよ。むしろ真実にしてくださいよ。ハレルヤ。ナンマンダブ。臨・兵・闘・者・皆……と、これは悪魔祓い（あくまばらい）だったか……ん、ちょっと待てよ？

「……魔族とか言った？　魔族っていうのは、いわゆる悪魔と一緒？」

「そうよ。悪いかどうかは受け取りかた次第だけど」

「なんだそれ？　君はその、ちょっと可哀想な感じの子なのか？」

「人間の哀れみを受けるほど落ちぶれてはいないわ」

「じゃあ、寝てる男の一人住まいに侵入して、いったいどういうつもりだ？　うちには盗るものなんてないぞ？」

「わたしを泥棒呼ばわりするとはいい度胸ね。気に入ったわ。とにかく、わたしはあなたに取り憑く（とりつく）ことで力をたくわえる悪魔だから。よしなに」

サキュバスちゃんはベッドからフワリと飛び降りると、ドーム状に膨らんだ黒いスカートをつまんで、貴婦人みたいなおじぎをした。

翌日。

俺は学校にもいかず、コタツに入ってサキュバスちゃんと話していた。テレビでは午後のワイドショーをやっている。

俺はあのあとすぐに眠ってしまったらしい。サキュバスちゃんに目を見つめられて、夢の続きのキスでもしてくれるのかと思ったところまでしか記憶がない。

「なあ、おまえここに居座るつもりか？」

「悪い？」

「女の子と二人暮らしってのも悪くないが、やっぱだめだろ」

「勘違いしてはいけないわ。あなたに選択肢はないのよ」
「気の強い女だな。俺だっておまえみたいな細っこい女一人くらいたたき出せるぞ」
目の前にいたはずのサキュバスちゃんが消えた。
「ふふふ。やってみる？」
背後から声がした。
「おまえ、いったい何者なんだ？」
「言ったじゃない。悪魔よ。あなたお馬鹿さんなの？　ところで、『おまえ』って誰のことかしら？　無礼な口をきくと食べちゃうわよ？」
「おまえはおまえだろう」
「どの口がそういう無礼をはたらくのかしら？」
首にサキュバスちゃんの細い腕が巻きつけられ、もう片方の手が顎（あご）をつかんだ。要するにスリーパーホールド・ウィズ・ほっぺグリグリである。袖に満載されたフリルだかレースだかの装飾が、顔に当たってサワサワする。薔薇（ばら）の花びらをシロップで煮詰めたような甘ったるくて心地よい香りが漂ってきた。夢で何度も味わった柔らかい膨らみが、体温を伴って背中に押しつけられている。
俺死ぬのか？　大して面白くもない人生だったが、こんなにもあっさりと。まあいいや。なんだかとっても気持ちがいいんだから……。父さん、母さん、先立つ不孝（ふこう）をお許しください。さようなら。
「間抜けな顔ね。まだ死なせてなんてあげないわよ？」
サキュバスちゃんはいつのまにかベッドに腰かけていた。
「なあ、おまえ人間を食うのか？」
「またおまえと言ったわね？　若いのに死にたいの？」
「なら、なんて呼べばいいんだよ？　サキュバスちゃんなんて長い名前、呼びづらいじゃないか。呼び捨てもだめなんだろ？　どうせ」
「そうね、あなたに呼び捨てにされる筋合いなどないもの」
「じゃあ、どうすんだよ？」
サキュバスちゃんは胸を張って誇らしげに言い放った。

「サッちゃんとお呼びなさい」
サチコっていうのか？　ほんとはね？
「ふざけてるのか？　君みたいに恐ろしげな子がサッちゃんって……」
笑いを噛み殺すのに苦労した。
「おかしいかしら？　魔界のみんなはそう呼ぶわ」
誇らしげな顔がシュンとしおれた。
「い、いや、おかしくないよ。可愛くていいと思う」
しおれた花はすぐ満開になった。お世辞の一つぐらい言っても罰（ばち）は当たらないだろう。まあ、命は大事だ。
「ありがとう。わたしも光希って呼ぶわね。そのほうがいいでしょう？」
俺を呼び捨てにする筋合いは……あるんだろうな、たぶん。
「ああ。なんか彼女みたいでいいな」
「百年早いわよ。そうそう、わたしは元はといえば光希を食べにきたのよ。若い男はエグい味がするから、しばらくは精気を吸い取るだけで我慢するけど」
「食べるって……サッちゃんは食人鬼（しょくじんき）なのか？」
「そう呼ばれたことはないわね。でも悪魔が人間を食べるのは珍しいことではないわ。せいぜい口のききかたに気をつけなさいな。三度目はないわよ」
「一度目はいつだよ？」
サッちゃんは手を胸の前で交差させ、咎める（とがめる）ような顔をした。意地悪そうな顔がまた魅力的である。
「昨夜（ゆうべ）何をしたか覚えてるでしょう？」
昨夜、昨夜……。母さんに乳をもらって以来、涙の再会を果たしたアレのことだよな、たぶん。そうだ、俺はとんでもない美少女の胸を触ったほどの男なのだ。もはやモテナイ軍団から半歩抜け出ている。半分大人になったと言っても過言ではなかろう。こうなったら「皆さん、わたくし大沢光樹はこんなに可愛い女の子のおっぱい

を触ったことがあります！」と、街頭に立って大声で宣言してやりたいぐらいだが、捕まるからやめておこう。
「ちょっと、なにをニヤニヤしているの？　おかしな子ね」
「い、いや。あれは事故だ。元はといえば、サッちゃんが誘惑したんじゃないか」
「なら、事故にも気をつけることね。変な気を起こしたら、エグくても我慢して食べちゃうんだから。あーあ、お腹が空いてきちゃったわ」
　と、サッちゃんは人のよさそうな笑顔で言った。黙ってれば可愛いのにな、天使みたいに。なんて余計なことを言ったら食われるかもしれないので、口をつぐむとしよう。

地上3

翌日。

学校帰りに図書館や本屋をまわって悪魔に関する書物を探していた。

しかし、それは間違った行動だったと確信しつつあった。

実際に悪魔に出会った人など多くはないらしい。悪魔と出会って無事だった人というべきか。

サキュバスという名前はラテン語のＳｕｃｃｕｂｏ（下に寝る）からきているとあったが、サッちゃんはどちらかというとＩｎｃｕｂｏのイメージだ。

Ｉｎｃｕｂｏが語源となっている男の夢魔インキュバスと同一視されることもあるようだが、男に変身するようなことがあったら陰陽師でも呼んで退治してやろう。俺にそういう趣味はないからな。

結局どの本も主要な悪魔の名前程度までは合っているが、サッちゃんから聞いた仲間達の情報と比べても、遠くかけ離れたことばかりが書いてあるようだった。

――などと考えながらボケーッと歩いていると、誰かに肩がぶつかった。

ガムをクチャクチャ噛み、道路に唾を吐く、多少見覚えのある面々。ガラの悪さで名が通っている、同じ高校の先輩グループだ。

「おい、おまえどこ見て歩いてんだ？」

昔のマンガでしか見たことがない髪型。これはリーゼントってやつなんだろうか？　いまだにこんな古典的な不良っているんだ。などと妙に関心してしまう。ブレザーではあるが、ズボンはマッチョマンの太ももみたいにダボダボだ。

「すんません、ちょっと考えごとをしてて」

「おいおい、弱っちい野郎だな。男が簡単に謝ってんじゃねえよ」

不良が俺の胸を小突く。

「そういうもんですかね？」
馴れ馴れしく肩を組んできた不良の一人が顔を寄せる。
「兄貴よ～、俺達に小遣いくれや。どうせ余ってんだろ？」
「余ってるというほどはないっす」
「こういう時は余ってなくてもよこすんだ、ボケ！　それとも、今月は萌え萌えフィギュアちゃんでも買っちゃったってか？　兄貴はオタクちゃんでちゅからね～」
不良達がゲヘラゲヘラと薄汚い笑い声を上げる。
俺は実際弱っちい奴だ。細っこい悪魔の女の子に狙われるほどの哀れな子羊ちゃんなのだ。だから暴力沙汰などごめんだし、財布には高いであろう悪魔関連の本を買うために、小遣いの大半が入っている。
葛藤（かっとう）に揺れる頭の中の天秤をひっくり返した俺は、逃げるという結論に達した。顔を覚えられていたら学校で会った時にまずいことにはなるが……。
「おい、こら待て！」
人通りの多いところまで出れば下手なことはできないだろう。そう考えて商店街に向けて走った。しかし、俺は運動神経もあまり良くないのだ。体育は五段階評価でいえば、いつも二と決まっている。
――しめた、工事現場にガードマンが立っている……と、思ったら安全太郎君（旗振りロボット）だった。他に人影は……入れそうな店は……。
シャッターの降りたスナック風の店と、マダム御用達といった感じの古めかしい美容院。この際、美容院でもなんでもかまうもんか。おばちゃん達に言い付けてやる。情けなく泣きついてやるのさ。タクシーを呼ばせてもらって、家に帰れば一件落着ってわけだ。
近寄ってみると『理・美容うぃんど』の文字が。あぁ、ここは床屋さんもやっているんだ。そういえば、ねじねじのサインポールもあるしな。
ガラス張りのドアを開けると、店の奥から「いらっしゃいませ」

と熟年夫婦らしき声が。助かった……。
呼吸を整えようとソファに座る俺。ドアに付けられた鈴がカランコロンと音を立てる。振り返って見ると、不良グループの一人が入ってくる。
「そんなに伸びてねえのに切るのか？　いつからそんなオシャレさんになったんだよ？」
腕をつかまれ、心臓が飛び跳ねる。声が出ない……。
「あれ？　お客さん達二人連れ？」
理容担当と思しきおじさんが出てきた。
もう後先のことなど考えていられない。
「この人が俺を……人さらいなんです！」
きょとんとした顔のおじさん。
不良がすかさず言う。
「先輩に迎えにこさせて、人さらいはねぇ～べ。部活がきついからって、他人様（ひとさま）に迷惑かけんなや」
おじさんは懐かしそうに遠くを見る笑顔を浮かべた。
「サボりはよくないぞ。しっかり先輩の言うことを聞いて、ビシッとしごいてもらいなさい。石の上にも三年。今時の若いもんは我慢ってものを知らないからな」
おじさんは背を向けて顔剃り中の客に戻る。
顔から血の気が引いてゆく。もう、どうでもいい気分になって『先輩』に連行される俺。
店を出て少し歩くと連中が俺を取り囲む。
「兄貴よ～、そういう態度は良くないな～。教育か？　教育されたいのか？　みなさ～ん兄貴とボクシングの時間ですよ～？　俺達Ｋ－１ファイターだから、蹴りも入れちゃいますよ～」
『先輩』役の不良は仲間に目をやり、ニヤニヤしている。仲間達はといえば、腕まくりしたり、拳をポキポキならして準備運動中。
工場跡地のような、ブロック塀に囲まれた空き地に連れこまれ、早速腹に一発もらった。

うめきながら俺は言った。
「ごめんなさい、お金ならあげますから」
「だから謝るなって、付くモノ付いてんのか？　おい？」
腹にもう一発食らった。ありがたくないことに、こいつら見た目だけじゃないらしい。俺は腹を押さえてうずくまった。
でも、こういう場合は男も女も関係ないよな。一方的に殴られて、やめてほしいから謝るっていうことにはさ。などと考えながら、不良達が飽きて金だけ持ち去るのを待つ覚悟を決めた。
いよいよ不良達の円陣が狭まり、これはそうとう痛い目に遭いそうだと我が身に起こる不幸を予想していると、不良の一人が首筋を押さえて地面をのたうちまわった。
「痛え（いてえ）、痛えよー！」
「おい、どうした？」
そう問いかけた不良もまた同じように。そして一人、また一人と次々に転げまわり、全員気を失ったようだ。
いつのまにか、サッちゃんがだらしなく寝そべる不良達を見下ろしていた。
「低俗な人間どもがわたしの貴重な食料を穢す（けがす）ことなど許さない。そうだわ、おまえ達もわたしのお食事にしてあげましょう」
地べたにペタッと座りこむサッちゃん。不良の腕をつかんで微笑む。
「わたしの糧（かて）になれることを誇りに思って死ぬがいいわ。ふふふ。いただきまーす」
俺はとっさにサッちゃんの肩をつかみ、食事の邪魔をした。
「なに？　あなたも欲しいの？　光希になら特別にわけてあげてもいいわよ？　はい、お・す・そ・わ・け」
サッちゃんはブレザーの袖を鋭い牙で引き裂くと、露わ（あらわ）になった不良の腕を俺に差し出す。
「はい、あ～んして？　ちゃんと食べてブクブク太らないと。脂（あぶら）の

乗った悪〜いおじさんになってね？」
「いらん！　俺に食人の趣味はない！」
「好き嫌いはだめよ？」
「そういう問題か？」
「まあいいわ。復讐（ふくしゅう）してあげるから黙って見てて」
俺の手を「めっ！」と払いのけて食事に戻ろうとするサッちゃんを、もう一度引き止めた。
「なによ？　この者達はあなたにとっても敵なのでしょう？　邪魔をしないでちょうだい」
「だけど……」
「だけど、なに？」
「そう簡単に人を食うなよ。可愛い顔が台無しだぜ？」
「あら、良い心がけね。わたしをほめるなんて」
喜んでいるようだが、それでも食事を諦める気はないようで、もう一度不良の腕をとった。
「だから、やめろってば！」
「うるさいわね。あなたが今、代わりにわたしの糧になるというの？　わたしはそれでもかまわないわよ？」
「それはいやだけどさ……。ちょっと待ってくれよ。……頼むよサッちゃん」
俺が拝むように手を合わせて言うと、サッちゃんは腕組みして何やら考えこんだ。
「気分が削がれた（そがれた）わ。悪い男は美味しいけど、悪ガキはまずいし……や〜めた」
倒れている連中に蹴りの一つも入れてやりたかったが、それは卑怯者のすることだ。卑怯なことは悪いこと。つまり……自らの美味しさに彩りを加えてしまうことなのだ。
――サッちゃんと俺は優しい夕方の日差しに包まれて帰り道を歩いた。最近はだいぶ日が長くなってきた。どこかの家からタマネギの焼けるいい匂いが漂ってくる。

サッちゃんを横目で見ると、邪魔されて怒っているかと思ったのに、ファラオのミイラでも呼び出しそうな不気味なメロディーなど口ずさんでいた。これは魔界の歌なのだろうか？
「助けてくれてありがとう、サッちゃん」
「光希のためじゃないわ。あなたを今失っては困るから助けただけよ」
「おおげさだな。でも、俺がいなくなったらそんなに困るのか？」
「ええ、わたしはあなたに目星をつけて人間界に来たのよ。あなたは普通の人間より遙か（はるか）に栄養価が高い種類の人間とでも言えばわかりやすいかしら？」
「いやな言いかただな。でも、それくらいのことで？」
「誇り高き魔族にとって、一度目標として定めた獲物を諦めて帰ることなど恥ずかしくてできないし、死んだ人間を食べるのもタブーとされているの。それに、目標として選ばれる人間から得られる力は決して小さくないわ。力の使いかたにもよるけど、百年はもつかしら」
「へぇ、そうなんだ。でも結局その牙で食べられるのか。痛そうだな。あの不良達、気絶してたし」
「そうね。夢魔の牙は特別に痛いわよ？　怖い？」
「ああ、怖いよ。痛いのは嫌いだ」
「正直なのね」
「悪いか？」
「いいえ。でも、悪くないのは問題だわ。もっと虚勢を張って、嘘をつきなさい。泥棒とか詐欺とか、悪行の限りを尽くしてもらわないと困るわ」
「悪い男は美味い……か」
「そうよ。『悲鳴こそ最高のスパイス』という名言が魔界にはあるんだけど、あなたがブクブク太った大悪党に育ってくれたら、苦痛の少ない方法を考えてあげなくもないわ。努力することね」
「美味しく食べられるための努力かよ……。それだけのためにわざ

わざ悪党にって……」
「よい子でいれば食べられないかも、などと考えてはだめよ？　その時はた～っぷり拷問して『殺してくれ！』って絶叫させちゃうんだから」
「やれやれ……」

地上４

不良達の件もあったし、どうせ死ぬんだからと学校を本格的にサボりだして何日か経った夜のことだった。
夢が途切れ、胸が軽くなるのを感じて目を覚ました。
背中に白い翼の生えた少年と、サッちゃんがにらみ合っていた。
そいつは白いズボンに白い革ジャンをはおっていた。裸に革ジャンというスタイルは、踊りばかりが妙に上手い美少年アイドルのようだった。
「不浄なる者よ、少年を解き放ち、地の底に帰りたまえ」
「いやだと言ったらどうするつもりかしら？」
「あなたを消し去らねばなりません」
「できるのかしら？　あなたのような下級天使に」
サッちゃんは「やれやれ」と言うように両手を上げて首を振る。
「口をつつしみなさい、不浄なる者よ」
「不浄はあなた達の価値観でしかないわ。我々魔族から言わせれば、その自分こそ善そのものと言わんばかりのおすまし顔こそ、不浄以外の何ものでもない」
「言わせておけば調子に乗って。仕方ありませんね、天の罰を与えます。覚悟なさい！」
『下級天使』の身体が白い光を帯びる。その手のひらに光が集まって、バレーボールくらいの大きさになると、砲丸投げを凶悪にしたようなポーズでかまえた。
「危ない！」
俺はとっさにサッちゃんの前に立ちはだかった。
間一髪のところで下級天使が攻撃の手を止める。
「なにをするのです、少年。わたしはあなたを魔の手から救おうというのに」
「天使だかなんだか知らないけど、一方的すぎるじゃないか！　正

義なら女の子に手を上げてもいいってのか？」
　下級天使は、わざとらしいため息をついた。
「神の法は絶対なのです。人間の情に流されて道を誤る余地などありません。お退き（おのき）なさい」
「いやだ。よくわからないけど、あんたは間違ってる！」
「神の使いと、けがらわしい小悪魔のどちらを信じるべきか、よく考えなさい」
　下級天使は自分のこめかみを突っついて見せる。
「俺は元々無神論者だが、少なくとも問答無用に女の子を襲う奴の言うことなんて信じられないね」
「なんと聞き分けのない……。人間の分際で調子に乗って……。魔族に肩入れする者は魔族と同罪。一緒に消え失せるがいい！」
　穏やかだった下級天使の顔がみるみる憤怒の形相（ふんぬのぎょうそう）になり、白い光が手のひらに集められた。
　下級天使が例の砲丸投げポーズをとった瞬間だった。
「調子に乗っているのはおまえのほう。逃げるなら今のうちよ、下級天使」
　サッちゃんの赤い瞳が妖しく燃えている。背中からは外が黒に近い深緑で中が赤い色の翼、例えるならドラゴンにでも生えていそうな翼が突き出ていた。サッちゃんをマントのように包みこむ大きな翼の節々には、真っ白な鋭い爪が生えている。
「わ、わたしに逃げろだと？　笑止（しょうし）なことを！」
　サッちゃんの周りを血飛沫色（ちしぶきいろ）の光が包む。続いてサッちゃんは空中になにやら描いた。指先の軌跡（きせき）が五芒星（ごぼうせい）を上下逆さまにして、真円にはめこんだ形の紋章となって浮かび上がる。水色の光を放つ紋章に手を突っこんだサッちゃんは、龍の干物のような黒い柄（つか）と、血で染めたような赤い刀身からなる二振りの剣を取り出した。
　サッちゃんはそれらを二刀流でかまえて、上唇をゆっくりといやらしく舐めた。
「おとなしく逃げるなら見逃してあげようと思ったのに、せっかく

のチャンスをふいにするなんて、どこまでもお馬鹿さんなのね。望みどおり堕として（おとして）あげるわ」
サッちゃんの迫力に押されて呆気（あっけ）にとられていた下級天使が気を取り直し、サッちゃんに向けて光球を放とうとした。
だが、間に合わなかった。
サッちゃんは下級天使の懐に入りこみ、右手の長剣を下級天使の喉元に突きつけていた。
下級天使の憎々しげに引きつった顔を見て
「あ～ら、残念」
と、サッちゃんは冷酷な笑顔で言った。
左手の針のような剣がヒュンヒュンとうなり、下級天使の胸に直線が刻まれてゆく。
最後の一本が終わると、下級天使の胸に、光り輝く水色の逆五芒星が浮かび上がった。
勝負あったようだ。
下級天使は胸をかきむしり、野太いうめき声を上げながら、窓からよろよろと飛び立っていった。
「サッちゃん強いな！　格好良かったぜ！」
サッちゃんの両手を握って喜びを示すと、まんざらでもないといった笑顔が返ってきた。
「光希のほうこそ、よくわたしを守ろうとしてくれたわ。よい心がけね」
「なんか、あいつムカついたからさ」
「でも、あの光弾（こうだん）が直撃していたら、あなた消滅していたわよ？」
「なんだって？　天使のくせにそんな危ないもんを出すのかよ。人間には効かないと思ってたのに……」
「ところで、いいのかしら？　あなた、神に追われる立場になったんだけど？」
「え、そんな……」
「ふふふ。冗談よ。あれは下級天使の暴走。神はそんなに物分かり

の悪い者ではないわ、少なくとも人間に対してはね。安心なさい」
「その前に、お嬢様のお食事はご予約済みのようですけど……」
「何か言ったかしら？」

地上5

下級天使を追い払った翌日の夕方。
俺達はいつもどおり部屋でゴロゴロしていた。サッちゃんも椅子のない暮らしに初めはとまどっていたものの、クッションを抱いてコタツに入っている。
悪魔との二人暮らしも慣れてみると結構快適になってきた。俺の彼女ではなくても、可愛い女の子とのんびり暮らせるなんて、冥土の土産には丁度いいってわけだ。
「サッちゃんはずっと天使に追われてるのか？」
「そうね、最近の六十年ぐらいは静かだったんだけど、あの時学生達にかじりついたのが目立ちすぎたのかしら」
「六十年？　君はいったい幾つなんだ？」
サッちゃんは美人女教師みたいに人差し指を立てて答えた。
「レディにそういうことを聞いてはだめよ？」
赤い瞳が音の出そうなウィンクをした。
「そういうレベルの話じゃない気がするけど。でも、それじゃあ俺のために危険を冒してくれたのか？」
「勘違いしないで。悪魔は気まぐれが命なんだから」
「まるでなんかのキャッチコピーみたいだな。……待てよ、奴等をかじった程度で目立つということは六十年間食事をしてないのか？
腹減ってるんじゃないか？」
「さあね、忘れたわ」
「いつもいらないって言うけど、なんか食べるか？　とは言ってもカップ麺ぐらいしかないけどな。普通の食べ物はやっぱりだめなのか？」
「いらないわ。あの食べ物のどこが普通なのよ？」
「人を食うよりはよっぽど普通だと思うけどな。作りかたは見てわかってるだろ？　気が向いたら食えよ。よそ見しててやるから。レ

ディだってカップ麺ぐらい食ってもいいんだぜ？」
サッちゃんはなんだか遠い目で窓の外を眺めている。
いたたまれなくなって俺は話題を変えた。
「あいつ、また来るかな？」
「さぁ、どうかしら」
「天使のくせに意地悪そうな奴だったな、あいつ」
「そうね、悪魔や天使のイメージなんて、人間の側から見たごく一部の姿でしかないのよ。政党や派閥とでも言えばわかりやすいかしら。天使にも意地悪な奴はいるわ」
「そうか、天使といえども完全な善などではないんだな」
「そうよ。完全な者は我等が王ルシファ様と神だけよ……」
「そういうもんなのか」
「完全な者は争いや殺生を好まず、生け贄を差し出せなどとは言わないわ。すべては人間の幻想と天使の暴走なのよ。魔族にしてもそう。本来、必要のない悪さなどしないのが真の魔族だわ」
「でも、俺を食べるんだろ？」
「わたしもまた完全な者ではないもの。あなたも動物を食べるでしょう？　同じことよ。だから、せめて感謝しながらいただくしかないのよ……」
「俺は、牛や豚と一緒ってことか……」
「あら、自分を悪く言ってはいけないわ。わたしの糧になれることは誇りに思っていいのよ？」
「はいはい、有り難き幸せにございます」

地上6

数日経ったある晩。
いつもどおりサッちゃんを胸に乗せて寝ていると、俺の餌である夢が途切れた。いや、力を吸われているのだから、サッちゃんのおやつというべきか。そんなことはどうでもいいとして、また奴が来たのだろうか？
眠い目をこすりながら見ると、奴には違いないようだった。しかし、この前とはなんだか様子が違う。身にまとう光がおどろおどろしいというか。それに、革ジャンのファスナーをしっかり閉めて胸を隠そうとしているようだ。左手には白い光を帯びたアーミーナイフを握っている。
「少しは見られる顔つきになったじゃない。素敵よ、今のあなた」
「許さぬ、おまえを許さぬぞ。魔族の小娘！」
「あら、感謝してほしいものだわ。高貴なる我等魔族の徴（しるし）を授けてあげたのだから。受け入れるか受け入れないかはあなたしだいなのよ？」
「その徴のせいでわたしは天界にいられなくなったのだ、それを感謝しろだと？　ふざけるな！」
「快楽に身を堕としなさいな。規則ばかりでがんじがらめの天界なんて、ちっとも面白くないじゃない。魔界へいらっしゃい。きっとそのほうが楽しいし、あなたのためになるわ」
「わたしは天使だ！　そんなことができるものか！」
「ほら、『そんなことができるものか』と言ったでしょう？　つまり、あなたはできることなら身を堕としたかったということよね？　心の底であなたはそれを望んでいるのよ。違う？　堕天使さん」
「黙れ、小娘！」
サッちゃんが『堕天使』の左手を一瞥（いちべつ）する。
「素敵なナイフね。潔い（いさぎよい）天使様は、武器の使用を好

まないのでしょう？　天使様のプライドはどこへいったのかしら？
ねえ、そのナイフでわたしを突きたいの？　それとも切り刻みたい？」
自分の身体に手を這わせ、エロティックに誘惑するサッちゃん。
「なんと汚らしい娘なのだ……。虫酸が走る！」
堕天使の身体に白い光が満ちてゆく。前にも増してその光は輝きを増しているようだった。怨念というものだろうか？
「その力を魔族繁栄のために、と言っても聞いてはくれないでしょうね」
「当然だ！　わたしはおまえを道連れに冥府（めいふ）へと旅立つのだ！　惨めな堕天使として生き恥をさらすことなど、わたしは望まぬ！」
サッちゃんはおもむろに翼を出し、二刀をかまえた戦闘モードになった。お互いの光が最高潮まで高まり、両者が動いた。
二人は剣豪同士の決闘シーンのようにすれ違いざまに斬りつけ合い、互いに背を向けて立ち止まった。
「っ……！」
サッちゃんの瞳が真っ赤な血を流しはじめた。流れる血のせいで目を開けられないようだ。
「サッちゃん！　まずい、逃げよう！」
「わたしがこの程度の堕天使ごときから逃げるですって？　ばかにしないで、光希！」
俺をにらんだつもりだろうが、あらぬ方向を見つめているのに気付いていない。
堕天使はすかさずナイフに光をたくわえると、サッちゃんの背後にまわりこんだ。
「危ない！」
俺は無我夢中で堕天使にしがみつく。
「邪魔をするな、小僧！　死にたいのか？」
堕天使が凄まじい力で振り払おうとする。
触れている腕が焼けるように熱い。

「サッちゃん、ここだ。撃て！」
「そんなことをしたら、あなたまで……」
「かまわない！　こいつにむざむざサッちゃんを殺さ……」
サッちゃんの二刀が空中をXの字に刻むと、交点の辺りから一筋の炎が飛び出した。
獰猛（どうもう）な炎の大蛇が堕天使に食らいつく。
「熱い！　熱い！　神よ、なぜわたしにこのような仕打ちを！」
堕天使に着火した炎はガスバーナーのような青色になり、獲物を焼き尽くして消えた。
目の前で人型の生き物が焼け死ぬ様は凄惨で、俺はしばしぼう然となった。
「助かったわ、光希」
「かまわないと言った途端かよ。まあ、サッちゃんらしいけどな」
「声が聞こえているうちにと思ったの。怪我はない？」
「ちょっと火傷したみたいだ。それより目は大丈夫か？」
「人間とは身体のつくりが違うから一晩も休めば平気よ」
「そうか、良かった……」
ホッとして崩れ落ちた俺に、サッちゃんが手探りで触れてきた。
俺の顔を発見したサッちゃんは、頬にそっとキスをした。
「……サッちゃん？　これは……味見！？　俺はまだ美味しくないです！　戦闘でお腹も空いたでしょうが、どうかお許しを！」
「馬鹿ね。魔族だって感謝のキスぐらいするわ」
「そ、そうか、ごめん……」
「わたしの手をつかんで光希に触れさせて？　癒してあげるわ」
「ん？　なんかしてくれるのか？」
「……そ、そういう意味じゃないのよ？　変な気を起こしてはだめよ？　痛みを止めてあげるという意味なんだから、勘違いしないでね？」
「どうしたんだ？　顔が真っ赤だぞ？　やっぱり目が痛むのか？」
「平気よ。いいから傷口に手を当てなさいってば！」

「こんな感じでいいかな？」
火傷した腕に当てられたサッちゃんの手が赤く光ると、痛みがいくらか楽になった。
残りの夜中を俺は絨毯（じゅうたん）の上で眠ることにして、サッちゃんにベッドを譲った（ゆずった）。モコモコのスカートじゃ寝られないだろうと、赤いジャージのズボンと白いTシャツを貸してやった。
サッちゃんはよほど疲れたのか、すぐにスースーと気持ちよさそうな寝息を立て始めた。うっすらと微笑みを浮かべた寝顔がとても愛くるしかった。掛け布団が、羨ましくなるくらいに抱きしめられている。
「よく寝てちゃんと治せよ。君の綺麗な瞳に微笑みかけられると、その……幸せ？　な気持ちになれるんだ。だから、ちゃんと治せ。そうだ、君の香りが移ったものは全部家宝にしてやろう。俺様にコレクションを提供できることを誇りに思うがいい、ふはははは～。モテナイ君を甘く見るなよ！　……おやすみ、サッちゃん」

地上7

翌日、穏やかな午後。
窓の外は抜けるような青空だが、悪魔であるところのサッちゃんは灰になったりしないのだろうか？　いや、ヴァンパイアじゃないからいいのか。
サッちゃんと俺はコタツに入ってテレビを見ていた。サッちゃんの目はもうなんともないようだ。例のジャージとTシャツは、俺が目覚めた時には既に洗濯済みで吊してあった。便利すぎる全自動洗濯機を呪うばかりだった。
ふと、吊されたジャージの横にあるカレンダーが目に入った。
「あぁ、このままじゃ留年決定だな……。終業式って何日だっけ？
まあいい、どうせ長くない命だ。だからといって、俺の直接の死因と仲良くテレビなど見ていていいのだろうか？　ああ、神様！
と言ってみても、部下があんな具合では本当に信用していいものなのかどうか……」
「なにをブツブツ言っているの？　みかんと温かいお茶が欲しいわ。用意してちょうだい」
「はいはい」
俺は言われるがまま、物置からみかんを持ってきて緑茶をいれた。
インスタント食品ばかりの俺の食事を見て
「よくそんな怪しげなものを調合して食べるわね」
なんて言っていたサッちゃんだったが、母さんが送ってきたみかんや緑茶のような一般的な食品には興味を示した。最近では、この組み合わせがサッちゃんの定番になりつつある。
「どうぞ、お姫様」
「ありがとう、光希」
お高いくせに俺がおじぎすると、神妙な顔で返すサッちゃんがなんだか微笑ましかった。

「なあ、人間の食い物を食えるなら、俺を食うのをやめたりできないのか？」
「そうはいかないわよ。わたし達魔族は基本的に食物を必要としないの。ただ、パーティなんかで食べる機会はあるけどね。つまり、このみかんなどは嗜好品（しこうひん）でしかないわ。通常の食物は喉元を過ぎれば消滅してしまうのよ。でも、人間は別。肉体そのものはやはり消滅してしまうけど、重要なのは精神というか、エネルギーなのよ」
「そういうものなのか。肉が食いたいのかと思ってたよ。どちらにしろ食われるなら一緒だけどな」
「物分かりがよくなってきたわね。いい子だわ」
サッちゃんが「よしよし」と頭を撫でてくれた。嬉しいような、情けないような……。
「そういえば、六十年もそっちの食事をしてないんだったよな？って、これ聞いちゃいけないことか？」
「いいわ、この前は良いはたらきをしてくれたから聞かせてあげる」
サッちゃんはお茶を一口すすってのんびりと湯飲みを置き、話を切り出した。
「人間である光希にみくびられてはいけないと思って強がっていたけど、わたしは元々人間を食べるのが苦手な子だったの。「好き嫌いをしたら立派な魔族になれない」と、パパに叱られたものよ。次第に人間の味にも抵抗をおぼえなくなっていったんだけど、結局パパがさらってきて眠らせてくれた人間ぐらいしか食べられなかったわ」
「そうか。生きた人間じゃなきゃだめなんだもんな」
「そうよ。ところで六十年ぐらい前に大きな戦争があったでしょう？」
「六十年ぐらい前っていうと第二次世界大戦のことか？」
「そうだったわね。第二次世界大戦。その時わたしはその場に居合わせて、悪魔も一目置くような残酷な爆弾が落とされた光景を見てしまったの」

「たぶん、原爆のことだろうな」
「よくわからないけど、あんな爆発を見たのはあの時ぐらいね。もっと近くにいたら、魔族のわたしでさえただでは済まなかったかもしれないわ」
「ひどかったんだろうな」
「街の様子を見にいったわたしは見てしまったの。雲のような塵(ちり)が包む闇の中で、幼い子が母を求めて這いつくばる姿。子を捜して、崩れかかった重傷の身体で叫び続ける母の姿。水を求めて川に入り、折り重なって死んでゆく人達の姿を。その時の悲鳴やすすり泣く声が耳に焼きついて今でも離れないのよ。とてもかわいそうで、恐ろしくて、涙が止まらなかった。それからわたしは人間を食べるのを完全にやめたの。たいていの仲間達はわたしを笑うわ。そんな偽善がいつまでもつのか？　悲鳴こそ最高のスパイスだろう？　とね」
「なんだか悪魔らしくない話だな」
「前にも言ったでしょう？　それは人間の作り出した幻想でしかないと。……いいえ、それらしくして見せた、わたしのせいかもしれないわね」
「今の君を見ていればわかるよ。つまらない偏見だったんだって」
「ありがとう、光希」
「でも、悲鳴を上げたほうが美味いんだろ？」
「ただの思いこみよ。本当はみんな心の底では悲鳴なんて聞きたくないはずなの。魔界人は本来優しくて陽気な人が多いのよ。なのに一部の馬鹿な食通達が残酷な悪魔ぶって言い始めたばかりに、まことしやかにそう思いこまれているだけだわ。そうやってかっこいいと思いこむことで、罪の意識を忘れたかったのかもしれないけどね」
「どこの世界も変わらないものなんだな。俺達地上人だって食肉処理されてない動物を自分でつかまえて食うなんてできない奴のほうが多いしな。現代ではそういう仕事の人以外は、そんなこと考えてもいないだろうし。社会の欺瞞(ぎまん)ってとこか。要するにサッちゃんは人間でいうベジタリアンみたいな人なんだな。でも、そのサッちゃ

んがなぜ俺だけ？」
「力がひどく弱まっているからなの。パパがわたしを心配して見つけてきてくれた希少種、それがあなたよ。たまには自分の手で狩りをしなきゃだめだっていう、パパの思いやりを無駄にすることなどできなくて……わたしはあなたを目標に定めてしまったの」
「俺も思いやってくれると嬉しいんだけどな」
「ごめんね、光希。本当にごめんなさい」
サッちゃんは俺の両手を握り、涙のにじんだ目で俺の目を見つめた。優しさをさらけ出したサッちゃんが綺麗すぎて息が止まりそうだった。だが、言うべきことは言わなければと歯を食いしばる。
「……そう素直に謝られてもな。じゃあ食えよとも言えないだろ？普通に考えて」
「そうね。あなたを食べなくても、毎晩精気を吸い取ればしばらくは問題ないわ。大幅な回復は望めないとしても」
「それぐらいなら……あの夢は最高だからな。あれってサッちゃん作、演出なの？」
「な、なんのことかしら？　と、ともかく、ありがとう、光希。何か解決策を考えておくわ。それまで身体が疲れやすいと思うけど、わたしを、その……、助けてくれるわよね？」
「あぁ、仕方ない」

地上8

ここ数日、サッちゃんはあちらこちらと飛びまわり、情報を集めているようだった。
夕方になって帰ってきたサッちゃんに、お茶とみかんなど用意して話を聞いた。
「それがね、よさそうな策が見当たらないのよ。それどころか、さっさといただいてしまえば悩むこともないのに、なんて言う子もいたわ」
「怖いことを言ってくれるな。やっぱ悪魔、恐るべし」
「人間を食べることに抵抗がないだけで根は優しい子達なのよ。それにあなた好みの綺麗な子が多いわ」
「それは是非とも紹介してもらいたいな」
「その時はわたしから離れないことね。食べられてしまうから。と、冗談は置いといて、もっと位の高い魔族なら方法を知っているかもしれないわ」
「サッちゃんより位の高い魔族なんているのか？」
「嬉しいことを言ってくれるわね。でも、まだまだ上はいるのよ。身近でいえば、パパとか」
「まぁ、気位の高さならサッちゃんだって相当のレベルだと思うけどな」
「何か言ったかしら？」
「いや、なんでもない。パパからは何も聞かされたことはないの？」
「そうね。その辺の事情は詳しいのかもしれないけど、そういえば聞いたことがないわ。目標探ししかしてなかったから」
「そうか、残念だよ……」
――サッちゃんがいつもどおり出かけて不在の時、男は訪ねてきた。

パーツの大きい、くっきりとした顔立ち。サラサラと長い銀髪。
白人さんを見慣れないせいもあるだろうが、それにしても人間離れした雰囲気。清らかなというか、慈愛に満ちたというか、そんな表情。おそらく人間ではないだろう。白いスーツなんかスラッと着込んではいるが……。
「大沢光希さんですね？　少しお話ししたいことがあります。お邪魔してよろしいでしょうか？」
驚くほど流暢（りゅうちょう）な日本語である。ネイティブレベルと言っても差し支えないだろう。
のほほんとした表情の男に特別な危険は感じなかった。
玄関口に入ろうとして「いててっ」と頭をぶつけたところからすると、百八十センチ以上はありそうだ。
「セールスマンじゃ……ないですよね。かまいません、どうぞ中へ。ところで、あなたは？」
「大天使とかアークエンジェルとか呼ばれる者の一員です」
「そうですか、お会いできて光栄です。大天使様」
大天使様もお茶を飲むだろうか？　などと思いながら、一応お茶を出してみる。サッちゃんが飲むんだから、飲むかもしれない。
「ありがとう、光希さん。これをどうぞ」
「これはご丁寧にすみません」
渡された包みを開けてみると、それは『銀座梅屋』のどら焼きだった。
銀座の地価が高騰する遙か前から一等地に店舗をかまえる、老舗（しにせ）中の老舗和菓子舗梅屋。その数ある商品の中でも通が好んで求めると言われる、厳選された十勝大納言（とかちだいなごん）を惜し気もなく用いた、しっかりと甘く、それでいてしつこくない、フワフワながらもパサパサしない究極のどら焼き。と、テレビで言っていたのを聞いたことがある。
お茶だけでなく、和菓子とのハーモニーまで知り尽くしているようだ。

……これは、あなどれない……。
わざわざ人間相手に手土産(てみやげ)を持参してきた微笑ましい大天使様に
「では、早速ですが、ご一緒に」
と、どら焼きを差し出し、話を向けた。
「それで、大天使様が俺のような人間にどんなご用ですか？」
「そうですね……唐突ですが、光希さんはあの子をどう思いますか？」
「あの子って、サッちゃんのことですよね。そうだな、わがままで、気位が高くて、いつ食われるかと気の休まる暇がありません」
「そうでしょうね」
「でも、俺はサッちゃんをなんだか憎めません。気取った美人のくせにどこか抜けてて可愛いし、一緒にいると楽しいんですよ。できることならサッちゃんの力になってやりたい。勿論痛い思いはしたくないけど、どうせ逃げられないならサッちゃんに食われるのもまた人生かなと。それでサッちゃんが幸せになれるなら」
「そうですか。あなたはなんと心の広い。今すぐ天界にスカウトしたいくらいですよ。……そうですね、それだけの覚悟があれば、あるいは……」
大天使様は一瞬、躊躇して（ちゅうちょして）続けた。
「いいですか、彼女はわたし達の配下を堕落(だらく)させた上に消し去りました。その罪は決して許されるものではありません。しかし、そんな彼女にだって生きる権利があるとわたしは思うのです。一日だけ目をつむっていますので、彼女に伝えて下さい。我々も地の底まで追ってはいけない。だから、つまらぬプライドなど捨てて早々にお逃げなさいと」
「なぜあなたは悪魔である彼女に、そんなにも慈悲(じひ)をかけるんですか？」
大天使様はちょっとだらしないくらいに緩んだ笑顔で言った。
「彼女はわたしの娘だからです。人間界同様、天界でも公私混同は許されないことなんですが、わたしにはそれを上手くごまかすだけ

の力があります」
「では、サッちゃんが言っているパパというのは？」
「魔界においての育ての父のことでしょう。寂しがり屋の彼女のことだから、魔界に堕ちたあとでも甘えられる相手を見つけたのは当然の成り行きだったのかもしれません。かわいそうに。わたしの可愛い娘を誑かして（たぶらかして）、魔族の山羊面（やぎづら）め！」
怒りに震えて白い光がにじみ出ている。しかも、下級天使などとは迫力が違う。
「ちょ、ちょっと。大天使様、どうかお気を確かに」
「失敬、わたしとしたことが」
「いえ、どうも」
「彼女を頼みます、光希さん。どうか無事に魔界へ逃がしてやって下さい。わたしは彼女の消滅を望まない。そしていつか、改心して天界に……。その時まで……えぐっ……うぅっ……」
こともあろうに人前で泣き出した大天使様がいたたまれなくなって、俺は背中をさすってやった。
「ありがとう、光希さん。あなたのように優しい人間になら彼女を……うぅ……うっ」
俺だって逃がせるものなら逃がしてやりたい。だが、サッちゃんの辞書に『逃げる』という文字があるのかどうか……。

地上9

サッちゃんが帰ってきた。なんだか顔色が良くないようだ。元々赤みが少し足りないぐらいに白い肌が、透き通ってしまいそうだった。

「おかえり、サッちゃん。何かいい話は聞けた？」

「いいえ、なんだか疲れたわ」

「すまない。俺のために」

「なんのこと？　これはわたし自身のためにやっていることだわ。あなたに少しでもかじりついたら、マンドラゴラみたいな悲鳴を上げるに決まってるんだから。悲鳴は悲しいから嫌いって話したでしょう？」

「そうだったな。でも、ありがとう」

初めて会った日のように俺を眠らせて、さっさと食っちまえばいいだけのことじゃないか。それなのにサッちゃんは……。俺は近頃のサッちゃんに恐怖など感じない。いや、最初からサッちゃんが怖いなどと思っていなかったのかもしれない。

「変な子ね。それより何か甘いものが欲しいわ」

「そうか。ちょっと待って、さっき来たお客さんからいただいたものがあるんだ」

俺は冷蔵庫からどら焼きを出してきてサッちゃんに手渡した。

サッちゃんは渡されたどら焼きを見て、素っ頓狂（すっとんきょう）な声を上げた。

「これは……！？　父様？」

「んな馬鹿な！　なんでわかったの？　残留思念（ざんりゅうしねん）？　透視？」

「いいえ、この状況で梅屋のどら焼きを持って現れるなんて、父様しか考えられないわ。あなたには、そんな気の利いたお友達もいないようだし」

「まぁ、どうせムサい野郎友達しかいないけどさ」

俺は気を取り直して切り出す。

「それで、なんだけど」
「いやよ」
サッちゃんはそっぽ向いてしまった。
「まだ何も言ってないじゃないか」
「父様のことだから天界においで、か、逃げろのどちらかでしょう？」
「そのとおりだよ。一日だけ猶予をあげるから無事に逃げて、いつか天界にって。つまらないプライドは捨てろってさ」
「なぜ天使だとわかって話を聞いたりするのよ！　裏切り者！」
「いい父さんじゃないか」
「あんな頑固で、そのくせ泣き虫な父様になんて指図されたくないわ！」
「素直になれよ。どら焼きを見ただけで気付くほど、父さんのことを気にしてるんだろ？」
「わかったようなことを言うわね。あなたにわたしの何がわかるのよ！　最近ちょっと生意気よ、あなた！」
サッちゃんが俺の背後にまわりこんでいる。
……そうだな、それもまた一つの手だ。目的を果たせばサッちゃんは帰れるんだ。
「食えよ。俺を食えば胸を張って魔界に帰れるんだろ？　無事に魔界に帰って、いつか父さんと仲直りしてやってくれ。安くても命をやるんだから、それぐらいの頼みは聞いてくれるよな？」
俺は目をつむり、サッちゃんの鋭い牙が突き立てられる瞬間を待った。
「早くしろよ。あまり時間がないぞ、わがまま娘」
重苦しい沈黙を破ってサッちゃんは言った。
「わたしはおまえのような下衆をいただいてまで生き延びようとは思わない！　せいぜい地面を這いつくばって愛しい天使様のご機嫌でもうかがいながら生きるがいいわ！　思い上がるな、人間！」
サッちゃんは靴を乱暴につっかけると、ドアを勢いよく閉めて出

ていってしまった。
なんてひどい台詞を残していくんだ、あいつは。さすが悪魔だなという考えが浮かんできて、それは偏見でしかなかったんだと思い直す。
「まあ、これで俺の命は助かったわけだ。可愛い子だったけど、あんなおっかない女王様が出ていってくれて清々（せいせい）したぜ。まったく。死んじまうのはさすがにかわいそうだけど、俺の知ったことか……」
ふと、振り返ってサッちゃんが立っていた辺りに目をやると、床がポツポツ濡れていた。俺があまりにも美味そうだからって、あの『レディ』がよだれを垂らしたとも思えない。
「……泣くほど頑張るなよ！」
俺はクローゼットからコートを引きちぎり、鍵もかけずに家を飛び出した。

地上１０

無我夢中で飛び出して捜しまわったはいいが、見当たらなかった。サッちゃんがその凄まじいスピードを活かして飛び去ったとしたなら、もう俺の手の届く場所にはいないのかもしれない。それでも地上にいる限りは、天使達にあっさりと見つかってしまうのだろう。

「まったく、どこにいったんだ」

サッちゃんとは家にいるばかりで、ほとんど一緒に出かけたことなどなかったから、ＴＶドラマのように都合よく思い出の場所があるわけでもない。

「……ん？　待てよ」

サッちゃんはそこにいた。俺が不良に連れこまれた空き地だった。

サッちゃんは、かつて工場に出入りするために使われていたと思しき（おぼしき）コンクリート階段の残骸（ざんがい）に座っていた。手に持ったどら焼きを大事そうに眺めている。

俺はポケットに入っていた五百円玉を取り出すと、近くの自販機で温かい緑茶を二本買い、サッちゃんに歩み寄った。

着ていたコートを脱ぎ、サッちゃんの肩にかけてやった。

「こんなところにいたのか。捜したよ」

俺に気付いたサッちゃんは慌てて顔を拭った。

緑茶を一本サッちゃんに手渡した俺は、並んで腰かけた。

「緑茶とどら焼きはとてもいいコンビだよ。眺めてないで食べたら？」

「そんな気分じゃないわ」

「悔いが残るぜ。大天使と戦って無事で済むとは思えない。お茶、貸してみなよ」

俺が緑茶の缶を開けてやると、サッちゃんはのろのろと一口飲んで言った。

「逃げろと言いにきたんじゃないの？」
俺も自分の緑茶を開けて、一口すすってから答えた。
「言っても聞かないだろう？　それなら俺も何か手伝えないかなと思ってね」
「足手まといよ。帰って」
「無理するなよ、心細いくせに」
「人間に手出しできる問題じゃないわ。思い上がるなと言ったはずよ」
「わかったよ。でも、天使は人間に手出しできないんだろ？　それなら、黙って見ているぶんには俺に危険は起こらない。そうだろ？」
「そうね」
「サッちゃんが消し去られる哀れな姿を見届けてやるよ。どうせ勝てないんだから」
「やっぱり、あなた生意気だわ。天使を片付けたら美味しくいただいてあげるから、覚悟を決めておきなさいね」
サッちゃんは、少し腫れ（はれ）ぼったくなっている目で、突き刺すように俺をにらんだ。
「よし、元気になったな。サッちゃんに泣き顔は似合わない。天使に勝って、俺を食って、無事に魔界に帰れるといいな。きっとパパも待ってる。だけど、痛くしたら遠慮なく悲鳴を上げさせてもらうからな。楽しみだろう？　だから、絶対負けるなよ」
一瞬驚いたような顔をしたサッちゃんは、せっかく泣きやませてやったのに、とうとう一粒の涙を見せた。
「光希は本当に身のほど知らずだわ。誘惑するのは悪魔の仕事よ？」
サッちゃんが俺にそっと口付ける。
悪魔の口付け。
たしかに、誘惑するのは悪魔の仕事のようだ。
――二人の手を離れた緑茶が、土の地面に水溜まりを作っていた。
照れくさい顔を見合わせて、なんとなく笑った。

地上１１

その時はすぐに訪れた。
二人の神々しさを感じさせる男達が俺達の前に降り立った。サッちゃんの父様ともう一人、こちらも位の高い天使なのだろう。父様の様子からすると、父様よりも格上のようだ。
その格上風の天使はレスラーのような逞しい（たくましい）身体つきだが、大ざっぱな顔には、それでも品性が感じられた。白いスーツは偉い天使のユニフォームなのだろうか？　父様と違って、窮屈（きゅうくつ）そうではあるが。
父様が俺に走り寄って、そっと耳打ちする。
「なぜ逃がしてくれなかったのです？　光希さん」
「すみません、でも約束より早いじゃないですか」
父様は面目なさそうに頭をかく。
「上の天使にばれてしまって……。わたしとしたことが」
「大丈夫なんですか？　あなた自身は」
「彼女を仕留めて（しとめて）帰れば『彼』の胸の内にしまっておいてくれると。でも、わたしだってそんなのいやなんです。しかし『彼』には逆らえない。だから、隙（すき）を見て彼女と逃げて下さいね。お願いします」
『彼』がいぶかしげな顔でこちらを見ている。
「どうしたのです？　その少年は知り合いですか？」
「はい、いえ以前見かけた良い行いをする少年に似ていたものですから」
「職務中です、始めますよ」
「はい」
『彼』はサッちゃんに宣告する。
「魔族の娘よ、覚悟はできていますね？」
「誰にものを言っているのかしら？　このわたしに覚悟しろですっ

て？　笑わせてくれるわね」
「あなただって力の差くらいわかっているでしょう？　抵抗してはいけません。苦しまぬように消し去ってあげましょう。それが神の使いの慈悲というもの」
「わたし達魔族に、天使の慈悲を受け入れるような卑怯者などいないわ！」
サッちゃんの身体から、不吉な赤い光と翼が現れ、力をたくわえてゆく。
サッちゃんは空中に逆五芒星を描き、取り出した二つの剣をかまえた。
「無駄ですよ」
『彼』はため息混じりに呟いた。
サッちゃんは『彼』に向けて目くらましのような、まぶしく赤い閃光を浴びせると、次の瞬間、『彼』の背後にまわりこみ、四方八方から斬りつけた。……らしい。
俺の目にはサッちゃんの腕が残像によって千手観音の腕のように見え、一本一本が何をしているのか、よくわからなかった。
サッちゃんが、とどめとばかりに遥か空中に舞い上がる。空中に立ち止まったサッちゃんが渾身の光をこめた両手の剣で空を斬る。巨大なカマイタチが通りすぎたかのように『彼』の周囲の地面はズタズタに切り裂かれ、『彼』を爆心地とした赤い光の大爆発が起こった。
視界一面が真紅に染まり、さすがの『彼』もただでは済まないだろうと思われた。
――『彼』は微動だにせずその場に立ち、まとわりつくやぶ蚊を追い払って清々したとでも言うような顔をしていた。
「もう思い残すところはありませんか？」
ふらふらと地上に降りてきて『彼』の顔を忌々しげ（いまいましげ）ににらんだサッちゃんだったが、やがて観念したように、その場に力なく座りこんでしまった。もうサッちゃんに力は残されてい

ないようだった。
俺はサッちゃんのもとに走った。
「サッちゃん、今すぐ俺を食え！　諦めるな！」
「無茶を言わないで。いくら魔族でもそんなに素早く人間を食べることなんてできないわ、それにわたしはもう……」
サッちゃんは、ゆっくりとため息をついた。
「諦めるのか？　それでいいのか？　君は誇り高い魔族だろう！」
「もう、いいのよ。あなたに会えてよかった。わがままばかり言ってごめんなさいね。光希」
「だめだ！　俺はそんなの認めない！」
そこへ『彼』が口をはさんだ。
「少年、そこをお退きなさい。かわいそうですが、その娘を見逃すわけにはいかないのです」
「うるさい！　サッちゃんをおまえらの勝手な都合で裁くことなど俺が許さない！」
俺は『彼』に向かって猛然と走り、その顔面に拳を叩きつける。
しかし、白い光の皮膜に阻まれて触れることすらできなかった。
「許す、許さないという権限は人間には与えられていません。わきまえなさい、少年」
俺の身体は弾き飛ばされるように宙を舞い、空き地を囲む塀にぶつかると地面に落ちた。だが、俺の身体には痛みはおろか、かすり傷一つつけられていない。
「そこでおとなしく彼女の最期を見守ってあげなさい。耐えられなければ、目を閉じていなさい。少年」
俺は必死に立ち上がろうとするが、身体がまったく言うことを聞かない。
「ちくしょう！」
『彼』が、サッちゃんを消し去るための力を指先にたくわえる。
「やめろ！　腐れ天使！　一生呪ってやる！　いつか必ず『堕として』やるからな！」

「いいのよ、光希。わたしは……もういいの。あなたは人間として幸福をつかむのよ。天使を敵にまわすなんて考えてはいけないわ。さようなら、光希。あなたとすごせて楽しかったわ」

斬首（ざんしゅ）の瞬間を甘んじて受け入れる死刑囚のように、サッちゃんはうつむいて目をつむり、穏やかな表情を浮かべている。

光をたくわえた『彼』の指先がサッちゃんを指差した。

光の大洪水が視界を奪った。鼓膜が振動を受けてギシギシと不快感を訴える。息ができない。

自分の無力さをこんなにも悔やんだことはなかった。今まで守りたいものなんてなかったから。守ってやりたい存在ができた時には、もう手遅れだった。神だか魔王だか知らないが、俺の運命を握るそいつは、いつも俺にこんな仕打ちばかりして嘲笑って（あざわらって）いるに違いない。

「さようなら、サッちゃん。俺は忘れない。高すぎるプライドを健気（けなげ）に守り抜き、散り急いだ素敵な女の子のことを」

地上12

まぶしい光の余韻（よいん）が収まると、どこにもピントが合っていない目をした父様の顔が見えた。最愛の娘を目の前で消し去られてしまったんだから、当然だろう。

見たくなかったが、サッちゃんが最期に存在した場所を見ておこうと目をやった。

そこには、かなうはずのない強大な敵に死を覚悟したはずのサッちゃんが、穏やかな表情のまま座っていた。

そこに『彼』の姿はなかった。

「やってしまった……」

青ざめた顔をした父様がそうつぶやいた。

「え？」

「わたしは『彼』を。ああ、どうしよう。もうわたしは天界に帰れない」

「いったい何が？」

頭を抱えて文字どおり右往左往している父様が落ち着くのを待って事情を聞いた。

「わたしが『彼』を倒すにはああするしかなかった。卑怯な手を。ああ、どうしよう」

どうしようばかりで要領を得ない父様の言ったことをまとめると、父様は、『彼』がサッちゃんに集中している隙に背後から攻撃し、『彼』を消し去ったということだった。

「卑怯なもんですか。あいつは圧倒的な力で、弱った女の子を消し去ろうとしたんだから。自分の立場をかえりみずにそれを止めたあなたは、立派な父親だと思いますよ」

いつのまにか俺達のそばに来て、サッちゃんも事情を聞いていたようだ。首を傾げてこちらを覗き（のぞき）こむ愛らしい姿に、サッちゃんは本当に助かったんだという実感が湧いてきた。

俺は光の洪水の中でつぶやいた自分の言葉を思い出し、変な汗をかいた。
一人で照れている俺の前では、サッちゃんが父様に笑顔を向けていた。父様を見直したと言わんばかりの尊敬の眼差しが、甘えん坊の小さな女の子みたいだった。
「ありがとう、父様。あの時はごめんなさい。本当はすごく会いたかったの」
「わたしのほうこそ、意固地になってしまって。許しておくれ」
父様はなぜか顔を真っ赤にしている。サッちゃんも目が潤む（うるむ）ほどに恥ずかしそうな表情を浮かべた。
「こ、これからどうするの？　天界には帰れないんでしょう？」
「どうしましょう……」
しばし考え込む二人だったが、やがてサッちゃんが言いにくそうに切り出した。
「父様、魔界に来ない？　大天使である父様が魔界に来れば、それなりの待遇で迎えてもらえると思うわ」
「魔界ですか……」
ウーンと唸る父様に、サッちゃんは畳みかける。
「考えても仕方ないでしょう？　そうしなければ人間界で逃亡生活をしなくてはならないのよ？　父様にはそんなの無理だわ」
腕組みしていた父様が顔を上げる。
「そうだね。魔界へいけば君ともずっと一緒にいられることだし」
吹っ切れたような顔。泣き虫だが、度胸はあるようだ。
「そうだわ！　父様、娘のために一肌脱いでちょうだい？」
「ああ、わたしにできることなら、なんでもするよ」
「ありがとう。では、父様の魔族の徴はわたしがつけることにするわ」
「そんなことなら。どうせ、魔界へいくのだから」
サッちゃんは目を輝かせてこちらを向いた。
「光希、解決策が見つかったわ。わたしは目標であるあなたを食べ

る代わりに、大天使である父様を堕とした手柄を手土産にすることで魔界に帰れるのよ。大天使を堕とした者に誰も文句なんて言えるわけがないもの」
「でも、それで力は戻るのか？」
「そう上手くはいかないけど、父様とパパから力を分けてもらえばしばらくは平気よ。さっきの爆発を見たでしょう？　大天使の力って桁外れ（けたはずれ）なんだから。パパだって負けないくらい強いから、二人から少しずつ力を分けてもらってもどうってことないし、それなら光希に取り憑いているより遥かに効率的だわ」
「でも、自分で狩りなさいっていうパパの親心とかは？」
「あら、じゃあ食べられてくれる？」
「いや、それは……」
「冗談よ。一世一代のおねだりをして許してもらうから平気。パパならきっとわかってくれるわ。だから命は大切にしなきゃだめよ？」
「一番の死因候補だった君が言うことか？」
父様の腕にからみついて笑うサッちゃんの甘えっぷりを見れば、パパさんもサッちゃんの要求を断れないんだろうなという気がした。
「じゃあ早速、徴を」
サッちゃんは、指先からちんまりとしたレーザービームのような光を父様の胸に放った。
「はい、出来上がり」
サッちゃんは服のほころびでも直してやったみたいに、ポンと父様の胸を叩いた。
「そんなに簡単なもんなの？」
「受け入れる気持ちがあれば苦しまないわ」
サッちゃんが言うには、父様は立派な大堕天使に生まれ変わったそうだ。
当の本人は娘から手作りプレゼントでも贈られたかのように目を細めている。
「追っ手が来ると厄介だわ。そろそろいきましょうか、父様？」

「そうだね。いくとしましょう」
踊り出しそうなほどに上機嫌顔のサッちゃんだったが、俺と視線が合って目を伏せる。
「……寂しくなるな」
「わたしだって、光希とお別れするのはつらいのよ。でも、魔族などと関わっていては、光希のためにならないわ」
「何をいまさら。楽しかったよ、サッちゃんと過ごせて」
「わたしもよ。ありがとう。さようなら、光希。ちゃんと学校にいって立派な人になるのよ。悪い人になんてなったら他の悪魔に狙われてしまうんだから」
サッちゃんは俺の頬を両手で包み、キスしてくれた。
サッちゃんの細い背中に手をまわし、長いこと夢中で口付けていたが、脇に立っていた父様が
「わ、わたしも一応父親なのですよ」
と、抗議したので、サッちゃんの柔かな唇を解放した。
父様のほうを一瞥(いちべつ)して頬を赤くしたサッちゃんだったが、気を取り直して空中に大きく逆五芒星を描く。
ゆっくりとした足取りで大きな紋章に入ってゆく二人。
サッちゃんは振り返って「バイバイ」と手を振る。
手を振り返す俺。
二人の姿が見えなくなると、紋章はゆらゆら歪み、消え去った。
「さようなら、サッちゃん」
あの紋章って随分と便利にできてるんだな。魔界ってどこにあるんだ？　なんて考えながら、俺は二人が消えたあともしばらくの間、紋章のあった辺りを眺めていた。
「明日からは、また退屈なモテナイ軍団生活に逆戻りか」

地上13

俺は通常どおり学校に通う生活に戻った。
サッちゃんの夢を見なくなってからは、羽が生えたように身体が軽かった。思っていたよりも力を吸われていたらしい。
砂を噛むような日常を過ごしていると、サッちゃんと過ごした日々そのものが夢だったのかもしれないという気さえしてくる。
モテナイ定例会議で俺が
「超可愛い女の子とキスまでいったけど、その子はもう外国にいっちゃった」
と、報告したところ、
「モテないからって嘘に走るなよ。哀しい奴め」
なんてあっさりスルーされてしまった。逆の立場だったら俺もそうしていただろう。
学校では、あいかわらずユリの脚なんぞチラ見して、女子達の罵詈雑言(りぞうごん)を浴びている。とはいえ、前ほどユリの脚が美味しそうには見えなくなっていた。
残りの三学期を毎日居残りし、春休みを半分返上して補講に参加することで、留年はなんとか勘弁してもらえることになった。
明日からは春休み、気の早い桜がもう咲いている。いや、あれは梅なのかな？　それとも、桃？　まぁ、花のことはよくわからんし、そんなのどうでもいいや。どちらにしても、ポカポカ陽気の中を下校する俺の足取りは、ちょっとだけ軽かった。明日からは補講まみれとはいえ、春休みだ。
――自宅に帰り、ドアの鍵を開けようとして、異変に気付いた。鍵が開いている。
「母さん？　いつ帰ったの？」
玄関とリビングの間にあるドアが少し空いている。隙間から、テ

ーブルの上に置かれた梅屋の手提げ紙袋が見えた。
「まさか」
ドアを開けると、そのまさかがそこにいらっしゃった。
「やぁ、光希さん。いなかったので待たせてもらいましたよ。勝手に入ったりしてごめんなさい」
湯呑みを手にして、くつろいでいた父様が俺にペコリと頭を下げた。
「いえ、いいんです。でも、こちらのかたは？」
父様の隣に尋常じゃない姿の化け物が！
じゃなくて、黒山羊のようなお顔で、上半身裸のムキムキマッチョな姿のおかたが鎮座（ちんざ）されていた。座っていてこれだから、身長二メートル以上はありそうだ。
「いよぅ、俺がサッちゃんのパパだ。よろしくな、小僧」
「はぁ、よろしくお願いします」
それにしても凄い迫力だ。このパパが魔王だと言われても普通の人間なら納得して、それが気の弱い人なら泣きながら粗相（そそう）してしまうことだろう。
「高貴なお二人が俺なんかに何かご用でしょうか？」
「物怖じしないというのは本当のようだな。俺様を見てひっくり返ったり、逃げ出したりしない地上人は滅多にいない。気に入ったぞ、小僧！」
ニコニコ顔の父様が、神妙な顔を作って言った。
「実は光希さんにお話ししておかなくてはならないことがありましてね」
「俺にですか？　ところで、サッちゃんは？　一緒じゃないんですか？」
「小僧！　サッちゃんにわざわざ地上まで出てこいとでも言いたいのか？　あの子は天使の野郎に追われて心底傷ついたっていうのに！　おまえはよくもそんなひどいことが言えるな？　おまえサッちゃんをどう思ってるんだ！　好きなんだろ？　好きな女を危ない目

に遭わせても平気なのか？　人間ってのはそんな薄情者に成り下がったのか？」
　パパの拳が怒りにワナワナと震え、コタツテーブルはバラバラに砕け散った。
「いえ、そういうわけでは。ただ、会いたかったなと思っただけでして」
「……そうか、わりぃわりぃ」
　パパの手が紫色に光った気がしたのと同時に、コタツテーブルが復活していた。むしろ、素材が豪華になっているようにも見える。ためしに布団をめくって脚の部分を確認すると、マホガニーか何かの立派な木製に生まれ変わっていた。ちなみに元々はプラスチック製である。
「ところで、お話ってなんでしょう？」
「光希さん。人間のあなたにこんなことを言うべきかどうか迷ったのですが、一緒に魔界に来ませんか？」
「なんですって？」
「もちろん、人間のあなたがそのまま魔界に入ることなどできません。十分にお考えになった上で」
「旦那、あんたは話が遅えよ。ちょっと引っこんでな」
　パパが身を乗り出す。復活したばかりのテーブルがミシミシと悲鳴を上げる。
「おい、小僧！　サッちゃんに会いてえだろ？　魔界の俺達の家でみんなそろって暮らしたら楽しいに決まってるじゃねえか。だから来いよ。なっ、文句ねぇよな？　サッちゃんもきっと喜ぶぜ？」
「はあ……」
「おいおい、俺達と一緒が不満か？　それともまさかおまえ……サッちゃんに不満でもあるのか？　魔界一のいい女だぞ！　不満なのか？　おい！　返事によってはただじゃおかねえぞ、小僧！」
「まあまあ、パパさん。それでは光希さんもわけがわかりませんよ」
　父様は白い光でコタツを保護しつつ、パパをなだめる。

「じゃあ、やっぱ旦那から話してやってくれ」
「わかりました。……いいですか？　光希さんがショックを受けるといけないので、魔界にいきたいと言ったら黙っているつもりだったのですが、あなたは近いうちに亡くなることになっているんですよ」
「なんですって？」
「天界の友人に、冥府（めいふ）から送られた名簿を密かに調べてもらったので間違いありません。サッちゃんの件で我々は派手に動きすぎました。直接の手出しはされなくても、何者かが冥府に根回しして寿命を書き換えたのでしょう。だからわたし達はあなたが生きているうちにこの話を伝える必要があったのです」
「そんな……。でも、それで魔界にいけば助かるんですか？」
「徴を持たない者は魔界に入れませんから、徴がない者からは身を守れます。それに、地上人以外は歳をとらず、殺されない限り死ぬことがありませんから、寿命を書き換えられる心配もなくなります。もし、この件が徴を持つ者、つまり魔界人の仕業なら危険ですが、もしもの時は私達三人もいますので」
「他に選択肢は……？」
「もちろん人間として死んでゆくという選択肢がないわけではありません。しかし、あなたの生き死にに関して作為的なものを感じる以上、あなた一人きりで冥府の審判を受けさせるのは気が引けますし、サッちゃんもそれを望まないはずです」
「どうせ死ぬんだから来いよ。魔界はいいところだぜ、小僧」
わけのわからない事態になってきたが、退屈を抜け出せるのなら……。魔界には幸せってやつがあるかもしれないしな。
「……仕方ない。じゃあ、お願いします。死んだあとで恐ろしげなゴタゴタに巻きこまれるのはさすがにいやですから」
「それでは、ご両親に電話をかけてわたしに代わってください」
「え？」
「記憶を消していきましょう。ご両親を悲しませてはかわいそうで

す。記憶を消す前にお別れの言葉を言ってもいいですよ」
俺は東京にいる母と、父の勤め先に電話をかけた。
「春休みだからちょっと旅に出るけど心配しないでくれ。いつもありがとう」
と言っただけなのに、早まっちゃだめだとか、つらかったら東京に来ていいんだよとか、言葉を尽くして心配してくれた。早まった真似を予感させるようなこと、してきたのかな、俺。
父様がそれぞれの電話口で意味不明の言葉をつぶやいて、受話器を置いた。
「……いつもつまらないってばかり言ってごめん。さようなら。父さん、母さん」
父様は俺の肩に手を置いてうなずき、パパが大きな手で頭をなでてくれた。
「よし、じゃあおまえに徴をやろう」
「え？……ちょっと待って！　どうせならサッちゃんの可愛い指からもらいたいです！」
「徴がなきゃ魔界に入れないってのに、どうやって魔界にいるサッちゃんから徴をもらおうってんだ！　それとも何か？　サッちゃんにわざわざ出迎えろとでも言いたいのか？　贅沢言うな！」
パパにヘッドロックされてゴスっとげんこつをもらった。パパからすれば冗談のつもりなんだろうが、危うく気を失うところだった。なおもヘッドロックは続き、絞められている腕だけで頭蓋骨がメリメリと音を立てそうだ。
「うぁ。ちょっと待って！」
「つべこべうるせぇぞ、小僧！」
パパの指先が紫色の光線を放った。
シャツを引っぱって覗いてみると、胸の真ん中に五百円玉くらいの逆五芒星が刻まれていた。受け入れる気持ちがあれば苦しまないはずなのに、胸に強烈な違和感を感じて嘔吐（おうと）寸前とばかりに咳きこんだ。

「あ、てめぇ、俺から徴をもらったのを本気でいやがってやがるな。さっさと受け入れないと身体に良くねえぞ。まったく愉快な奴だ」
パパが、ガハハと楽しそうに笑っているのにつられて、父様も笑っている。
とんだ災難だったが、まあ仕方ないと思った途端に違和感がピタリと止まったから不思議なものだ。次に何かの儀式でもあったとしたら、その時は断固として、サッちゃんにやってもらうとしよう。
――そのあと、俺を覚えていない両親に問い合わせや督促(とくそく)などいかないよう、できる限りの手続きを済ませ、二人に家財道具一式すべてを消滅させてもらった。俺達の宝の山、パソコンも含めて。
「さようなら、人間界」
こうしてささやかな俺の『人生』は終わりを告げ、俺は魔族の一員になった。

第二章　魔界

パパが空中に描いた逆五芒星を抜けると、そこは山の中腹のようだった。

今が夜なのか、それとも魔界はいつでも暗いのか、眼下に美しい夜景が広がっている。魔界にも電気があるらしい。大粒、小粒の電灯が、見渡す限り広がっていた。たぶん地平線の向こうまで。

「綺麗でしょう、光希さん。魔界はこの山以外のほとんどが平地らしいのですが、街の明かりがどこまでも続いているのが見えるように、魔界イコール一つの巨大都市のようなものらしいですよ。ちなみに市街地の外は、何もない荒野なんだそうです」

「お、旦那、早速この前説明してやったことを受け売りしてるな？」

「これは失敬」

「なに、説明する手間が省けるってもんだ。旦那ほどの人なら、もう教えた事くらい全部きっちり覚えてるんだろうから、光希に色々教えてやってくれ。案内係は飽きちまったぜ」

「パパさんにはお世話になりっぱなしですからね。では、わたしにわかる範囲のことは光希さんに伝えておくとしましょう」

俺達は螺旋状（らせんじょう）にくるくると曲がった不気味な木々や、紫やピンクの毒々しい草むらからなる、いかにも魔界といった感じの山道を下りながら話した。

「今は夜なんですか？　それとも魔界はいつでも夜？」

「そうですね。魔界はいつでも夜という言いかたもできると思います。ここは人間界のあらゆる技術を駆使しても掘削（くっさく）不可能な地層の遥か下。つまり、地底なので太陽の光が届かないのです」

「そんなに深い地底にしては、ここは涼しいですね。たしか、地底は物凄く温度が高いと聞いたんですが」

「たしかに。本来ならここは灼熱地獄（しゃくねつじごく）で、魔族といえども生活するのは困難なのですが、サタン様の強大な魔力によって快適な居住空

間を確保されているのです」
「なるほど、サタン様ですか。本当にそんなおかたがいらっしゃるとは」
「まぁ、今の時代には魔界の正統なる王ルシファ様が不在だからな。サタン様が代理として王を務めていらっしゃるってわけよ」
パパはなんだか誇らしげにそう言った。きっとルシファ様やサタン様は魔界人にとても愛されているのだろう。
俺が空を飛べないので、しばらくの間山道を歩きで下ってきているわけだが、もう三十分ほど歩いただろうか？
「そういえば魔界には時計というか、時間というかはあるんですか？」
「時が流れているのは確かでしょうが、魔界には時計がありません。気にする必要がないのでしょうね。光希さんもすぐに慣れますよ」
「遊びたい時に遊び、寝たい時に寝りゃあいい。魔界には法律も規則もなんにもないからな。おまえも好きなように楽しめばいいさ。だがな、あんまりにも恥さらしなことをして、サタン様のご不興を買っちまうと地獄に送られるから気をつけろよ」
「地獄……ですか。そこは魔界とはまた別なんですか？」
「同じ地底には変わりないんですが、人間界で言うところの刑務所というか、島流し的な場所だそうです。地獄で生まれ育った地獄人というのもいるんですがね。ごく少数らしいですよ。ちなみに針の山とか血の池のような拷問は現在行われていないみたいです」
「俺達魔族は退屈とか暇が大嫌いだからな。荒れ果てた地獄の何もねえ大地に放っぽり出されるのは、ある意味一番の拷問ってわけだ」
「なるほど。ところで魔族や天使は死ぬとどうなるんですか？」
「魔族も天使も地上人も、死ねば一緒くたに冥府ってところに送られてだな。それぞれの界からの代表者による評議にかけられて、生まれ変わり先を決められるってことらしい。まあ、評議員ってのは各界のトップで、冥府の情報は極秘事項らしいからな。どこまでが本当の話かはわからん」

「なんだか恐ろしいような、生まれ変われるなら安心のような……」
「生まれ変わり先が地獄だったら目も当てられねえがな。他に俺達の知らない恐ろしい世界があるかもしれんし。それに、記憶もきれいさっぱりなくなるって話だから、俺達にとっても死が今回の生で認識してる自分という存在の終わりってことには違いねえ。まあ魔族や天使、地獄人は殺されない限り死なねえから、せいぜい強くなれってこった」
　そんなことを話しつつ、俺達は山を下り終えて市街地へと入った。目の前に広がる魔界の街は地上の現代的大都市とあまり変わらないように見えた。
　地上では見かけたことのない、それでいて特に奇抜でもない車やバイクが走りまわり、ビルが森のように茂る街並み。ネオンサインの煌めく（きらめく）歓楽街。娯楽施設やデパートなどが多いのは、遊び好きの魔界人の特徴を映し出しているようだった。なんだか、俺の目には街全体が活き活きと笑っているように見えた。
「ようこそ、魔界都市『パンデモニウム』へ。だな、光希。地上の東京やらニューヨークなんかとそう変わりがなくて驚いたろう。ここへ初めて来た奴はみんな、おまえみたいな間抜け面をするんだ。もっとこう、おっかねえ場所を想像して来るんだろうな」
　よく目をこらすと、そこらに歩いている人達は人間の姿をしている人もいれば、山羊や牛のような顔をした人もいて、半魚人みたいな人や、トカゲ人間のようなミュータントっぽい人もいる。中には父様と同様、白い翼の堕天使もいた。空を見上げると、そこにもごちゃごちゃと人が飛んでいたり、歩いていたりするのが地上と少し違うところか。
　にぎやかなパンデモニウム中心街から少し外れた辺りに出ると、アメリカ映画で見たような広々とした住宅街に着いた。
　どの家も庭に常夜灯を点して（ともして）いるので、街灯が無くても困らないらしい。たまにナイター営業のレジャー施設みたいに煌々と（こうこうと）明かりを点けている家もあった。庭で何かす

る時だけ明るくするのだろう。
　こうして眺めていると、魔界の住宅事情はなかなか良好のようだ。広い土地にゆったりとした平屋や二階建てが悠々と建てられていた。日も当たらないのに、青々と茂っている芝生の庭は、映画スターでも住んでいそうな高級住宅街を思わせた。
　その中の一軒、常夜灯に照らされて真っ白く浮かび上がる、横に長い直方体のモダンな大邸宅。そこに続く私道を歩きながらパパが言った。
「着いたぜ。ここが俺達の家だ」
「凄い家ですね。やっぱりパパほどの人になると違うな～」
「まあ、俺様が作った家だからな。サッちゃんはもっとこう、尖塔（せんとう）とか門に跳ね橋のある城みたいな家を建てようって言うんだが、どうにも街並みに合わねえだろ？　ちょっと前にもそのことで引っかかれたぜ」
　パパほどの人でも、愛しいわがまま姫には手を焼いているらしい。

魔界2

「サッちゃんには何も言わないでおまえを連れてきたからな。さぞ、びっくりするだろうぜ」
父親コンビがニヤニヤと顔を見合わせている。
玄関に辿り着くと、パパが扉を開けた。
「サッちゃん、今帰ったぞ！」
パパが広い屋敷中に轟く（とどろく）ような声で叫ぶと、二階のほうから微かに懐かしい声がした。
「おかえりなさい」
それきり反応がない。顔を見合わせ、苦笑する一同。
「お土産（おみやげ）があるから降りてこいよ～。サッちゃんの大好物だぞ」
大好物って……。もう食われる心配はないと思うが、ちょっとな。
しばらく三人で玄関に突っ立っていると、コツコツと大理石の床を歩く、のんびりした足音が近付いてきた。しばらくすると、玄関の真ん中から真っ直ぐのびる階段の上にサッちゃんが顔をのぞかせた。
「パパ、わたしは今何も欲しくないって言ったじゃな……え？……光希！」
サッちゃんは階段を駆け下りようとして足を滑らせ、あわや転落かと思ったところで一瞬翼を出して空中に浮かび、舌をちろっと見せながら俺の前に着地した。
「もう、パパも父様も人が悪いわ。光希を連れてくるなら先に言っておいてくれればいいのに」
透け透けフリフリの黒いベビードールがサッちゃんの部屋着らしい。その裾（すそ）を両手で引っ張るようにモジモジしながら抗議している。久しぶりに会ったサッちゃんの扇情的（せんじょうてき）な姿に頭がクラクラした。
サッちゃんは俺の両手をとると、嬉しそうにブンブンと振りまわし、俺に抱きついた。久しぶりの甘い香りが心地いい。

「会いたかったわ、光希」
「俺もさ、サッちゃん」
こんな時に気の利いた台詞の一つも言えない自分に苦笑しながら、時を忘れてハグしていると、背後からわざとらしい咳払いが聞こえた。
「お楽しみ中すみませんが、玄関先に突っ立っているのもなんですから、中に入りませんか？」
あまり刺激すると父様はともかく、パパの冗談半分のげんこつ一撃で撲殺されかねないので、俺は首にからみつくサッちゃんをさりげなく引っ剥がして（ひっぺがして）、リビングに向かった。
魔族の徴を受けた俺もまた人間同様の食事は必要ないらしいが、
「光希はまだ慣れていないから、何か作ってあげる」
と、サッちゃんが手料理を振舞ってくれることになった。
はりきったサッちゃん手製の食べきれないほどのご馳走と、次々に注がれるワインで、地上人のままの俺ならとっくにトイレで昏睡状態になっていたところだが、この身体は満腹で動けなくなることも、飲みすぎて悪酔いすることもないらしい。便利な身体だが、少し寂しい気もする。
地上で過ごした時とは違って、かいがいしく世話を焼いてくれるサッちゃん。残念ながら？　もうベビードール姿ではなく、スカートが膨らんだ黒いワンピースに真っ白なフリルエプロンをしている。頭のてっぺんに黒くて大きなリボン付きカチューシャを着けた姿は、さながらアリス・イン・パンデモニウムといったところだ。これはこれで萌……。
そうやって幾日にも相当するであろう間パーティは続いた。時間の区切りがあまり意識されないこの世界ではパーティはいつ終わるのだろうと心配し始めると、サッちゃんが気を利かせて寝室に案内してくれた。
案内された寝室は濃い色のフローリング敷きで、黒一色のモダンな家具が配置されていた。真っ白な壁紙に蛍光灯が反射して少しま

ぶしかった。部屋自体は広々としていて、歩くだけで運動不足が解消されそうなくらいだ。
「ここが光希の寝室よ。よそに自宅を持ってもいいけど、しばらくはここがあなたのお家だから、自由気ままに過ごしてくれていいわ。みんなでいたほうが楽しいでしょう？　あの二人なら細かいことを気にしたりしないから、付き合いきれないと思ったら、さっさと退散するのよ？」
「ああ、ありがとう。サッちゃん」
「じゃあ、おやすみなさい、光希。わたしはもうちょっとパーティに参加してから眠るとするわ」
「おやすみ、サッちゃん」
扉に向かって歩き始めたサッちゃんが振り向いて言った。
「あ、そうそう、お風呂に入りたかったら、そこの奥の扉よ。わたし達の身体は汚れないけど、気持ちいいから入ったら？　この家にあるものは自由に使ってくれてかまわないわ。でも、わたしのお部屋には入っちゃだめよ。恥ずかしいから。じゃあね」
サッちゃんは俺にウィンクするとリビングへ戻っていった。
こんな立派な大邸宅で風呂付きの専用寝室をあてがってもらえるんだから、魔界に来て正解だったな。なんて考えながらゆっくりと風呂を堪能(たんのう)し、俺は眠りについた。

魔界3

――目を覚ました俺はベッドに横たわったまま、ふと考えた。
自由気ままに過ごしていいと言われても、何をしようか？　学校に通う必要もなく、就職の心配をする必要もないこの魔界で、何を目指して暮らしていけばいいんだろう？　父様は「すぐ慣れますよ」と言っていたが、慣れるしかないとも言えるんだろうな。しばらく地上に戻れないのは明白だし。
屋敷の中をぶらぶらと探検してリビングに入ると、パパと父様がソファに座ってテレビを見ていた。
「おう、光希、起きたか」
「おはようございます」
「おはよう、光希さん」
窓の外はあいかわらず真っ暗だが、起きたらおはようでいいんだよな？
空いているソファに腰を下ろし、テレビの画面を眺める。何やら不思議なスポーツの中継がかかっていたが、一日中に相当するぐらい見続けても、ルールというか、ゲームの目的や法則といったものがさっぱりつかめなかった。
球技かと思えば格闘技でもあり、どういうわけか双六（すごろく）の要素も取り入れた、なんとも気長なスポーツである。そのわりに父親コンビは画面に熱狂的な声援をおくっているから、わけがわからない。全貌が見えたかと思えば即座に次の見知らぬ種目が混ざってくるので、俺はそのスポーツを理解するのを諦めた。
その間、幾度となく挟まれたＣＭでは、サッちゃんが言っていた『一部の馬鹿な食通』が好みそうな、残酷な食人のためのグッズなどが紹介されていて、これはサッちゃんでなくとも気分が悪くなって当然という気がした。
父親コンビが謎のスポーツ観戦に熱中して、大してかまってもく

れないので、俺はサッちゃんを起こしてみようと思い立った。さっき探検した時に部屋の位置は確認しておいた。

俺はサッちゃんが転げ落ちそうになった階段を上って、二階に来ていた。

その扉には部屋の主を示すボードが吊り下げられていた。つや消しゴールド色の金属で作られた薔薇の蔓がからまるデザインの枠に、サキュバスのお部屋と書かれたコルク板を取り付けたものだった。

扉をノックしてみる。が、返事はない。サッちゃんが眠ったと思われる時からも相当経過しているように思うのだが、魔族の眠りとはそんなに長いものなんだろうか？　もしも年単位でサッちゃんが眠るのだとしたら、俺は暇でおかしくなってしまうかもしれない。

恥ずかしいから入っちゃだめと言われたが、ふとサッちゃんの寝顔を覗いてみたい衝動に駆られ、扉のノブをひねる。

鍵はかかっていないようだ。

音を立てないようにゆっくりと扉を開け、抜き足差し足で侵入する。

天井が高く、広さも学校の教室くらいは悠々とありそうだ。赤絨毯の敷き詰められた部屋の真ん中に、目が痛くなるような真紅の天蓋付きベッドが見える。家具のほとんどが、ことごとくまぶしい赤で統一されているのは、黒ばかり着るサッちゃんの部屋としては意外だった。優しいオレンジの間接照明が点されているのは好都合だが、これはサッちゃんが闇を怖がるということなのだろうか？　天蓋から下がる黒いレースのカーテンが閉められているので中の様子を詳しくうかがうことはできないが、サッちゃんが可愛い寝息をついているに違いない。

地上の動物やら、正体不明の魔物やらの縫いぐるみ、人間や魔族らしき女の子の人形なんかが整理整頓されていながらも埋め尽くす、甘い香りがする部屋。俺のにらんだとおり、サッちゃんはかなり女の子らしい女の子なんだと予想の裏付けをとりつつ、音を立てない

ようにジリジリと進んでゆく。
あと数歩でサッちゃんの寝顔が拝めるという辺りまで来ると、冷たい感触の『何か』が俺の足首をつかんだ。
「うわ！　何だ？」
思わず声を上げてしまった。俺の足首を握る何かを確認すると、それは床から上半身だけが露出している、半透明の、サッちゃんによく似た幽霊だった。ご丁寧なことに、幽霊になってもロリータを着ている。ただ、サッちゃんが着ない白ではあったが。

魔界4

サッちゃんによく似た幽霊は俺と目が合うとニマーっと笑った。
「や、やあ。サッちゃん……だよな？　お邪魔してま……」
幽霊は俺の足首をつかんだままピョコンと跳び上がったかと思うと、猛烈な勢いで地下の方向へと俺を引きずりこんでゆく。どういうわけか、床を次々にすり抜けた幽霊と俺は、地下牢を思わせるような薄暗く、積み上げられた石の壁がむき出しになった部屋にいた。
……なんか、白骨死体のような物体が、あちこちに転がってるんですけど、気のせいでしょうか？
俺の脚を解放した幽霊が、ひんやりと湿った空気の中を飛びまわる。
やがて飛ぶことに飽きたのか、クスクス笑いながら俺の目を見つめて、両目から怪しい光線を放った。俺の身体は硬直して身動き一つできなくなる。
「サッちゃん、冗談はやめてくれ！　俺が悪かった！　謝るから、な、な」
手を合わせて許しを乞おうにも、身体が言うことを聞かない。
幽霊は深いエコーをかけたような不気味な笑い声を時折上げながら、ゆっくりとにじり寄ってくる。その手には、いつのまにか死神が持っているような大鎌が握られていた。
「サッちゃん！　冗談になってないって！　やめてくれ！」
幽霊は、大鎌をプロゴルファーのような美しいフォームでバックスイングして、間髪入れずに予想される最悪かつ唯一の行動をとった。俺の視界は目まぐるしく回転し、止まったところで目を上げると、そこには首のない俺の身体が立ち尽くしていた。
「うわあああ！」
俺が首を刈られた驚きと痛みを腹いっぱいの悲鳴に乗せて表現していると、いや、腹は今あっちか。それはともかく、軽快な着地音

とともに厚底の黒いストラップシューズが見えた。
　こっちのサッちゃんは、いつもどおり黒いロリータ（サッちゃんいわく、退廃の精神を伴わない場合は黒くてもゴスロリと呼ばないそうだ）を着ていて、スカートをフワフワさせながら俺に近付いてくる。
「騒々しいと思ったら何やってるのよ、光希。奥のお部屋で着替えしていたから念のためにゴーストを仕掛けておいたんだけど、本当に引っかかっちゃうなんて馬鹿ね。あーあ、首を刈られちゃって」
　サッちゃんはしゃがみこんで、俺の額を突っついた。視界が一回転半して石の天井が見えた。
　サッちゃんが俺を拾いに立ち上がる。
「あ、いいもの見えた」
　サッちゃんは色の統一を重視するらしい。
「あ、ちょっと！　……馬鹿」
　顔を赤らめたサッちゃんは、俺の首を石の床に伏せるように置き直す。
「わたしの言いつけを無視するなんて、折檻してあげなくちゃ。……ねえ、光希は何が怖い？」
「俺に怖い物なんてないさ！　むわっはっはっは」
　目の前の床に邪魔されて、モゴモゴと強がる俺。
「暗闇なんてどうかしら？」
「それはサッちゃんだろ？」
「ちょ、ちょっと、どうして……？」
　一番最初に自分の苦手を言ってしまうとは……かわゆい。
「むっふっふ。図星だったようだな、サキュバス君！」
「ふ～ん。そういう態度を取るのね」
　クスクス笑いが石の壁に反射している。
　サッちゃんの両手に包まれる感触があって、俺の頭部は正常な方向、つまり首の付け根を下にして置き直された。サッちゃんの足が視界から消える。浮かび上がったようだ。

「な、なにをするつもりなん……ですか？」
「わたしにはね、怖い物がた～くさんあるの。女の子ですもの。例えば……」
周囲に無数の小さな気配を感じた。それらはやがてカサカサと音を立て……。
「やめてくれ～！」
「口を開けると……入っちゃうわよ？」
無数の気配は蜘蛛やムカデ、ゴキブリなどの虫達だった。それらが俺の顔面にびっしりと……。切り離されているはずの背筋がゾクゾクと寒気を感じ、叫びたくなるが、口を開けるのは絶対に嫌だ。
ム～ム～唸り続けて気を失いかけたところでおぞましい感触が消える。恐る恐る目を開けると、サッちゃんの靴が見えた。
「あらあら、泣いちゃったの？　お鼻チ～ンしましょうね？」
レースに縁取られた可愛らしいハンカチを鼻に押し付けられ、情けなく鼻をかませてもらう俺。
「光希は虫が怖いのね。覚えておくわ」
「虫が怖いとか、そういう問題じゃないだろ！」
「あらいやだ、虫嫌いじゃないの？」
「あんなにごっちゃりいたら、誰でも嫌だろ」
サッちゃんは聞こえよがしにため息をつく。なんだか楽しんでいるようだ。
「わたしの弱点を知ったからには、光希の弱点も教えてほしいの。それが公平というものでしょう？」
――そのまま俺は、ライオンや空中を泳ぐ鮫にいたぶられ、雷に撃たれ、壁から湧き出てくる血の池で溺れた。妖怪、ゾンビ、ミイラ男などのありとあらゆる化け物に襲われ、火に焼かれたりもしたが『通常どおり』の恐怖しか感じなかった。
「もう、疲れるじゃないの！」
「だったら、やめてくれよ……」
通常どおりとはいえ、怖いものは怖いし、痛いものは痛い。精根

尽き果てて、自分がどこにいるのかもわからなくなりそうだった。
「仕方がないわね。素直に言えば許してあげるわ。で、何が怖いの？」
俺が唯一生理的嫌悪感を感じる物。それは……
「……鳩だ」
「ハトって、鳥の鳩？」
「ああ。神社の前で豆をやったら、大量の鳩が押し寄せてきたことがあって……」
「鳩を怖がる人がいるなんて、意外だわ」
バラバラと音がして、俺の周りに煎った大豆のような豆が散らばる。
「約束と違うじゃないか！　ずるいぞ、サッちゃん！」
「あなたはわたしとの約束を一つ破ったでしょう？」
前方の暗闇から、ホロッホ～、バサバサという音が聞こえてくる。
「た、頼む！　本当に駄目なんだ！」
「その言葉を待っていたのよ。しばらく一緒に暮らしてもらおうかしら？」
奴等が豆をついばみながら近付いてくる。首の辺りの羽毛が虹色に輝く様子がグロテスクで、どうしようもない。
鳩ってこんなに大きかったっけ？　と思うほどに近付いてきて取り囲まれた時、俺は声を上げ、涙を流して笑っていた。なぜ笑っているのか自分でもよくわからないままに。
「なるほど、鳩嫌いは本当だったようね。怖い思いをしたでしょうから今回は許してあげるわ」
サッちゃんがパチンと指を鳴らすと奴等は消え去った。
「……助かりますです、はい」
これで『許してあげる』なのだから、本当に怒らせたら……。先が思いやられる。
「それにしても、わたしのゴースト程度にあっさりやられちゃうなんて、パパにトレーニングしてもらったほうが良さそうね。魔界は

楽しいところだけど、自分の身は自分で守らなくてはいけないわ。わたし達だって、いつもあなたを守ってあげられるとは限らないのよ？」
「トレーニングか。それをやれば俺もサッちゃんみたいに強くなれるのか？」
「まあね。わたしの戦闘スキルはすべてパパに仕込まれたものよ。苦しいとは思うけど、暇を持て余しているならやっておいたほうがいいわ」
　サッちゃんは満足げに俺の頭を撫でている。
「ところで、俺、元に戻れる？」
「あ、忘れてたわ」
　生首の俺は、サッちゃんの細くて形のいい指に包まれて、身体の上に据え付けられた。傷口がピッタリと合わさるように注意深く位置の微調整が行われたあと、切断された喉の辺りにサッちゃんの手が当てられ、赤い光を放つ。
「お、元に戻った。サンキュー、サッちゃん」
「これに懲りたらもう夜這い（よばい）なんてかけてはだめよ？」
「断じて夜這いなんかでは……。ちょっと寝顔を覗いてやろうかなと、その、悪戯心で」
「どちらでもいいわ。言い忘れていたけど、地上でしたキスは例外よ。おいたが過ぎると折檻（せっかん）だからね」
「は、はい……以後気をつけます。ところで、アレって人間の……？」
　と、俺は転がっている白骨死体らしきものを指差して訊ねた。
「アレね。我が家では地上の極悪人をパパがさらってきて食べることになっていたけど、最近は父様のお友達が力に変換される食物を密かに送ってくれているの。だから、もう人間を殺める（あやめる）必要もないわ。安心した？」
「そうか、良かった。俺に食人は無理だ」
「わたしもよ。極悪人だって生きる権利はあるんだし、かわいそう

なものはかわいそうだもの」
　地上でしたキスは例外……。恋人じゃないと釘を刺されちまったようなもんだな。魔界のモテナイ軍団に転入届けでも提出するか。そんなことを考えながら上る階段は、ほの暗く、長く、もどかしかった。

魔界5

サッちゃんから事情を聞かされたパパは愉快そうに、
「サッちゃんに夜這いなんざ、十年早い」
と、俺にげんこつをはった。
とはいえサッちゃんがいなくなった途端、サッちゃんの部屋のトラップ攻略法など密かに教えてくれるあたり、いったい俺に何をしろと言っているのか。まあ、このパパでさえ逆さ吊りにされたことがあるというのだから、当分夜這いはやめておこう。命が幾つあっても足りない。
と、冗談はさておき、早速トレーニングを開始することになった。丁度例のスポーツ観戦が終わって退屈していたところだったらしい。サッちゃんと父様はデパートに買い物にいくと言って出掛けた。俺もサッちゃんとデパート探検にいきたかったのだが、
「逃げられると思ってるのか？」
と、パパがニヤニヤしていたので、おとなしく二人を見送るしかなかった。
「サッちゃんは買い物にいくと言ったけど、魔界にはお金の概念とかあるんですか？」
「まあ、一応はあるさ。かっぱらいをやったって捕まるわけじゃねえが、多くの魔界人は盗みを恥だと思っているからな。魔界人は名誉と恥を行動の基準にしてるってわけだ」
「みんなどうやってお金を稼ぐんですか？」
「おまえにもあとで教えてやるが、悪魔や天使ってのは必要なものを『物質化』することができるんだ。ちょっとした高等技術だがな。だから、需要の多いものを作って店に売りつけてやれば幾らでも金は手に入る」
「お二人やサッちゃんは当然物質化だってできるんでしょ？　買い物にいく必要なんてあるんですか？」

「サッちゃんに言わせれば、センスのいいデザイナーとかいう野郎が物質化した洋服やらアクセサリーやらが欲しいんだとよ。あの無駄に布の多い服は自分で作っても、なかなか上手くいかないらしいぜ。前に自分で作って、何も着ないより恥ずかしいような服を作って以来、あんまり難しい服は作ってないようだ。試着してみて気付いた時の真っ赤な顔ったらなかったぜ。可愛いのなんのって」
「それは見てみたかった。なるほど、それで買い物なんですね」
「今頃旦那はサッちゃんのおねだりにあってるだろうさ。サッちゃんと買い物にいったが最後、サッちゃんのおねだりにあうと、さすがの俺様でさえどうしても断われねえんだよな～。小さい娘っこみたいに目をウルウルさせてよ、首をちょこっと傾げてジーっと黙ってこっちを見てるんだ。そうなったらもう、わかったわかったって言うしかないだろ？　いや、金なんざなんとでもなるんだ。だがな、サッちゃんもわかってて、こう、甘えてくるんだよな……」
　俺は聞こえよがしに咳払いをして続けた。
「じゃあ物質化ができない人達が店員やサービス業についてるってことなんですね」
「それと酔狂（すいきょう）な奴等がな。堕天使や人間出身の奴等は真面目なのが多いから、仕事もしないで遊んだり、だらだらしているのが性に合わんらしい。まあ、地上のよくできた経済システムとは違うが、それなりに機能してるようだぜ」
「なるほど」
「よし、お喋りはこのくらいにしようぜ。頭使うのもいいが、今はおまえの戦闘能力を鍛えるのが先だ。いくぞ」
　庭に出ると、パパは屋敷の外壁にあるスイッチをひねって庭のライトを最大にした。サッカーでも野球でもできそうな広々とした芝生の庭が、全貌を現わした。
　いかついパパのトレーニングといえば、腕立てや腹筋を何千回もやらされるのだろうなとげんなりしていたが、そのトレーニングは意外なものだった。

「おまえまだ飛べないんだったな」
「はい」
「よし、ちょっと痛いが我慢しろよ」
俺が返事をするよりも早く、パパは爪で俺の背中に逆五芒星を刻む。背中に差しこまれた手がモゾモゾする痛みに耐えていると、背中に今までと違った感触が芽生えてくる。
「よし、翼を引っ張り出したぜ。これでおまえも練習すれば空を飛べる」
「おお、すげー！」
振り返って見てみると、俺の背中に身の丈ほどの、カラスによく似た翼があった。パパの背中にも同じようなのがあるところを見ると、サッちゃんに引っ張ってもらえばドラゴンみたいな翼になっていたのだろうか？
試しに動かしてみると、不思議と翼を動かす感覚に違和感はなかった。俺はパパに教わりながら、翼を出したりしまったりする練習をしたあと、ホバリングのように空中に止まる練習をし、ついにはゆっくりだが自由に飛びまわれるようになっていた。
「いいか、光希。この翼は飛び上がるきっかけと、高度を維持するためのものでしかねえ。主な推進力にはオーラのパワーを使うんだ。このオーラの活用法ってのは他にも色々使う基本だから、しっかり鍛えろよ」
「鍛えたら俺もサッちゃんみたいなスピードで飛んだりできますかね？」
「まあ、それはおまえの素質次第だ。あの子はまどろっこしい喋りかたに似合わず、異様にすばしっこいからな。才能ってやつだ。オーラを動作に乗せるのが並外れて上手いってことなんだろう。時にはこの俺様よりもな。よし、次は武器の物質化だな」
そう言ったパパは、いつのまにか右手に巨大な斧を支え持っていた。二メートルを超える身長のパパよりも長い持ち手の斧は、両側に突き出る刃の部分まで入れたら三メートル近くはあるだろうか。

黒曜石(こくようせき)のやじりのように黒くて痛々しい無骨なフォルムを、紫のオーラが包んでいた。パパは顔こそ山羊っぽいものの、巨大斧を携えた姿は図鑑で見たミノタウロスとかいうのとそっくりだ。あっちは牛の顔だったっけ？　あまりに似合うので俺は笑いを噛み殺すのに苦労した。

「俺がこいつを取り出したのが見えたか？」

「いいえ、全然」

「そうか。物質化は俺の得意分野だからな。それなら、サッちゃんが剣を取り出すのを見たことはあるか？」

「はい、何度か」

「じゃあ、同じように逆五芒星を描いてみろ」

いつかサッちゃんがやっていたのを真似て空中に逆五芒星を刻む。だが、何も起こらない。

「おまえ、何やってんだ？　なんだ、そのへっぴり腰は。それにまるで図形がでたらめじゃねえか」

パパはしゃがみこんで地面を盛大に叩きながら笑っている。体感震度四といったところか。

ようやく地震笑いが収まると、パパはテニスのコーチみたいに俺の背後から腕をつかんで、何度も図形の描きかたを反復させた。

ああ、これもサッちゃんに教わりたかった。きっとこの体勢なら背中に柔らか～い……。

「こら、真面目にやんねえと、やべえものを呼び出しちまうぞ。いいか、ここはこう、真っ直ぐだ」

いいかげん身体に紋章の描きかたが染み付いたところで、パパの手を離れて素早く空中に逆五芒星を描く。指先の軌跡が光を放ち、サッちゃんが描いたのと同じ紋章が現れた。

「よし、武器を念じて手を突っこんでみろ。何かないか？」

言われたとおりにすると、そこに何かあるのがわかる。握ってみると剣の柄(つか)のようだった。一気に引きずり出してみると予想外に巨大なものが出てきて、思わずそいつを落っことした。

地面に横たわっているのは、俺の百七十センチの身長を超えそうなほどの巨大な剣だった。相対的にはスマートに見える刀身もかなりの幅広で、俺なんかが使うより騎士の銅像が持っているほうが似合いそうなぐらいだ。使い勝手が良さそうには見えないが、銀色の刀身に青いオーラをまとっている姿は純粋に美しい。柄と鍔(つば)が一体になった部分が龍の干物みたいな気味の悪い形をしているのは、サッちゃんのものと似ている気がした。

「ほほう、こりゃまた大物だ。この逆五芒星には知ってのとおり色々な使い道があるが、武器を念じた場合には、その持ち主に最も適したものが出現すると言われている。おまえの体格にはちょっくらでかすぎるようにも見えるが、まあ使えば馴染む（なじむ）だろ」

俺に最も適した剣とやらを担ぎ（かつぎ）上げようと腰に力を入れて、よっこらせと持ち上げると、勢い余って尻餅をついた。取り出した時には驚いていて気がつかなかったが、予想に反して剣が軽かったせいだ。パパが腹を抱えて笑っている。

「これ見た目よりも全然軽いや。こんなに長くてごついのに」

「地上人だった頃のおまえだったら持ち上げるどころか、一ミリも動かせなかっただろうな。魔族の身体に感謝しろよ。ところで、今はまだオーラ武器は使わねえから、しまっとけ」

再び空中に紋章を描き、剣をしまった。

がさつそうな見た目に反して教えかたが上手いパパのおかげで、俺は魔族の身体とオーラの活用法を色々と学び、ひととおりの戦いかたを覚えることができた。あとは実戦だと言うパパに従って組み手をしていると、サッちゃんと父様が帰ってきた。父様は両手にたくさんの紙袋を提げて（さげて）いた。

「やあ、やってますね。光希さん頑張って」

「パパ、あんまり光希をいじめないでね」

二人は満足げに談笑しながら、邸内へと引っこんでいった。

魔界6

地上では運動嫌いだった俺だが、久々に身体を動かすのは爽快だった。
「おう、おまえ楽しんでやがるな。好きなことは上達が早い。いいことだ。よし、これでもくらえ」
パパは指先にオーラをたくわえ、俺を執拗(しつよう)に射撃してくる。間一髪のところでかわし続けた俺だが、ついにその内の一発が胸に命中してしまった。俺の身体は空母から飛び立つ戦闘機のように弾き飛ばされ、広い花壇のど真ん中に墜落した。大の字になってのびていると、お盆に飲み物を載せて歩いてくるサッちゃんが見えた。
「こらー、せっかく植えたお花をこんなにしてしまって。もう！」
サッちゃんは近くにあったテーブルにお盆を置くと、おれの身体を抱き起こしてくれた。今回はスカートをしっかり押さえて事故を未然に防いでいる。
「ごめん、サッちゃん……」
喋ると光弾が当たった胸が苦しくて、それ以上の言葉が続かなかった。
パパが降りてきて花壇のふちにあぐらをかいた。
「わりい、やりすぎちまった。とりあえずこれぐらいにするか」
「俺は……まだやれます。治療して……もら……えば」
「おお、見掛けによらず根性あるな。だが、オーラで負った傷ってのは治療してもあんまり効果がないんだ。オーラを帯びてない武器でどこぞの間抜けみたいに首をはねられようがどうしようがまったく問題ないんだがな。まあ、治療しないよりはましだからやりかたを教えてやる。自分でやってみろ」
パパの説明を受けながら胸の傷に手を当て、オーラを放出した。すると、傷口がどんどん痛みを増してきて、俺の顔は苦痛に歪んだ。
「やめろ、光希。ちょっと待て。いいか、治療する時は治したいと

いう気持ちにしっかり集中しろ。いいかげんにやると自分を攻撃しちまうぞ」
　また自分を攻撃してしまうんじゃないかとビクビクしながらも、今度は集中して胸の傷にオーラを当てる。すると、痛みが徐々にひいていくのがわかる。
「よし、上手くいったな。だが、さっきも言ったようにオーラの傷は治療しても痛み止めくらいしかできねえ。あとはおとなしく寝て治せ」
　パパは俺の肩を一つ叩くと、屋敷の中に引き上げていった。その背中に俺は、
「ありがとうございました」
　と、声をかけ、今度は花壇に気遣いながら大の字に横たわった。花壇の修復を終えたサッちゃんがグラスを俺に手渡してくれる。
「光希は飲みこみが早いわね。お買い物から帰ってきたら、もうパパと戦っているなんて。見直したわ」
　照れ隠しに冷たいお茶を一気に流しこんだ。まだ多少胸の傷に響いた。
「花、ごめんな」
「いいのよ。花だってオーラで焼かなければ修復できるから」
「そっか。ところで、日光がなくても花が育つなんて不思議だな」
「魔界の植物は最初に少し魔力を与えてやれば、あとは土からの養分のみで育つのよ」
「へえ。それにしても可愛い花だ。フワフワしてて、優しくて、純情な乙女って感じ。それに、甘くて心地いい香りがするな～。あ、いてて。棘（とげ）が刺さった」
「魔界の花は……魔力を与えた人の内面をそのまま反映するの……」
「そ、そうなんだ。ってことは……」
　うつむいて烏瓜（からすうり）みたいに真っ赤な顔をしているサッちゃんとの間に、こそばゆい沈黙が続いた。やがて顔を上げたサッちゃんに促され、俺達は邸内に引き上げた。訓練疲れからか、部屋に戻った俺は

泥のように眠った。

魔界7

目が覚めてリビングに顔を出すと、三人ともなんだか深刻な顔をしてテレビを見ていた。
「おはよう。何かあったの？」
「おはよう、光希。今テレビで中継しているんだけど、市街地を鬼の集団が襲っているのよ」
画面を見ると、虎のパンツの代わりに革パンや金銀のチェーン、たくさんのピアスをジャラジャラ身につけた、一昔前の過激なロックシンガーみたいな鬼達が映っていた。
そのヘビメタな鬼達が、パンデモニウム中心街でショーウィンドウを壊して略奪したり、道行く人や応戦に駆けつけた強そうな魔族の方々を攻撃している様子が、リアルタイムで放送されていた。街灯なども壊されているのか、画面は薄暗かった。
「あの鬼達も魔界の住人なの？」
「いいえ。彼らは本来地獄に住んでいて、魔界には来られないはずなのに。地獄で何か異変が起きているのかもしれないわ」
位の高そうな魔族の方々も、数にものをいわせて襲いかかる鬼の群れに苦戦しているようだった。
「旦那、俺達もちょっくら助っ人にいくか」
「そうですね、見過ごすわけにはいかないでしょう」
「わたしもいくわ」
「いや、サッちゃんは光希と留守番しててくれ。光希はまだ実戦レベルじゃないからな。万が一、こちらへも鬼の集団が来ないとも限らん。もし鬼が来てやべえと思ったら家なんか捨てて城に避難するんだぞ？」
「わかったわ。気をつけてね、二人とも」
「光希、サッちゃんから離れるなよ。よし、じゃあいってくるぜ」
父親コンビはリビングから庭へと続くガラス戸を開けて、闇空の

中を市街地へと飛び立っていった。
　サッちゃんと隣あってソファに腰を下ろすと、また二人で画面を食い入るように見つめた。怪我人が出るたびにサッちゃんは悲しそうな表情で息を詰まらせ、俺の手を握り締めた。
「地獄でいったい何が起こっているのかしら？」
「そうだな、あまりひどいことになってなければいいけど」
　しばらくテレビにかじりついていると、大物魔界人と思しき（おぼしき）人達が続々と集結するのがわかる。その中にパパと父様の姿を見つけて「あ、いたいた！」とサッちゃんは喜んだ。その後すぐにハッと顔を赤らめ、気まずそうにつぶやいた。
「……不謹慎だったわね。ごめんなさい」
「気にするなよ、家族がテレビに映ったのを喜んじゃうのは誰でも同じさ」
　大物が大勢現れたおかげで形勢は逆転しつつあったが、それでも鬼の数が多い。そう思いながら画面を見ていると、一人のハンサムな青年が飄々（ひょうひょう）として鬼の群れの真ん中に突っ立っている光景が映し出された。
「光希、見て。サタン様よ」
　なるほど、テレビ越しでも格の違いがひしひしと伝わってくる。鬼達は、近付いたら終わりとばかりに遠巻きにサタン様をにらみ、うなり声を上げるだけだった。サタン様が人差し指をクイっと引き上げる動作をすると、混戦状態の中から鬼達だけが宙に浮かび上がる。
「ここは君達の居場所じゃない、帰りなよ」
　サタン様がつぶやくと、一瞬にして鬼の軍団が消え失せた。
「ああ、サタン様。勿体のう（もったいのう）ございます……」
　サッちゃんが俺の横で目を潤ませて画面に話しかけている。
　キザな野郎だぜなんて思いながらも、代理とはいえ百戦錬磨の猛者どもを統べる（すべる）王はやっぱ違うなと感心せざるを得なかった。

魔界8

――鬼達の市街地襲撃事件があってから、己の非力さを克服しなくてはならないと思うようになっていた。『彼』の一件でも、今回の件でも、俺はサッちゃんを守ってやるどころか、サッちゃんのお荷物でしかなかったのだから。

サタン様のようにボソッとつぶやいただけで鬼達を地獄に送り返すような大技は無理だとしても、サッちゃん一人ぐらいは守り抜ける男になりたかった。それから俺は起きている間じゅうパパと組み手をし、時には交代選手として父様まで引っ張り出して相手をしてもらっていた。

――戦っては疲れきって眠るを何度繰り返しただろう。

ある時、異変が起こった。とてつもなく広かった庭が、なんだか狭く思えてきた。

これまで巨人のように感じていたパパの存在感が等身大の人間ぐらいにまで小さく思えた。つるはしで頑丈な岩盤を削っていてきっかけを見つけ、掘り進める道を見つけたように、パパに攻撃が効くようになっていた。

「お、おい。光希、ちょっと待て」

パパがそう言った時には俺の剣がパパの左腕を斬り落としていた。練習用の剣を使っていて良かった。

「ご、ごめんなさい」

「いや、いいってことよ」

パパは左腕を拾い上げ、何事もなかったように接合した。今まで何度もばらばら死体さながらにされてきた俺だが、ちょっと気まずい。うつむいていると、パパが俺の背中を叩いて言った。

「おまえ、気付いてたか？　俺はだいぶ前から手加減なんかしてなかったんだぜ？　ここまでやるようになるとは正直驚いた。おまえ、本当にただの地上人上がりなのか？」

「そう言われても……他には心当たりないです」
「そのうち旦那と二人がかりでも勝てなくなるかもしれねえな。楽しみだぜ、婿殿」
「む、婿殿……？」
「ここまでやるようになったからには文句はねえぜ。サッちゃんをおまえにやる。免許皆伝ってやつだ」
パパに握手を求められて応じた。拳を交えた者同士、パパの手は熱かった。
「でも、サッちゃん本人の気持ちをまだ聞いてません。悪戯したら折檻よって言われてるくらいだし……」
「サッちゃんは、おまえが魔界に来た時から首をろくろっ首みたいにしてこの時を待ってたんだぜ。『パパが一目置くような男になったら、プロポーズするから言ってね』ってな。だが、光希にも男のメンツってもんがあるだろ？　サッちゃんより先にプロポーズしてびっくりさせてやるってのはどうだ？」
「は、はい。それはいいっすね。……でも、指輪とか持ってないし」
「おっと、武器以外の物質化はまだ試してねえのか」
パパからのレクチャーを聞いて、逆五芒星からエンゲージリングを取り出した。プラチナ製と思われるリングはてっぺんに近付くにしたがって二重になり、二重の部分には細かいダイヤが並んでいる。そのまま石を挟んで数字の3と鏡文字の3が向かい合う形。つまり、左右から細長いハートが包む形である。真ん中にはハート型の大粒ダイヤが載っていて、その周囲をぐるりとハート型の小粒ダイヤが取り囲んでいる。豪華ならいいというものでもないだろうが、地上の価値観で言えば石油王の奥さんがはめていそうな感じだ。
「ほほう、おめえはいちいちやる事がでけえな。剣といい、指輪といい。サッちゃんもきっと喜ぶぜ。でかい宝石の物質化はなかなかできる奴がいないから、魔界でも結構な価値だしな」
初めて作った作品をしげしげと眺めて思った。
「なんだか、ちょっとゴテゴテしすぎですかね？」

「問題はそこじゃねえだろう！　……いや、デザインとしては悪くねえと思うぜ。ただ、見せられたほうが照れるような指輪だな」
「そうですか？　でも、デザインが悪くなければいいや。プレゼントは気持ちが込もっていれば、それが一番！」
「込めすぎだっつーの」
パパはなんだか赤い顔でニヤニヤしていた。

魔界9

サッちゃんの部屋をノックすると、返事がした。扉を開けたサッちゃんは顔に疑問符を浮かべながらも微笑みかけてくる。
「入ってもいいかな？」
「いいわよ。どうしたの？」
サッちゃんは部屋のあちこちを指差して、危なそうな仕掛けを解除した。机から猫脚（ねこあし）の真っ赤な椅子を持ってきて俺に座るよう促すと、自分はベッドに腰かけた。
「俺さ、サッちゃんに出会ったばかりの頃、なんて高飛車でわがままな子なんだろうって思ってたんだ」
「なによ、暇を持て余して喧嘩でも売りにきたの？」
「でもさ、君と一緒に過ごすうちに気付いたんだ。君は寂しがり屋で、ちょっぴりドジで、とても優しい女の子なんだって。魔族のプライドにかけてそんな自分を見せられないと、地上人の抱く悪魔のイメージを演じて見せてたんだ」
「なあに？　今度は占いごっこ？」
「君は徐々にだったけど、俺に心を開くようになってくれた。君が俺を食わなくて済む方法を探してくれればくれるほど、俺は君になら食われてもいい、それで君が幸せになれるならって思うようになったんだ」
「ふーん。それで？」
「だけど『彼』に君が消し去られそうになったり、君の後ろに隠れながら鬼の襲撃に備えて留守番したりして、俺の考えは変わった。ずっと一緒にいたい。できることなら永遠に。君の犠牲や添え物じゃなく、君のパートナーとして」
「光希、わたしをあなたのお嫁さんにして」
「え？　今、なんて？」
サッちゃんは急に立ち上がり、鏡台の引き出しから手のひらに収

まるくらいの小箱を取り出してきた。そして、俺の前で跪く（ひざまずく）と上目づかいの瞳をキラキラと輝かせて訊ねた。
「光希、わたしと結婚してくれるでしょう？」
これがパパの言っていたサッちゃんのおねだり顔らしい。俺は今すぐにサッちゃんを抱き締めて、無茶苦茶にチューしてやりたい衝動に駆られた。
俺の目の前に小箱が差し出される。中には緻密（ちみつ）な彫刻によって逆五芒星があしらわれた、銀色に輝く指輪があった。
「まいったな。先に言われちゃった」
ポケットに隠しておいた小箱を取り出し、開いて見せる。指輪を見たサッちゃんは目を見開いて、音がするほど息を吸った。
「素敵……。これ、あなたが物質化したの？」
「そうだよ。パパから習って作った記念すべき第一号作品さ」
「……ハートがいっぱいね」
「その……気持ちを込めようと思ったら、なんかそんなことになっちゃってさ。恥ずかしいかな？」
「そんなことないわ。『わたしも』愛してる。光希のことを、本当に」
こうなったらお互いに返事はちょっと待ってなどと言う必要もなく、リングをはめ合う。それぞれ自分の手を眺めたあと、タイミングを計りかねてぎこちないキスをした。サッちゃんの小さな顔を覆う手に熱い雫（しずく）がこぼれ落ちてくる。受け止める度にちょっぴり塩辛い、幸せの結晶が。
「……君にはかなわないや。いきなりプロポーズして驚かせようと思ってたのに」
「ぐずぐずと意味ありげなことを言っていたらばれるに決まってるじゃない。最近のあなたを見ていたら、もうそろそろだなって予想はついていたのよ。これからは、あなたに頼ってもいいかしら？ダーリン」
「ダ、ダーリン？」

「そうよ、ダーリン。それにしても慌ててプロポーズしたから、言おうと思っていた台詞を言いそびれてしまったわ」
「なになに？　今からでもいいから言ってみてよ」
「だめよ、恥ずかしいもの。わたしにサプライズを仕掛けた罰として『一生、わたしが何を言おうとしていたか、ちょっと気になるの刑』を言い渡すわ」
サッちゃんは照れくさそうに笑った。

魔界１０

父親コンビに報告するために、俺達はリビングに来ていた。
サッちゃんが両手を背中に組んで婚約指輪を隠しているので、俺もちょっと失礼して左手をズボンのポケットに隠し、サッちゃんの出方を見た。
「ねえパパ。光希がわたしをいじめるのよ？」
「ほう、とうとうサッちゃんをいじめるほどになったか。だがな、光希。女をいじめるのはつえー男のすることじゃねえぜ？」
父様も咎める（とがめる）ような視線で俺を見ている。
「見てよ、ひどいでしょ？　光希ったらこんなものでわたしを拘束する気なのよ！」
サッちゃんは会心の笑みを浮かべて左手を差し出した。
「おお、それは！　光希、でかしたぞ。上手くいったか？」
「それが、先を越されちゃいました。でも、サッちゃんが満足ならそれでいいや」
「……サッちゃん、光希さん、おめでとう。それにしても見事な指輪ですね。これ、光希さんが？」
「ああ、旦那。こいつ、戦闘能力の成長だけじゃなくて、物質化の能力にも目を見張るものがあるようだぜ」
「これだけの物質化ができれば、サッちゃんを路頭に迷わせる事もなさそうですね。うんうん」
続いて俺も、サッちゃんからもらった指輪を見せた。
「ほほう。こいつはサッちゃんが作ったもんか。よくわかんねえが、小洒落て（こじゃれて）やがるな」
「サッちゃんは地上人だった頃から手先が器用でね、よくわたしの似顔絵なんかを描いてくれたものですよ。その小さかったサッちゃんが、あっと言う間にこうして婚約者を連れてくるとはね……」
父様は俺の手を握って指輪を見つめていると、鼻をすすり、肩を

震わせて、とうとう涙を流し始めた。できれば娘の手を握ってやってほしかったが、サッちゃんはパパの巨体に抱き締められて占領済みだった。仕方がないので、しゃがみこんで本格的に嗚咽(おえつ)を上げ始めた父様の肩をさすってやった。

法律も宗教もないこの魔界で、結婚式なんてする人はいるのだろうかと疑問に思っていたが、披露宴パーティは珍しくないという。百人以上の魔界人が承認すれば、めでたく夫婦成立というのが通例らしい。一度夫婦が成立すると、よほどの恥知らず以外は夫や妻を誘惑したりしないそうだ。浮気や離婚もまた、よほどの恥知らず行為にあたるので、サタン様の地獄送りに遭わないように気をつけろよ、とパパに忠告された。

まあ、俺が浮気などしようものなら、地獄のほうが良かったと言いたくなるほどの拷問を、父親コンビも含めた三人から課せられるのは明白なので、サッちゃんを凌ぐ（しのぐ）ような超絶可愛い子ちゃんが俺を誘惑しないよう願うばかりだ。

百人の署名を集めてまわるという方法もあるんだそうだが、やっぱり結婚式というのは地上人にしても魔界人にしても女の子の夢なのだろう。

とびっきりの笑顔で、

「披露宴をやってもかまわないかしら？」

と、問いかけるサッちゃんにノーと言う事など不可能だった。まあ、元々俺も披露宴の開催に異存はなかったのでその旨伝えると、早速パパが友人百人を集める電話をかけ始めた。

魔界１１

楽しいこと好きの魔界人達はパーティと聞くと何をおいても駆けつけるものらしく、あっと言う間に庭が魔族達で埋め尽くされてゆく。庭のあちこちに設置されたキャンドルが点火されると、集まった仲間達の姿が照らし出された。お化け屋敷のような光景を予想していたが、黒一色で正装した百人の魔族達は、じつに美しく、壮観（そうかん）な眺めだった。

男達はテーブルや飾りを、女達は百人いても食べきれないほどの料理と酒を物質化させ、パーティの準備は着々と進む。

新婦が着替えにいっている間、

「新郎は黙ってテレビでも見てて」

と、言われたのでソファに座ってテレビをつけると、画面に見覚えのある光景が映し出された。市街地が鬼の群れで埋め尽くされている。あの時の様子をリプレイしているのかと思ったが、画面の隅に中継と書かれているのを発見した。

俺は庭に駆け出ると、テレビを物質化して取り出した。今回も都合よくジャンボサイズだったテレビに百人の参列者全員が注目した。

画面に映し出される事件に会場がざわめく中、漆黒のウェディングドレスに包まれたサッちゃんが登場する。いつもお姫様みたいな黒ロリファッションを着ているのだから、ウェディングドレスになってもそう変わらないだろうなんて思っていたが……。ホルターネックのドレスから大胆に露出する肩や胸元をキャンドルの光でつやつやと輝かせ、左脚の太もも辺りまでが見える非対称の長いスカートを父様につままませて、少し照れたような笑顔で歩いてくる姿はまさに美の権化（ごんげ）だった。

できることならこの光景を独り占めしたいぐらいだったが、もう登場してしまったのだから仕方ない。参列者に目をやると、居合わせた全員が息をすることも忘れて、新婦の姿に陶酔（とうすい）していた。

静まりかえった仲間達をよそに、巨大モニターの光景を見たサッちゃんが、
「大変！」
と、声を上げた。そう、街が大変なことになっているのである。式の続行が不可能になりそうな雲行きの中、新婦を哀れむ視線がサッちゃんに向けられる。そんな中でサッちゃんは気丈にも言った。
「せっかくお集まりいただきましたがパーティは中断します。皆さん、街へ出て魔界のために戦いましょう。そして、全員無事に戻ってわたし達を祝ってくださいな」
美の権化が勇猛な女将軍（じょしょうぐん）のように群集の士気を高めると、黒衣の群れは次々に市街地へと飛び立っていった。俺達もサッちゃんの着替えを待って、フルスピードであとを追う。

市街地はひどい有り様だった。空から見下ろしてもアスファルトの地面が見えないぐらいに鬼が埋め尽くしていた。悪いことに今回はビルを叩き壊してまわる、岩山みたいな巨人を一体伴っている。その金棒や平手にオーラの光が確認できた。攻撃を食らえば命取り。いよいよ本物の実戦だ。
戦力に自信のなさそうな仲間達が大きな投光器を手にホバリングして、せめてもの手助けをしている。
「突っ込むぞ！　油断するなよ！」
パパは大斧、サッちゃんは二刀、父様は手のひらに光弾をかまえて鬼達の隙間に飛び込んだ。
俺も負けじと剣をかまえ、飛び込む。着地と同時に金棒が飛んでくる。いまひとつ本番の心づもりができていなかった俺は、辛うじて剣で受け止めた。パパほどではないが、なかなかの怪力だ。
ようやく目の前の一匹を弾き返したはいいが、周りをぐるりと囲まれてしまった。
「じねーーごぞうーー」
一匹の鬼がよだれを垂らしながら唸る。それを合図に鬼達は一斉

に振りかぶる。
……まずい、死ぬかも。
目をつむって頭を抱えたところで、身体が垂直に跳ね上げられた。
「光希！　遊んでると死ぬぞ！」
パパが俺を放り投げてくれたらしい。パパは間髪入れずに大斧をかまえ、コンパスで円を描くように鬼達をなぎ倒してゆく。
空中で体勢を立て直していると、サッちゃんと目が合った。
「かわいそうだけど、殺さなきゃ殺されちゃうのよ。頑張って」
そう、遠慮してたら死ぬのは俺だ。すまないが、俺は生きる。
着地と同時に一匹目を叩き斬った。覚悟を決めてしまえば、そう強い相手ではない。だが、斬っても斬っても視界が鬼で埋め尽くされたままだ。
父様が分厚いオーラを身体にまとって近付いてくる。そのバリアに触れた鬼達が次々に弾き飛ばされる。
「これじゃあ、きりがない。鬼に関しては増援を待ったほうがいいかもしれませんね」
父様のバリアに入れてもらって、サッちゃんと合流し、パパの元へ。
「わかった。じゃあ、先に巨人を片付けるぞ！」
同じことを考えた魔族の一群に加わり、俺達は巨人に斬りかかる。
オーラ武器でさえ刃が立たない岩石みたいな皮膚に苦戦する中、仲間達が次々に叩き落されてゆく。力いっぱい斬りつけても、オーラを直接ぶつけても、まったく効いていない。パパの頼もしい大斧でさえ火花を散らすだけで、びくともしていなかった。
鬼に関しては援軍を待てば何とかなりそうだが、この巨人はどうしたものか。途方にくれて巨人を眺める仲間達に混じり、俺は一旦巨人から距離を取った。
――しばらく様子をうかがって、巨人のある動きが目に止まった。
我が家の三人がこちらに向かってくる。
「光希、サボってちゃだめじゃない。いくわよ！」

「ちょっと待ってくれ。俺に考えがある」
「どうしたんですか？　光希さん」
「見てください。巨人の眉間（みけん）の辺り」
「眉間がどうしたってんだ？」
巨人は大して速くもない平手でビルや仲間を攻撃していたが、眉間近くに仲間が寄ると、驚くべき速さで叩き落とそうとする。
「なるほど。そういうことですか」
「眉間を貫くには斧や旦那の光弾じゃあ、ちっと手間だな」
「光希かわたしの剣ならいけそうね」
早速二刀にオーラをこめるサッちゃんを、パパが制した。
「サッちゃんは黙って見てろ。こいつはちょっくら危なすぎるぜ」
「そうですね。私達が巨人を引きつけます。光希さん、頼みますよ」
サッちゃんがパパをにらみつける。
「女だからって見くびらないで。パパより速く飛べるのは知っているでしょう？」
「そりゃ、そうだがな。しかし……」
サッちゃんだって十分に強い。だが、サッちゃんは女の子だ。男は愛する女の子を守って戦いたいもの。こればっかりはサッちゃんの頼みでも譲るわけにはいかないのだ。
「サッちゃん、君にもしものことがあったら俺は生きていけない。だから見ててくれ」
「それはわたしだって同じよ。光希までわたしを除け者（のけもの）にする気？」
「君の騎士（ナイト）初の大仕事だ。姫は高見の見物でもしててくれ」
「もう、格好つけて叩き落とされたって知らないんだから……」
俺はまだ納得いかなそうなサッちゃんの唇を、唇で塞いだ。
「……気をつけてね」
ニヤニヤする父親コンビと俺は巨人の顔を目指した。
「よし旦那、いくぞ」
「了解しました」
パパと父様は巨人の顔の周りをフラフラ飛びまわって挑発し、上

手いタイミングで撹乱(かくらん)している。
「さすがだな、二人とも。さて、いくか」
俺は巨人の頭頂部上空まで上昇する。
足下の巨人は、二人に気を取られている。
俺は一気に急降下して、目当ての場所を突き刺した。
剣が巨人の眉間に深々と突き刺さる。
巨人が声だけでガラスを割りそうなほどの咆哮を上げる。更にオーラを送りこむと、オーラの光が柱となって巨人の後頭部まで貫通した。
剣の周りの岩肌に亀裂が入っている。俺は剣を揺らして、手応えを確認した。
……いける！
「デパート破壊の罪、サッちゃんと魔界じゅうの女の子に詫びながら死ぬがいい！」
ありったけのオーラを剣に込め、急降下で巨人を両断した。
身体の九割を真っ二つに切り裂かれた巨人は砂のように崩れ、やがてその砂も消え失せていった。巨人に斬りつけていた魔族達が俺に向かって武器を掲げ、歓声を上げている。
サッちゃんが俺に飛びついてきて、
「素敵！」
と、キスしてくれた。
オーラを大量に放出してふらふらになった身体に気合いを入れ直す。
「さあ、次は鬼だ！　いくぞ、サッちゃん！」
サッちゃんの熱い視線を背中に感じつつ、鬼の軍団に向かう。すると、鬼と戦う一群から歓声が上がった。
「いや～、巨人の一匹や二匹で英雄扱いなんて。照れるな～」
「なに馬鹿なこと言ってるの？　それより光希、見て！　サタン様よ！」
遅ればせながらサタン様ご光臨(こうりん)というわけだ。サッちゃんは両手

の剣を落としそうになりながら手を組んで、潤んだ瞳をサタン様に向けている。そりゃあ、サタン様と比べれば、俺の活躍なんか『馬鹿なこと』でしょうよ……。

サタン様は「遅くなってすまん」とつぶやき、あっさり鬼達を地獄に送り返した。

「二度も侵入されて、ただの強制送還か……」

サッちゃんが鬼より怖い目をして振り返る。

「嫉妬するなんて、みっともないわよ？」

「い、いや。そういうんじゃないんだ。それにしても、サタン様は強いな～」

「そうでしょ？　素敵よね！」

サッちゃんは機嫌を直し、俺に抱きついた。近くにあれば電柱でもなんでも抱きかねない様子だったが。

サタン様の周囲から猛烈なサタンコールが巻き起こる。騒々しさを避けて、俺達家族は早々に帰路につく。せっかく俺だっていいところを見せたのに、振り返っては目をウルウルさせるサッちゃん。

なんだかサタン様の行動が気になったが、そんなこと言ったらサッちゃんに婚約解消された上、成敗（せいばい）されそうだったから、黙って帰ることにした。

魔界１２

中断されてしまった披露宴だったが、戻ってきた参列者は六十人にも満たなかった。キャンドルは燃え尽き、薄暗い明かりだけが戻った仲間達を照らしていた。サッちゃんは、自分が調子に乗って呼びかけたばかりに参列者から犠牲を出してしまったと泣き崩れた。

犠牲者の家族や友人達は、

「サッちゃんが呼びかけなくてもみんないったさ。死ぬ前に綺麗な花嫁さんを拝めてラッキーだったろう」

と、口々にサッちゃんを慰めてくれた。

サッちゃんを寝室に連れてゆき、寝かしつけると、俺は急遽偲ぶ会（しのぶかい）に変わったパーティに参加した。

俺の活躍をほめてくれる者もあったが、今は喜ぶ気になれない。誰からともなく早々にパーティは切り上げられ、淡々と片付けを済ませた仲間達が去ってゆく。

「披露宴をやり直す時には是非また呼んでほしい、サッちゃんを慰めてやってくれ」

というような言葉を残して。

――それからしばらくの時が経ち、サッちゃんがリビングに顔を出す機会も増えてきた。だが、まだ表情が晴れない。サッちゃんが満面の笑顔を浮かべた花嫁になるまでには、かなりの時が必要に思えた。

テレビからの情報によると、鬼達の暴走の背後には地獄を管理する者の差し金がありそうだ、とのことだった。ひたすら破壊する以外に考えを持たない地獄の鬼達が、来られるはずのない魔界に入りこんで暴れたのだから、その親分が何らかの形で関わっているのは間違いなさそうだ。

――ある時、チャイムが鳴るのを聞いて、俺は玄関に走った。
扉を開けると、そこには魔界のアイドルが無造作に突っ立っていた。
玄関先のランプに照らし出されるサタン様は、黒い革パンに胸をはだけたフリルブラウスという、サッちゃんの夢を具現化したような格好だった。長く、青い髪を一本の三つ編みにまとめて、肩から垂らしている姿は、見ようによっては女性にも見えるくらい、繊細な顔立ちの美男子だ。
「やあ」
と、気軽な様子で右手を挙げているが、この人は魔界の王様なのだ。『物怖じしない』とパパのお墨付きをもらった俺だが、こればっかりはさすがにビビった。
「こんにちは。じゃなくて、えと、高貴なあなた様のご尊顔（そんがん）を拝し、恐悦至極（きょうえつしごく）に存じまする」
「あはは、君は人間上がりらしいが地上ではサムライだったのかい？　そんなにかしこまらなくたって君をどうこうしたりはしないさ」
「有り難き幸せ。じゃなくて、わかりました。サタン様」
「君は面白い奴だな。ところで僕がここに来たのは、他でもない君に話があるからなんだ」
「わたくしめに、お話と仰られ（おっしゃられ）ますと？」
「まだ硬いぞ、君。光希君と言うんだったね？」
「はい」
「では光希君、本題に入ろう。僕はこの前の君の活躍を惜しくも見逃してしまったが、例の巨人を倒してくれたそうだね？」
「そのとおりです」
「あの巨人もまた普段地獄にいるんだが、なかなか厄介な奴でね。街に出てきたあいつを倒してくれたのは大いに助かったよ。そこでだ、君の活躍に対する褒賞として、僕は君を魔界貴族の一員に加えることにした。異存ないだろ？」
「えと、あの……」

「不服かい？　いや、一匹狼であり続けたいって魔族もいるんだ。実力者の中にもね。君がそういう主義なら無理強いするつもりはないんだが」
　確かに妙なしがらみは勘弁してもらいたいが、サタン様直々の任命を断ったりしたら俺の誇りが……じゃなくて、愛しい『隠れ拷問フリーク』が許さないことだろう。
「身に余る光栄、是が非でもお受けいたします……」
「何か断れない事情でもあるようだね？　ふむ、君には女難の相が出ているようだ」
「ええ、それはもう恐ろしい婚約者が……いえ、失敬しました」
　サタン様は俺の目を覗きこむように見つめ、やがてカラカラと笑い出す。ひとしきり笑った後、紋章を描くこともなく、ガラス張りの豪奢な盾を物質化した。
「はい、これ勲章と任命証」
「あ、有難うございます！」
　地上でありふれた生徒だった俺は、偉い人に褒められたり、何かに任命されたことなどなかった。いや、一度だけ図画工作の作品で銀賞をもらったことがあったっけ。だが、あれは何の銀賞だっただろう？　クラス委員長に任命されたこともあるが、あれは風邪で欠席した学級会選挙で押し付けられただけだ。
「こちらのお宅は実力者ぞろいだから、こんなの珍しくないかもしれないが、一応大事にしてくれよ。こいつはルシファ様か僕がその気にならなけりゃ、どんな根回しをしたって手に入らないものなんだから」
「勿論ですとも」
　玄関での会話が騒がしかったのか、サッちゃんが
「お客様？」
　と、言いながら顔をのぞかせた。サタン様と目が合うと、サッちゃんはその場にヘナヘナと座りこみ、半べそのような表情を浮かべ、三つ指ついてお辞儀した。

「可愛い子だね。例の彼女？」
「ええ、一応婚約者です」
「おや？　あの子はバフォメットの……そうか、サキュバスはあの娘だったか……」
「どうかされましたか？　……サタン様？」
「いや、なんでもないよ。……それにしても残念だ。光希君より先に出会っていたら、后に迎えていただろうに」
サタン様がサッちゃんにウィンクすると、サッちゃんは
「ああ、勿体のうございます」
と、言いかけながら失神して床に崩れ落ちた。
「あはは、君に似合いの面白い彼女だな。大事にしてやるんだぞ。彼女を泣かせたら、君を地獄に送って僕がもらっちゃうからな」
「そ、そんな」
「冗談だよ。まあ、泣かせるつもりはないだろうけどね。じゃあ、またね。気が向いたら城にも遊びに来るといいよ」
肩の上で、後ろの俺に手を振りながら、ぶらぶら歩きでサタン様は帰ってゆく。一応深々とお辞儀をして見送っておいた。想像していたよりナイスガイだったことは認めるが、どうも生理的に受けつけない感じをサタン様から受けた。
ガラスの盾をしばし眺めたあと、床に突っ伏してのびている、サッちゃんの鼻をつまんでやった。
目を覚ましたサッちゃんは
「素敵な夢を見たわ」
と、夢心地の顔で言ったかと思うと、俺の手に握られている盾と俺の顔を交互に見比べ、また気が遠くなったようにふらふらとして、俺の懐にもたれかかった。
「ねえ、光希。サタン様は本気で仰られたのかしら？」
と、サッちゃんは俺の胸に指で『の』の字を書きながら言った。
「なんのこと？」
「……もっと早く出会っていたらって」

「ああ、あれか。サッちゃんさ、その質問する相手間違ってない？」
「え？」
俺の顔をしばらく見つめたあとで、その意味がわかったのか慌てて言った。
「そ、そういうことじゃないのよ。わたしはそんなふしだらな女ではないわ。わたしにはあなたしかいないの。だから許してくれるでしょう？　ダーリン。そうよ、サタン様は手の届かない存在というか、憧れというか……」
まあ、いいか。『憧れのサタン様』のおかげで元気も取り戻したようだし。でも、もうちょっとこのまま弁解させておこう。慌てた顔が可愛いから。

魔界１３

ハンサムな代理君主のおかげでサッちゃんもだいぶ元気を取り戻し、仕切り直しの披露宴を計画していた時のことだった。
「光希。このドレス可愛いでしょう？　この前のドレスも悪くないけど、光希はどっちを着てほしい？」
サッちゃんが新旧二着のウェディングドレスを示して言った。
新しいほうのドレスは、露出部がグッと抑えめで、どちらかというと清楚な印象だった。色は前のと同じ黒一色。膨らんだ円錐形の大きなスカートは、いわゆるウェディングドレスといった感じだ。スタンダードなドレスも着てみたくなったんだろうか？　だが、二着を見比べると、アシンメトリー（非対称）なスカートからなまめかしく太ももをのぞかせる、元のドレスは捨て難かった。
「俺は、この前のやつ。こっちがいいと思うよ。サッちゃんはどっちが好きなの？」
「そうね、この前のドレスは仲間が大勢犠牲になって悲しかった時のものだから、新しいドレスにしようと思っていたんだけど、光希が気に入ってくれているのなら、こっちにするわ」
サッちゃんは、俺が希望した元のドレスを見て、「うんうん」とうなずいている。
が、ちょっと待てよ……。しまった。女の子がこのドレス可愛いでしょう？　と聞いてきたら、俺の意見など聞くまでもなく、そっちじゃないのか？　サッちゃんはなんと言った？

このドレス可愛いでしょう？
この前のドレスも悪くないけど。

俺は、慌てて訂正した。
「そういうことなら新しいほうにしよう。気分を変えたいなら、そ

うしたほうがいいよ」
サッちゃんは、一瞬
「え？」
と、目を見開いて、なんだかムッとしたように言った。
「もう。どちらでもいいと思っているんでしょう？　光希はわたしのことなんてちっともわかってくれていないわ」
サッちゃんはへそを曲げてベッドに飛びこむと、枕に顔を埋めた（うずめた）。
「サッちゃん、ごめんよ。君は新しいほうを着たかったんだろ？　俺が悪かったよ。このとおり、な、な」
と、俺はベッドの横で手を合わせた。
すると、サッちゃんはのろのろと起き上がり、両手の甲で目を押さえてシクシク泣き出してしまった。
「光希の馬鹿……。なんでわかってくれないのよ……」
俺はわけがわからなくなって、なげやりに言った。
「君の希望を言ってくれよ。じゃないと俺にはわからないよ」
「出ていって……。一人にしてちょうだい……」
それからというもの、サッちゃんは細かいことでいちいち俺に突っかかっては不貞腐れる（ふてくされる）ようになった。変に披露宴までの間が空いたせいでマリッジブルーにでもなってしまったのだろうか？　なんて冷静なふりをして、なだめたりすかしたりしていた俺だが、とうとうサッちゃんはこんなことを言い出した。
「あーあ。こんなことなら、サタン様に見初めて（みそめて）いただくのを待てば良かったわ。あなたみたいなわからず屋と結婚して上手くやっていけるのかしら？」
俺は頭に血が上って、サッちゃんの頬をひっぱたいた。
「そんなにサタンが好きなら奴と結婚すればいいじゃないか！」
「ほら、あなたはわたしを愛していないからこんなことするんだわ！　どうして？　どうしてなのよ……」
サッちゃんはため息をつきながら、また泣き出した。

「近頃の君はどうかしてるぞ。たかがドレスのことをまだ根に持ってるのか？　それとも、俺と結婚するのがそんなに不安か？」
「たかがドレスですって？　あなたにわたしの一番綺麗な姿を見せたくて、ずっと悩んでいたのに。あなたを喜ばせたかったのに。やっぱりあなたはわたしを理解してくれていないのよ！　もう終わりね。あなたの顔なんて見たくないわ。出ていってよ！」
「ああ、望むところだ。君みたいなわがまま娘、こっちから願い下げだ。パパ、父様、それに君もだ。お世話になりました。さようなら」
　サッちゃんは顔を覆って部屋へと走っていった。
　空いてる土地にでも家を物質化して住めばいいやと出ていこうとすると、父様が俺の腕をつかんだ。
「光希さん、出ていくのは少し待ってみてはいかがですか？　近頃サッちゃんのわがままが過ぎていたのは確かです。わたしもそろそろ叱ってやらなくてはと思っていたのですが、婚約者のあなたを差し置いてというのも気が引けていたのでね」
「旦那の言うとおりだ。出ていくことはねえよ。サッちゃんは少ししたらまた光希、光希って泣いて暮らすに決まってるんだ。その時におまえが本当に出ていってたら、二度とやり直せなくなっちまうぜ」
　出ていくと言ったのにここに残るなんて格好悪いな、なんて思いつつも、二人の大人の意見を聞くべきだという結論に達した。俺だって頭を冷やせば、サッちゃんが恋しくて泣くに決まっているのだから。

魔界１４

――サッちゃんが部屋にこもってだいぶ経つ。
食事すら必要ない魔族のサッちゃんが一度部屋にこもると、顔を合わせる機会など自然には訪れなかった。こちらから謝ってよりを戻したいという衝動に駆られもしたが、見当外れの弁解をしてこれ以上サッちゃんを悲しませるのは避けたかった。サッちゃんの気持ちがどこでこじれてしまったのか、わかってやれない自分を悔やんだ。サッちゃんの言動は、いったい俺に何をしてほしいというサインだったのだろう？　日付も時計もない魔界で、永遠のような忍耐の時が続いた。

――サタン様から一通の手紙が届いた。
鬼達の暴走の原因を突き止めた。地獄を治める閻魔大王（えんまだいおう）が、魔界乗っ取りを企てている。こちらの度重なる呼びかけも突っぱねられた。そこで、閻魔討伐精鋭隊の一員として、パパ、父様、俺の三人を招集するという内容だった。
同じ魔界貴族であるサッちゃんがメンバーに入っていないのが気がかりだったが、魔界貴族の誇りにかけて、招集には直ちに応じなくてはならない。パパと父様はサッちゃんの部屋に行き、留守を頼む、と旅立ちの挨拶を済ませたようだ。俺は、まだサッちゃんの言いたかったことがわからず、今会ってもすれ違いが大きくなるだけなのが目に見えていたので、サッちゃんには会わずに出発することにした。
「いいんですか？　無事に帰れる保証はないんですよ？」
「今の俺達は少しお互いを見つめ直す時間が必要なんだと思います。俺はサッちゃんを理解してやれるようになれるのかまだわからないけど、サッちゃんが惚れ直すような活躍をして帰ってきてみせますよ」

「最近の光希なら、まんざらはったりとも言えねえな」

城に着くと、そこには三十名ほどの魔界貴族達が集まっていた。彼らが今作戦の仲間というわけだ。

サタン様が現れて、俺達に言った。

「諸君、突然の呼び出しに応じ、こうして駆けつけてくれたこと、ルシファ様に成り代わって感謝する」

サタン様の言葉に、歓声が上がった。

「さて今回の作戦だが、いたってシンプルだ。わたしが諸君らを地獄へ送る。事前の調査で対象の位置を把握しているから、遭遇までには手間取らないだろう。ただし、今回の対象である閻魔大王が強大な力を持っていることは説明するまでもない。彼もまた、冥府の評議員を務めるほどの者だからな。わたし自身も戦力として参加したいところではあるが、ルシファ様不在の今、市街地に鬼どもが現れる可能性を残した現状で、魔界を離れることはままならない。すまないと思っている。諸君らが対象をすみやかに仕留め、無事に帰還することを切に願う」

自然と拍手が起こり、俺達は大声で士気を高めあった。

サタン様がその手に緑色のオーラをうっすらたくわえ、手刀で空間を切り裂いた。次の瞬間、俺達は、荒れた大地にそびえ立つ巨大な神社のような建物の前にいた。

魔界15

地獄の空は魔界の闇空よりも少しだけ明るく、赤い陽炎のようなものが立ちこめていた。まるで空全体が燃えているようだった。ここが魔界と同じく地底だという理由以外にも、強烈な閉塞感を感じさせるところだ。

漆喰の塗られた白い壁に瓦の載った塀。真ん中の頑丈そうな門扉(もんぴ)は、俺達が来ることを予想していたかのように開け放たれている。警戒感のなさに、かえって不気味な何かを感じつつ、俺達は白い玉砂利の庭園をジリジリと進んでいった。

間近で見ると、見上げるほどの巨大な社(やしろ)は古い木造建築だった。門からまっすぐ歩いてくると、時代劇で名奉行(めいぶぎょう)が桜吹雪を見せつける『お白州(おしらす)』によく似た場所に辿り着く。建物自体が巨大なわりに、そこは拍子抜けするほどに普通の人間用サイズだった。

板張りの縁側から続く畳敷きの部屋の奥から、中肉中背の平凡な地上人のような男が歩み出てくる。見た目の年齢なら五十歳ぐらいといったところか。ゴルフ帰りの部長みたいなポロシャツ、スラックス姿のそいつは言った。

「来たな。まあ、こっちに来て茶でも飲んでけよ」

パパが代表して訊ねる。

「おまえが地獄の長、閻魔大王か？」

「まあ、そう呼ぶ奴もいるね。茶が冷めるぞ」

閻魔は涼しい顔をして奥に引っこむと、親戚のおっちゃんみたいに気楽な様子で、手招きしている。俺達は短い作戦タイムを取ったが、突っ立っていても仕方ないという結果に至って、手招きに応じた。

社の内部に上がると、大きな卓袱台(ちゃぶだい)の上に熱いお茶が用意されていたが、さすがに敵地で出されたものを無防備に飲む者などいなかった。

「おまえらの中で、俺と組みたい奴はいないか？　はたらきに応じて地獄の領土と地位をくれてやるぜ。それに、これから俺は魔界は勿論、地上も天界もいただいてやろうと計画中なんだ。絶対、魔界にいるより楽しいぜ？」
楽しいこと好きの魔界人だから、楽しいと聞いてつられる者が出るのでは？　と少し冷や冷やしたが、さすがに誰も名乗り出ない。
「なんだ、つまんねえな。じゃあ、庭に出な。戦いにきたんだろ？」
言いなりになるのも癪（しゃく）だったが、俺達は閻魔を追って庭に出る。
「どっからでもかかってこいよ」
閻魔がそう言ったのを合図に、三十余名の精鋭達がオーラ武器や光弾で襲いかかる。
「あいつが送りこんできたからには、どれほどの奴等かと期待してたんだが、がっかりさせてくれるねい。あらよっと」
こちらの攻撃をものともせず、軽いかけ声とともに指差して、仲間の一人を消し去った。オーラすら見えなかった。
「心配するな。今の奴は魔界に送り返してやっただけだ」
そう言った閻魔が指差した仲間を次々に消してゆく。ただ、不思議なことに消えない者もいて、父親コンビと俺を含む十名ほどが残った。
「へー。おまえら帰りたくないのか？　おまえらの中に、ちょっとでもここから逃げ出したいって気持ちがあれば、すぐ帰れたのにな。勇敢なばっかりに損したな」
仲間を誑かして（たぶらかして）魔界へ送り返したと聞かされ怒り心頭の俺達は、死力を尽くして閻魔に攻撃を浴びせた。
俺達の攻撃をヒラリヒラリとかわしながら、閻魔が仲間に話しかけている。
「おまえさ、ガキと嫁さん放ったらかして死ぬのがカッコイイとか思ってるのか？」
話しかけられた仲間が消えた。
「おまえ、本当は魔界より地上が好きなんだよな？　人間にしてや

るから地上に帰れよ」
そう言われた仲間もまた消え去った。
どうやら閻魔は話しかけた者の欲望を揺さぶり、誘惑に負けた者を魔界やそれ以外の場所に送り返しているらしい。
――閻魔の絶妙な揺さぶりに、仲間達はそれぞれの希望の地に送り返され、残るは我が家の三人のみとなった。
「おまえは嬢ちゃんを拾うまで結構遊んでたようだな。あの頃に戻りたくないか？　そのサッちゃんって娘を嫁に出すまで待ちきれないよな？　そこの坊主がグズグズしてるもんだからさ」
「うるせえ、俺は確かにどうしようもねえ遊び人だったが、サッちゃんに出会って、いつまでもこんなことはしてられねえと改心したんだ。だから、サッちゃんを嫁に出してもあんな生活には戻らねえ！」
「サッちゃんに軽蔑されたくないもんな？　おまえ本当はサッちゃんに惚れてんだろ。だが、惚れたばっかりに手出しもできず、サッちゃんの言いなりになってる。違うか？」
「野郎、言わせておけば！」
パパは閻魔に自慢の大斧を振り下ろしたが、あっさりとかわされてしまう。
大量の玉砂利が虚しく舞い上がった。
「サッちゃんに打ち明けて嫌われるような危険を冒すより、幸せを願ってやるほうが傷つかずに済むもんな？　そこの坊主にサッちゃんをくれてやるって気持ちに嘘はないようだが、サッちゃんそっくりの女を集めたハーレムが欲しくねえか？　本物のサッちゃんよりも従順で、おまえの言うことをなんでも聞く娘をわんさか用意してやるぜ？」
パパが消えた。閻魔が言ったことが本当なら、いずれパパとは話し合う必要があるだろう。だが、今はそれどころではない。
閻魔は父様にニヤリと微笑みかける。父様は一瞬目を閉じ、冷徹なまでの無表情になった。

「さすがは大天使ってとこか。精神にそれだけ強固なバリアを張られたら、俺様も心を読み取ることはできねえ」
喋ってばかりだった闇魔が父様を殴りつける。一方的に殴られ続ける父様だが、身体の周りにもバリアを張っているのでダメージを受けてはいないようだ。
「防御だけは一丁前だな。なら、これでどうだ？」
闇魔は右手で父様を殴打しつつ、左手からハードなエロ本を物質化させた。それを父様の顔面にこれでもかとばかりに押し付ける。
「堕落に対する鍛錬は怠っていないつもりです。無駄ですよ」
「そうか？　よく見てみろ？　誰かに似てないか？」
闇魔は殴打を止め、父様にエロ本を見せつける。が、父様は目をつむっているので効果がない。
「おい坊主、こっちこいよ。まだ嫁さんの身体を見たことねえんだろ？　こりゃすげ～ぞ。華奢なくせにこのムッチリ感……こりゃ、たまらん」
俺も父様を見習って目を閉じたが、逆効果だった。サッちゃんの夢を思い出してしまって胸が締め付けられる。慌てて目を開いた時には闇魔が両手にオーラをたくわえ、俺を狙っていた。
「あばよ、坊主」
闇魔の右手から放たれた光弾を剣で辛うじて受け止めたが、弾き返すことも受け流すこともできず、身動きがとれなくなってしまった。ズルズルと身体が後方に押され、一瞬でも気を抜けば光弾に飲み込まれそうだ。
闇魔が左手の光弾を振りかぶる。
「光希さん！　危ない！」
間一髪、父様が二発目を受け止めてくれたが、その隙に闇魔は父様の背後に回り込み、父様に縄をかけた。闇魔が指を鳴らすと、二つの光弾はあっさり消え失せた。
「やれやれ、手間かけさせやがって」
「オーラを封じても私の心に干渉などできませんよ」

父様を縛っている縄がオーラを無力化しているらしいが、父様は涼しげな無表情のままだ。闇魔はそれでも、ニヤリと口元を歪ませる。

「おまえは大天使から堕ちて魔界にいるってわけだな。魔界での怠惰な暮らしに飽き始めてるのか。天界の職務が恋しいとは、まったく酔狂な奴だぜ。だが、娘と一緒にいたいし、魔族の徴を消せない限り天界に帰ってもつらい目に遭う。天界では根強い魔族差別があるからな。その辺りで気持ちが板挟みになってるってわけだ」

父様が一瞬狼狽した様子を見せる。

「その縄はゆっくり話す時間を確保しているだけだ。残念だが、光弾を防いだ時に隙が出来ていたようだぜ？」

父様はそれでも無表情を保っている。

「ところで、随分昔のことのようだが『わたしは父様のお人形じゃないの！』なんて言われたのが相当こたえているらしいな？　厳しく叱ったこともなく、目の中に入れても痛くないほど溺愛して育ててきたんだろ？　その娘が何故そんなことを言ったんだ？　魔族が誘惑したからか？」

「それは……」

その先が続かず、父様は黙り込んだ。

「甘い顔ばかりしていたくせに、過干渉で危険や不浄な物事には一切近寄らせない。言ってみれば、常に真綿の足枷（あしかせ）をかけていたようなもんだ。娘からすれば、さぞ息が詰まっただろうよ」

「しかし、それは！」

「明るく正しい人間に育てたかったか。娘はそれを望んでいたのか？」

「……わかりません」

「いや、おまえはわかっているようだぜ？　娘には安定した家庭が必要だった。それを土台にのびのびと冒険させてやって、間違った時にはガッチリ叱ってやる。そんな育て方をするべきだったと気付いているんだ。過ちを認めるのが怖いだけなんだろ？」

父様が縄を解こうと闇雲にもがく。俺は手助けに入ろうとして、闇魔に殴り飛ばされた。

「娘は坊主にくれてやるんだろ？　いい加減、父親から離れて自由になりたいんじゃないのか？　徴を消してやるから天界に帰れよ。いつまでも若いカップルにくっついてちゃ野暮（やぼ）ってもんだろ？」

「あなたは、いったい！」

闇魔が縄を解くと、父様は頭を抱えてうずくまり、やがて消え去った。

残るは俺一人。

魔界16

「坊主、おまえはなかなか骨のある野郎のようだ。この俺様にチラッとでも攻撃を当てるとはな。この傷、高くつくぜ？」
闇魔が自らの白いポロシャツを引きちぎると、意外と筋肉質な上半身が露わになった。ポロシャツの袖で隠れていた肩の辺りに、一筋の切り傷がついていた。
「おまえの考えてることだってわかるぜ。格好よく俺を倒して、サッちゃんのところに帰りたいんだよな？　だが、そりゃ無理だ。なぜなら、おまえにやられるほど俺は弱くないし、その望みを叶えてやるほどお人良しでもない」
「それは残念だな。で、俺を殺すのか？　それとも別の好条件でも提示するか？」
「おまえ、俺が怖くないのか？　地上のおまえの国で言われてたように、舌引っこ抜いてやろうか？」
「やりたければやればいい。あんたに勝てるとも思えないが、惨めに逃げる気はない」
「命が惜しくないのか？」
「敵のあんたに心配されるほど、俺は卑怯な奴じゃない」
「そういえばおまえ、地上では随分と命を粗末にしてたな？　それは今もあまり変わってねえようだ。そのいきがった口をきけないようにしてやる！」
手に大きな太刀（たち）を発生させた闇魔が俺に斬りかかってくる。
俺はとっさに剣で受け止めた。
「おまえは今、何故受け止めた？　生きたいからじゃないのか？　さあ、みっともなくサッちゃんのところに逃げ帰ってみろよ？」
「黙れ」
押し合う刃が火花を散らす。必死で食い止めようとする俺をせせら笑うかのように闇魔は言う。

「おまえの寿命をいじったのは俺だぜ？　命がいらないなら、さっさと回収してやろうと思ってな」
辛うじて一旦距離をとった俺に、閻魔が迫ってくる。
迎え撃つ俺は、閻魔に斬りつける。
が、虚しく空を斬ってかわされた。
空いた俺の脇腹を、閻魔は太刀の柄（つか）で突いた。
呼吸困難に陥った俺は、その場に座りこんだ。
「命を軽んじた罰はみっちり受けてもらうぜ」
俺の顔面を蹴り倒した閻魔は、馬乗りになって俺の顔を殴打する。
「どうだ？　痛いか？　それはおまえの身体が生きたいって叫ぶ声だ。魂に刻みこんでおけ」
「……殺る（やる）ならさっさとやれ」
「てめえ、まだ言うか？」
殴打の激しさが増し、気が遠くなってきた。
気絶しかけたところで冷たい水を浴びせられる。
「起きろ。お仕置きはまだ終わってねえぞ」
目を覚ました俺を再び閻魔が殴打し続けた。

――気を失っていたようだ。
目の前に地面の玉砂利が見える。
痛みを感じて足を見ると、俺の置かれた状況がわかった。
社の庭の木に、足の親指で逆さ吊りにされていた。吊られている縄をオーラで焼き切ってやろうと思ったが、無駄だった。父様を縛ったのと同じく、オーラを封じる特殊な縄のようだ。頭に血が上って、心臓が脈打つ度に破裂しそうな痛みが襲う。目玉が割れて飛び出しそうだ。殴られ続けた顔も、おそらく原型をとどめていないだろう。身体中がずっと痙攣（けいれん）し続けている。
「目が覚めたか。おまえは殴ったぐらいじゃ懲りねえようだから、そこで千日もぶら下がって反省しとけ。俺はしばらく出かけるからな。あばよ」

「さっさと殺せ、この野郎！」
閻魔は首を振って去っていった。

――何度気を失っただろう。
目覚める度に猛烈な頭痛に吐き気を催し、嘔吐き（えずき）続けた喉は痛みを通り越して麻痺している。魔族の身体からは吐き出すものなどなくて、嘔吐感（おうとかん）だけが延々と続いた。足の指も、ずっと続く痙攣で疲労骨折したのか、感覚がなくなっていた。視覚は、だいぶ前に失った。目玉が破裂したのかもしれなかった。俺の嘔吐く音だけが、広い庭にひたすら響いていた。

――あいかわらず嘔吐きながらも、考えが浮かぶようになってきた。人はどんな状況にも慣れるものらしかった。
俺は、どうなるんだろう？
死ぬ？
この状態が終わるなら、死は喜びだ。
死ぬのは怖くない。
奴もいずれは俺を殺すだろう。
でも会いたいな。
もう一度だけでも。
サッちゃん。

――玉砂利を踏む足音が聞こえてきた。
「坊主、サッちゃんに会いたいか？」
穏やかな口調だった。
「……会い……たい」
「会いたい人がいるってのはいいことだと思わねえか？　おまえの場合はスケベ心か？」
閻魔が大声で笑う。
「おまえは死に急ぐが、サッちゃんに会えなくなってもいいのか？」

「それは……いやだ」
「おまえみたいな生意気なガキには、幾ら言っても命のありがたみなんてわからねえのかもな。とりあえず女の尻でも追っかけて、楽しく生きてみろ。そのうちきっとわかる」
太刀を抜く音がして、身体が落下する感覚があった。
グシャっという音がした。
首の骨が折れたようだ。
「お、悪い」
閻魔が俺に触れると、視覚が戻り、身体じゅうが元どおりになった。
「これが最後だ。もう一度だけ聞く。まだ死んでもかまわないか？」
「……生きたい」
「それでいい」
「殺さないのか？」
「お灸を据えてやっただけだ。とにかく、何があっても命を放り出すような真似は二度とするな、約束だぞ？」
「舌を抜かれたら、サッちゃんとキスできなくなるからな」
「その調子だ」
閻魔が大声で笑うのにつられて、俺も笑った。閻魔の笑顔に不思議な懐かしさを感じたのは何故だったのか。
「ところで、おまえには特別コースの注文が入ってるぜ。行き先は行ってのお楽しみにしといてやる」
特別コース。注文。結局閻魔は誰も殺さなかった。この作戦の目的はいったい……。
「そこに行く前に訊きたいことがある。ここに俺達が来た時、『あいつが送りこんだ』と言ったな？　それは特別コースとやらを注文したのと同じ奴か？」
「そうだ」
「サタンだな？　で、その目的は？　これだけ実力差が明白なあんたを、本気で倒そうと立てた作戦とは思えない」

「おまえにわかる資格があれば、いずれわかる。また会うかもな、坊主」

閻魔に指差された俺は気が遠くなって、眠りに落ちた。

第三章　天界

「光希、生きていてくれたのね。あなたの消息が作戦行動中行方不明として処理されたって通知が来てから、わたしは生きた心地がしなかったわ。何度あとを追おうかと……」
「心配かけて……すまない。俺も、生きてまた君の声を聞くことができて、凄く……嬉しいよ……」
「やだ、泣いてるの？」
「サッちゃんの声を聞いたらホッとしちゃってさ……」
「仕方のない子ね。ところで、パパが一度帰ってきたけど、なんだかわたしを見たら、顔を真っ赤にして出ていってしまったわ。地獄で何かあったの？」
「ああ、それはちょっと君に言っていいことなのかどうか、判断しかねるな。作戦行動中の機密ってことで。すまない」
「わかったわ。みんな無事だったことだし、あなたも疲れているでしょうから、細かい詮索はやめて止めておくわね」
「助かるよ」
「ところでね、光希。あの時はごめんなさい。わたしどうかしてたわ。一番喜ばせたいと思っていたあなたに、あんなひどいことを言ってしまうなんて」
「俺のほうこそ殴ったりしてすまなかった」
「わたしは、あなたが一番気に入ってくれるドレスを着たかったの。だから、いい加減に選んだように見えたあなたを許せなかったわ。でもね、気が付いたのよ。あなたはわたしの希望を尊重しようとしてくれていたんだって。わたしがつまらないこだわりを押し付けたせいで、あなたの心をかき乱してしまったんだわ。言葉に出して言っていないことまで完璧にわかってほしいなんて、無理言ってしまったわね。ごめんなさい」
「元はといえば下手に勘繰って君を混乱させた俺が悪かったんだ。

それに、引っこみがつかなくなってひどいことも言った。本当にごめん」
「ねえ、光希。愛してるわ」
「俺も、サッちゃんを愛してる」
「また披露宴ができる時まで無事でいてね。わたし、今度こそ文句を言わないで元のドレスを着るわ。あのドレスのほうが好きなんでしょう？　ちょっぴりエッチなデザインだから。……楽しみ？」
「勿論。俺としてはそのドレスを脱がせる時まで無事でいたいよ」
「馬鹿……」
「サッちゃんも寂しいだろうけど、留守番頼んだぜ。元気で待ってくれよ」
「ええ」
「じゃあ、また」
受話器を置いて振り返ると、父様がニヤニヤしながらこっちを見ている。俺は天界に来ていた。正確には閻魔大王の手によって天界に飛ばされたわけだが。
俺の魔族の徴は消えていない。力も残ったままなのになぜか魔界への移動のみが不可能だった。そこで、サッちゃんに天界から電話をかけたのだ。
「わたしに代わらないで切っちゃうなんてひどいですよ」
と、抗議の声を上げるも、まだニヤニヤしている父様。
「あ、すみません。お待たせしちゃ悪いかなと思って、急いで切り上げちゃいました」
「まあ、わたしはこの前話したばかりだし、見つかるとまずいのでここから出ましょう」
ここは天界の、とある庁舎の電話室である。近代的な庁舎ビル全体は白を基調とした清潔なオフィスで占められている。いかにも天使達の仕事場という感じだ。父様ほどの人になると、魔界へ直通電話をかける秘密の番号も知っている。それは大いに助かったが、『彼』を葬った父様は左遷（させん）されて、堂々と電話室に入り浸って（いり

びたって）いる場合ではないらしい。なお、魔界への直通電話ができる場所は、このような電話室に限られているとのことだった。まあ、敵国みたいなものだしな。

電話室の扉を僅かに開けて様子をうかがい、俺達は電話室をあとにする。と、少し遠くの背後から、女性のよく通る声が呼び止めた。

「メタトロン！　またサボってたの？　秘書がボスに捜されてちゃだめよ。こっちへいらっしゃい。ダッシュ！」

メタトロンとは父様のことである。驚いたことに、父様は地上でも有名なほどの大物大天使だったのだ。

声の主、黒革の短いタイトスカートに、もう一つ上までボタンはめたほうがいいですよ、と言いたくなるような白いブラウスのダイナマイトセクシーは、大天使ガブリエルである。

僅かにカールした長いブロンドを無造作にポニーテールに引っ詰めたガブリエル様は、キャリアウーマン風の大人の美女といった風情だ。まあ、実際やり手のキャリアウーマンなのだが。地上人の見た目で言うなら二十代中盤ぐらいだろうか。

裏切りによって大天使を葬った大謀反人（だいむほんにん）の父様が天界に来て無事でいられるのは、このガブリエル様のおかげだという。ガブリエル様は、『彼』こと大天使ウリエル失踪時の同行者として疑惑視（ぎわくし）されかかった父様を、

『疑惑を持たれるような素行不良（そこうふりょう）の大天使』

と、糾弾（きゅうだん）し、彼女自身の秘書という名目で、事実上監視下に置くという大左遷を行った。単なる噂話の段階で、大臣クラスから秘書官への大左遷という辱め（はずかしめ）を受けた父様に、天界の世論や大天使会は同情的になったのだとか。

だが、なんてことはない。ガブリエル様は父様の恋人で、事件をうやむやにした上、いつも一緒にいられる秘書のポジションをちゃっかり与えただけだったのだ。ちなみに、魔界に便利な食物を送ってくれていたのもガブリエル様だ。

「光希さん、じゃあまたあとで」

父様は、やれやれと肩をすくめて見せたが、それでもどこか嬉しそうに女ボスのもとへ走っていく。

俺の仕事はと言うと、日の当たらない地下室で一人寂しく壁に向かった机に着き、今月の善行者リスト、つまり善良な地上人の一覧を整理するなどという、リストラ候補サラリーマンも真っ青なものだった。天界には時計もカレンダーもあり、それは地上のものと一致しているらしい。だから『今月の善行者』なる言葉も存在するのだ。

とはいえ、その仕事は、なんらかの仕事を必ずしなくてはならないという天界の規則を欺くためのカムフラージュであり、ガブリエル様が、

「あなた色々わけありみたいだから、地下で修行でもしてなさい」

と、あてがってくれたものだった。

俺は二人の大天使が直々に考案してくれたカリキュラムに従ってさまざまな本を読んだり、ひどく難解なパズルのような問題集をこなして過ごしていた。オーラの力を最大限に活かすには、『合理的な思考法』や、『無限なる英知との調和、そして一体感』を身に付ける必要があるのだとか。閻魔の拷問には遠く及ばないものの、なかなか頭痛と吐き気とため息を伴う作業だった。だが、地獄での一件以来サタンに疑念を深めつつある俺に、修行をして、し過ぎるということはなかった。

天界2

――九時始業、十七時終業という、古き良き時代のサラリーマンみたいな毎日を繰り返しながら数ヶ月が経った。魔界のゆったりした時に慣れつつあった俺には、時間の概念がある生活というのが随分と駆け足のように感じられた。もちろん、愛しの我が婚約者にも時折父様に付き添ってもらい電話していたが、長話が過ぎるとガブリエル様に二人仲良く首根っこをつかまれて、持ち場へと引きずり戻されるのであった。

――とある安息日（あんそくび）、地上で言う日曜日に、ガブリエル様が、

「たまに息抜きでもしましょう。とは言っても、あなた達はしょっちゅう息抜きしてるみたいだけど」

と、笑いながらピクニックを提案した。

ガブリエル様がサンドイッチを作っている間、居候（いそうろう）の俺達男衆は、物置からパラソルやレジャーシートを引っ張り出して出かける準備をする。天界では非常時以外の安易な物質化が禁じられているため、手間がかかるのは致し方なかった。続いて俺達はまとめた荷物を手に、ガレージへと向かう。そういえば、ここに来てから一度もガレージの中を見たことがなかったなと考えていると、父様がシャッターを上げた。そこにはタンクにハーレーダビッドソンと英文字で書かれた大きなバイクがあった。サイドカー付きのハーレーの荷台に荷物を括り（くくり）付けていると、時折へそをのぞかせるピタッとしたオレンジのタンクトップに、デニムのホットパンツという美味しそうな格好の美女が、つまりガブリエル様がバスケット片手に現れた。

「光希さん、ガブリエルに鼻の下を伸ばしていると、サッちゃんに言っちゃいますよ？」

と、父様が悪戯っ子のような顔をして言った。

運転するガブリエル様の後ろで彼女の腰に手をまわしている父様

と、サイドカーにちょこんと乗っている俺という図で三十分ほど走ると、山道に入った。しばらく、馬の蹄(ひづめ)のような乾いた排気音とともに山道を登っていくと、街を一望できる野原に出た。

雲の上に浮かぶ天動説の地球、もしくは巨大な島のような天界は、いつでもカラッとした青空だった。遠くに見える俺達の住む街『エンジェルタウン』は、パンデモニウムほどの規模ではないが、そこそこの大都市である。エンジェルタウンでは勤勉な天界人によって産業が発達しているので、物質化に頼らずとも大抵のものは手に入った。のんびりと空になど浮かんでいては、ＮＡＳＡか空軍にでも発見されるんじゃないかと心配したが、カムフラージュがしっかりとされているらしい。要するに、空に浮かぶ楽園的島国。それが天界だ。

「着いたわよ」

その声を合図に父様は荷をほどき、俺は「ウーン」と伸びをした。

山の中腹に広がる青々とした原っぱは、草刈りなどの手入れも行き届いていて、炊事場などの設備もあった。どうやらここは、眺めのよいキャンプ場のようだ。こんなに気持ちのいい場所が安息日に貸し切り状態なのは、街に近代的な娯楽施設が増えてきたせいだという。

父様がレジャーシートを広げると、早速その真ん中にガブリエル様が横になり、日光浴を始めた。俺はガブリエル様から少しだけ距離を置いて腰かけた。ガブリエル様のココナッツのような、アーモンドのような甘ったるい香りが届いてしまうと、父様やサッちゃんに申し訳ない不埒(ふらち)な妄想をしてしまいそうだったから。

パラソルを立て終えた父様は、ガブリエル様の向こう側に来て座った。

「あのハーレーって、地上のものじゃないんですか？」

「そうよ、地上のものを買って持ってくるのは特に問題ないから」

「そうなんですか。てっきり、ハーレーとダビッドソンがこっちに来てからもバイク屋を始めたのかと思いましたよ」

「そうか、その手があったわね！　今度捜し出して、店を出す気がないか聞いてみるわ！」
目を輝かせて答えるガブリエル様の様子からして、本当に彼等を捜し出しそうな気がする。
「光希君もバイクが好き？」
「ええ、まあ。地上にいた頃は丁度バイクに憧れる年齢でしたからね。学校にばれないように免許を取ろうかと考えてました」
「そうだったの。じゃあ、そのうち免許を取ったら一緒にツーリングしましょうか？　あ、でもあなたには魔界に可愛いフィアンセが待っているんだったわね」
「まあ、そうです。バイクか……。魔界に戻ったら物質化してみるかな」
「あっちはいつも暗いから天界ほど爽快感はなさそうだけど、彼女とタンデム（二人乗り）するといいかもね。その時は写真でも送ってね？」
父様に限って嫉妬なんてしないだろうが、やはりカップルの邪魔をしちゃ悪いだろうと思い立ち、俺は散歩に出ることにした。
「あら、お昼食べないの？　せっかく作ったのに」
父様が退屈している旨を視線で伝える。
「そっか、ありがとう。じゃあ、これ持っていって。木陰にでも入って食べるといいわ」
そう言うと、小分けされたサンドイッチの包みと、エンジェル印のペットボトル入りウーロン茶を手渡してくれた。ぶらぶら歩きながら後ろを振り返ると、ガブリエル様が父様の脚にちょこんと頭を乗せて、時折笑い声を上げているのが見えた。
散歩もそろそろ飽きてきたので、木陰に入ってサンドイッチを頬張っていると、俺が歩いて来た木々に囲まれた小道を誰かが歩いて来る。見るともなしに眺めていると、近付いてくるのが女の子だとわかった。

日の光を浴びて輝くショートカットの黒髪を黄色いカチューシャで押さえた、あどけない顔の女の子。サッちゃんや俺より少し年下に見えるから、地上人で言うなら中学生か高校に通い始めたぐらいの年齢といったところか。白いキャミソールに白いミニスカートの姿は、元気なテニス部員みたいな印象だった。

天界3

「こんにちわ」
「やあ、こんにちは」
「座ってもいい？」
「ああ、勿論」
女の子はミニスカートを両手でかばいながら、俺の横に、脚を伸ばして腰を下ろした。歩き疲れたのか、楽しげなカウントとともに前屈運動をしている。効き目あるのか？　と思うような緩いストレッチをしている女の子だったが、純白のキャミソールから、控えめな胸の膨らみを持ち上げるシンプルな布製品（こちらも同色）が見え隠れしたので、慌てて快晴の空に視線を移した。
俺は婚約指輪がはまった薬指を握ったり離したりしつつ、口の中に残っているサンドイッチを飲みこんだ。
「あなたは一人で来たの？」
女の子が首を傾げて俺の目を覗きこむ。日の光を反射して輪っかを作っている黒髪が、サラサラと重力に引かれ、新鮮なフルーツみたいな香りがした。
「いや、三人で来たんだけど、カップルの邪魔しちゃ悪いと思って退散してきたんだ」
「へえ。カップルさんか。羨ましいな～」
「君は？」
「あたしは一人。去年職場のパーティでこの辺りに来てからお気に入りで、たまに歩きに来るの」
「そうか、いいところだもんな。そうそう、俺は光希、君は？」
「あたしはミカって呼ばれてるわ、みんなからは」
「へえ、ミカちゃんか。そうだ、これ食べる？　カップルの彼女の方が手作りしてくれたやつなんだけど、ちょっと多いからさ。なかなか美味いよ？」

「いいの？　じゃあ一つちょうだい」
ミカちゃんにサンドイッチを手渡すと、
「いただきま～す」
と、一口かじって、とても幸せそうな表情を浮かべた。
あまりにも美味そうに食べるので残りの全部を手渡すと、びっくりしたみたいに大きな瞳から、キラキラ星が聞こえてきそうな喜びの表情で礼を言う。
――ミカちゃんが最後の一切れを食べ終えようとした時だった。
「んん……」
「つっかえたの？」
必死に訴える目をするミカちゃんに飲みかけのペットボトルを渡してやると、一口飲んで落ち着いた。
「ありがとう、苦しかった～」
サッちゃんみたいな気の強いわがまま姫もいいが、こういう飾らない女の子ちゃんも捨てがたいな、なんてことを考えながら他愛もない会話をしていると、ミカちゃんの視線が俺の左手、薬指辺りをロックオンした。
「光希君、さっきから気になってたんだけど、それって」
「ああ、婚約指輪なんだ。おっかない彼女から送られたね」
「そうじゃなくて、その紋章……」
「え？」
「あなた魔界人なの？」
「あ、いや、その」
俺はとっさに左手を隠した。
「隠すところが怪しいわ。そんなものを大事に着けているなんて、魔界人なんでしょ？　白状なさい！」
ミカちゃんは急に激昂（げっこう）し、冷たい怒りで血の気が失せたように、顔が青白くなってゆく。
さっきまでの愛らしさが嘘だったかのように、据わった目で俺を見つめるミカちゃん。か細い背中から、小柄なミカちゃんには大き

すぎるくらいの白い翼が現れた。
「光希君、いい人だと思ったのに。あたしを騙したわね！　この悪魔野郎！」
「ま、待ってくれ、ミカちゃん」
「気安く呼ばないで！　気持ち悪い。悪魔の口があたしの名前を発音するなんて許せない、寒気がするわ！」
ふと思い出したようにミカちゃんは目を伏せた。
「……いやだ、あたしってば悪魔の食べ物を……死んじゃう……あたし死ぬんだわ……」
ミカちゃんはひざまずき、息も絶え絶えに祈りのポーズで天を仰ぐ。
「……あたしが愚かでした。蛇の目をした男の仕掛けた罠に……こうも容易く（たやすく）引っ掛かるなんて……どうかこの者を呪ってください。そして、かつてエヴァになさったようにあたしを……覚悟はできております」
ポロポロと後悔の涙を流すミカちゃんを眺めていたくもあったが……。
「やっぱり怖いよ……お爺ちゃん……許して……」
魔族一人にここまで取り乱す子が、追放を甘んじて受け入れる覚悟などできるわけがなかった。
「あれは天使が作ったものだから、なんともないって。大体、サンドイッチの一つや二つで大げさな……」
「ほんと！？　じゃあ、あたし死ななくていいのね！　追放されずにすむんだわ！」
俺の手を握り、無邪気に跳ね回るミカちゃん。だが、すぐに凶悪な表情を取り戻し、ポケットからハンカチを取り出して手を拭う。
「今回だけは見逃してあげるから、さっさと蛇の穴に逃げ帰るがいいわ。ところで、さっきのサンドイッチとお水はどこから盗んだの？　あたしが弁償しておくから、正直に言いなさい」
「ちょっと待て、俺は盗みなんかやってない。お世話になってる天

使のお姉さんからもらったんだよ」
「そっか……。そうやって嘘までつくのね。もう許せないわ」
「君も天使なら少しは人を信じたらどうなんだ？　魔界人も天界人も、それぞれの意思を持った同じ生き物じゃないか。君は差別主義者なのか？」
「だって、お爺ちゃんが言ってたもん！　魔界の汚らしい奴等と口をきいちゃだめだって！　あたしも人なら信じるわ！　あなたが悪魔じゃなくって人だったなら！」
「君はお爺ちゃんが言うことならなんでも正しいと思うのか？　自分の考えってものがないのか？」
「そうやって、あたしを誑かして（たぶらかして）魔界に堕とそうって魂胆なんでしょ？　あたしを手込めにして、無理矢理ハーレムに連れていく気なんだわ。変態！　馬鹿！　悪魔！」
「君は何をそう、先走ってるんだ？」
「問答無用！」
ミカちゃんの膨らみ続ける妄想を具現化したような、恐ろしく巨大なオーラの塊が俺を襲う。
「危ないって！　当たったらどうなると思ってんだ！」
「消え去るのよ。だって、そのつもりだもん」
魔界人の俺からしたら、ミカちゃんは敵と言えなくもないが、父様やガブリエル様の仲間であるところの天使を攻撃する気にはなれない。それに、こんな可愛い女の子を冷酷に斬り付けるなんて、人でなしみたいな真似をできるはずがなかった。俺も一応、翼と剣で武装したが、これは防御のためだ。
「恐ろしいわ。なによ、その真っ黒な翼。それに、その剣の柄（つか）。乾燥した何かの骸（むくろ）みたい。ばっかじゃないの？　あああああ、きーもーちーわーるいいい！」
そう言ってミカちゃんは、自分の身体を抱き締め、地団駄を踏む。
ミカちゃんは喋っている間、少し手がお留守になる傾向があったが、その攻撃が一度始まると、威力、スピード、正確さの三拍子そ

ろった凶悪な戦闘能力を発揮した。この子、いったい何者なんだ？
山が穴ぼこだらけになりそうな攻撃を辛うじてかわしつつ、挑発したりなだめたりしてミカちゃんを喋らせるよう仕向けていると、背後から声がした。
「ちょっと、光希君、ミカ！　何やってるのよ？」
振り返ると、熱々カップルが手をつなぎながらも慌てて走ってくるのが見えた。
ミカちゃんの凶悪な表情が、瞬時に可憐な少女のそれに戻る。
「あ、ガブちゃん、メッティも。デートしてるの？　いいな～」
ミカちゃんは、つながれたカップルの手を上から握って、ピョンピョン飛び跳ねた。
「それより、あなたどうして光希君を襲ってるわけ？」
「え？　ガブちゃん、もしかしてこんな汚い奴と知り合いなの？」
「知り合いというか、うちに居候させてるのよ。わたしのお気に入り君」
「い、いや～。不潔、不潔よ！」
ミカちゃんは軽蔑したような目をしてあとずさる。
そこへ父様が割って入った。
「ミカ、また君はそうやって人を人種で判断する。良くないですよ。大天使たるもの、常に公平な目をもって人に接しなければ」
「だって、お爺ちゃんがね、あたしに言うのよ？　魔族となんか口をきいちゃだめだって。怠惰な病気がうつるって」
ミカちゃんは長い睫毛（まつげ）を音がしそうなほど瞬かせ（しばたかせ）、父様に上目づかいする。
「嘘はいけませんよ、ミカ。あのかたがそんな差別主義者のようなことを言うものですか」
「そうよ、ミカ。嘘はだめ。お尻叩くわよ」
ガブリエル様が右手を上げて見せる。
「だって～、言ったんだもん。ほんとだってば！」
華奢な白い脚をじたばたさせて、必死の抗議をするミカちゃんに

ガブリエル様が近付くと、ミカちゃんは、
「ひっ！」
と、あとずさりし、ピューっと空を飛んで逃げ去った。その後をガブリエル様がおっかない顔で追いかけた。
「あの子の差別主義には困ったものですね。怪我はありませんか？光希さん」
「ええ、なんとか。それにしても、あの子はいったい？」
「天使長ミカエル。彼女の名です。我々はミカと呼んでいます」
「天使長ってことは、天使の中で一番偉いってことですか？」
「そのとおりです。将来は神の右腕となって天界を背負って立つべき者なのですが、精神的に未熟で、危ういところが多々あるのです。同じ大天使として、我々は彼女の保護者兼、教育係といったところでしょうか」
「じゃあミカちゃんの言う、お爺ちゃんって」
「神です。今は眠りについていて、彼女が言ったようなことはおろか、意思の疎通も一切できないはずなのに」
「父様は娘に手を焼く運命にあるようですね」
「まあ、育っていく娘達を見届けることのやり甲斐に比べれば安いものですよ。父親の苦労なんて」
「それにしても、今日はビシっといきましたね。見違えましたよ」
「わたしも閻魔大王に言われてから少し反省したのですよ。やはり娘達に甘い顔ばかりしていると、結局娘達のためにならないってね」
なんてことを話していると、ガブリエル様がミカちゃんの耳を引っ張りながら戻ってきた。
「ガブちゃん、痛いってば～。耳取れちゃう～」
「さあ、光希君に謝るのよ、ミカ」
「やだ～。こいつ悪魔だもん」
「明日座れなくなっても知らないわよ？」
ミカちゃんは小さなお尻を両手でかばう。既にたっぷり打たれて（ぶたれて）きたのだろう。

「ご、ごめんね。光希君。気持ち悪いとか言って」
「いや、いいんだよ。気にすんなって」
ガブリエル様がミカちゃんの右手をとって、俺と握手するよう促すと、一瞬あとずさりしたものの、俺の手をおずおずと握ってくる。俺が手を握り返すと、ミカちゃんの腕がプツプツと粟立って（あわだって）きた。
「……いいやああ！　今、あたしの手を握っていやらしいこと考えたでしょ？　そういえば、そのペットボトル……。あたしを想像しながら舐めまわす気だったのね？　変態！　馬鹿！　スケベ！」
ミカちゃんは転がっていたペットボトルを拾い、小さい舌をべーっと出して見せると、矢のような速度で飛び去っていった。二人の教育係は、やれやれと両手を上げて、顔を見合わせている。
ゴキブリ同然に毛嫌いされた俺だが、なんだか愉快な気持ちでサイドカーに揺られ、家路についた。

天界4

数日経ったある日、リビングのソファでくつろいでいると、ガブリエル様が俺の上体を起こし、形の良い右手で背中をさすってきた。
「あ、あの～。お気持ちは嬉しいんですが……俺には婚約者が……」
「何か言った？」
「い、いえ……なんでも……」
ガブリエル様は大して気にした様子もなく、腕組みして、しげしげと俺の背中を見つめている。
「やっぱり、天界であの翼はまずいわね」
「と、言いますと？」
「魔界には堕天使もいることだし、人種がどうこう言う人も少ないでしょうけど、天界にはミカみたいな偏見を持った人も結構いるのよ」
「なるほど。でも、そう簡単に付け替えたりもできないだろうし」
「そうね。簡単ではないわね。少なくとも光希君にとっては」
「俺にとって？」
「ひどい苦痛を伴う方法ならできないこともないけど、我慢できる？」
「痛いのはいやだけど、ミカちゃんにあんな目で見られるのはつらいし、我慢してみますか」
「あの子を気に入ったの？　だめよ？　変な気起こしちゃ」
「いや、そういうんじゃなくて、なんかこう憎めないというか」
「まあいいわ。ちょっと待っててね」
――少しして、父様を連れて戻ってきたガブリエル様の手には、タオルを巻いた『すりこぎ』のような木の棒が。
「光希君、翼を出して、これ噛んでちょうだい」
言われるままにすると、二人は俺の背後に並ぶ。
「覚悟はいい？　泣いちゃっても笑わないから、息を止めないよう

に気を付けて。歯が折れると面倒だから、まずいなと思ったら意識して叫んだほうがいいかもしれないわ。あと、オーラは出さないでね」
物凄くいやな予感がしたが、男に二言はない。タオル棒の噛み具合を確かめ、親指を上げて示す。片方ずつ翼を持った二人は、
「せーの」
と、かけ声をかけ、俺の背中に片脚を踏ん張って、容赦ない力で翼を引っ張った。
「ん、んんん、んがあああ！」
バリバリという音と心臓を吐き出しそうになる痛みに腹一杯の叫び声を発し、タオル棒を床に落っことしたところで、背後から茶碗やら何やらの割れる音がした。
「よし、取れたわ」
二人は翼をもいだ拍子に勢い余って突っこんだ食器棚を気にしつつ、もげた翼を俺に手渡してくれた。記念にとっておくというのも気持ち悪いなと思っていると、翼は砂のように崩れ、消え去った。
「さあ、次は引っ張り出すわよ。さっきほど痛くないとは思うけど、準備はいい？」
「はい」
「よし、男の子だ！」
ガブリエル様の長い爪が俺の背中に十字架を刻み、手を突っこむ。いくら美人の手でも、背中から入りこんでモゾモゾやっているのは、あまり気持ちのいいものではなかった。まあ、ごついパパの手より百倍はましだが。なんて考えているうちに、ググッと引っ張られる痛みを感じて、翼の換装（かんそう）が終了した。
「よく頑張ったわ。メタトロン見て、わたし達の翼とそっくり。むしろ、ミカと同じぐらい？」
「確かに。膨張色の白になったとはいえ、これだけ大きな翼は……色々あって成長したせいかもしれませんね」
父様が頭を撫でてくれて、なんだか気恥ずかしかった。

「光希君、あなたやっぱりただ者じゃないわね」
渡された手鏡を見ると、背中に大天使の皆さんと同じような、白くて大きな鳥のような翼が生えていた。試しに出したり引っこめたりしてみても、元の翼と使い勝手は変わらないようだった。
「翼って引っ張り出してくれた人に似るんじゃないんですか？　ガブリエル様に引っ張ってもらったから大天使級になったのかも」
「いいえ、それだけじゃないわ。確かに翼の属性は継承するけど、大きさや性能は持ち主の潜在能力で決まるのよ」
と、いうことは、『彼』こと大天使ウリエルをも超えられたのだろうか？　あの日、指一本触れることすらできなかった『彼』よりも……。いや、潜在能力ってことだし、まだまだだよな。
「そういえば、ミカの翼を出した時は、大泣きした上に爪を立てられて大変でしたね。ガブリエル」
「そうそう。オーラ全開で暴れたから、ひどい目にあったわよね」
「ミカちゃんの翼を引きちぎったんですか？」
「いいえ、十字架を引っかいただけで泣き出したんですよ。ミカは痛がりですからね」
ミカちゃんの思い出話を聞きながら、左手を眺めて、婚約指輪を外したくないなと考えていると、ガブリエル様が言った。
「その指輪ね。見なかったことにするから、十字架入りのフェイク（にせもの）でも作ってしてるといいわ」
俺は早速、逆五芒星を描くと、指輪を取り出した。我ながら、サッちゃんが作ったものとそっくりなデザインだ。上手いこと十字架をほどこした指輪を作れて満足し、指輪を付け替えた。ついでに物質化した小箱にサッちゃんの指輪をしまい、静かに蓋を閉める。
――その晩、ガブリエル様の手料理と、父様自慢の自家製ぶどう酒による「光希の改心（仮）記念パーティ」がささやかに行われた。そこにはミカちゃんも急遽呼び出されて参加した。
「とうとう改心してくれたのね。おめでとう光希君。それでこそあたしが見込んだ、いい人の光希君だわ」

ミカちゃんは俺に抱き付いた。見た目だけの改心も、こう無邪気に喜んでもらえると、痛みに耐えた甲斐があるというものだ。

――ミカちゃんは人が変わったように俺にベタベタと甘え、たまに教育係のお二人から咳払いとにらみのセットを受けていた。それが百パーセント、ミカちゃんだけに向けられたものでないというのは、明らかだった。

――たまににらまれながらの楽しいパーティだったが、俺の肩にちょこんと頭を乗せてウトウトし始めたミカちゃんに、

「そろそろ帰って寝ないと明日起きられないわよ」

と、ガブリエル様が忠告して、お開きになった。ミカちゃんが名残惜しげに飛び去ったあと、すれ違いざまにガブリエル様が俺の二の腕をギュッとつねった。ベッドに入った俺は、未来の恐妻（きょうさい）に逆さ吊りにされる夢を見た。

天界5

俺はその日、課題の読書がはかどらないので、同じ室内のベンチで昼寝をしていた。念のために言っておくと、『無限なる英知との調和、そして一体感』を得るためには、闇雲に頑張っても駄目だという『合理的な思考法』によって、この昼寝は肯定されるのである。断じて、ガブリエル様が会議中で安全だからではない。

――アラーム付きの置き時計に会議終了十分前をセットしたものの、本格的に眠ってまでいなかった俺の耳に、ドアを開ける音が聞こえた。

「みーつき君、あ～そぼ！　……あ、寝てる」

俺は悪戯心から、ミカちゃんが近付いたところで、

「ワッ！」

と、声を上げてやろうかと思っていた。待てども足音がしないので、目を開けようとした時だった。

柔らかい感触が俺の唇に触れた。

クスクス笑いとともに、イチゴ飴の香りが鼻先をくすぐった。イチゴ飴とは別の香り、脳に直接はたらきかける肌の香りが、俺を『悪魔』に変えた。ミカちゃんを乱暴に抱き締め、強引に唇を吸い、侵入してゆく。イチゴ飴が残る小さな口内は甘ったるかった。砂漠の遭難者さながらに、俺は夢中で甘い水を求め、さまよい続けた。ミカちゃんは目を見開いて体重の大半を俺の腕に預けていた。

「……ごめん」

ミカちゃんはヘナヘナと床に座りこんだ。

「ちょっとキスしたかっただけなのに……光希君の馬鹿……変態……悪魔」

ノロノロと立ち上がったミカちゃんは、部屋を出ていった。

翌日、仕事場に、何もなかったような顔をしてミカちゃんが遊び

にきた。
「光希君、チューしようよ。ガブちゃんとメッティは、毎日あんな気持ちいいことしてるのよ？　ずるいと思わない？」
「ごめん、昨日はどうかしてたんだ。許してくれ、ミカちゃん」
「ひどいよ光希君。……あんなこと教えておいて。みんなに言っちゃうんだから」
俺は、無邪気な脅迫に勝てなかった。
自分の過ちが原因とはいえ、天使長に背負わされた十字架は重かった。

その地位のためか、ミカちゃんは毎日のように自分のオフィスを離れて、堂々と俺の仕事場に遊びにきた。そして、もう一度だけと口付けをせがむ。個室を与えられていたことが、ミカちゃんを拒む理由すら奪っていた。抵抗虚しく、俺はミカちゃんに唇を奪われ続けた。
そのまま後ろめたい日々が続き、進めてきた俺のカリキュラムも、最後の一冊をもって終了した。
その本は大まかに言えば、自分の限界を超える方法というような内容だった。顕在意識（けんざいいしき）を空っぽにすることで潜在意識（せんざいいしき）に直結し、オーラの力を無限大まで高めるという雲をつかむような話だ。そんなことが俺にできるのだろうか？　と疑問に思いつつ、他にやることもないので、自分なりに瞑想（めいそう）したりして自主トレの日々が過ぎていった。
そんな日々の中、ミカちゃんにキスされる度、俺は家に帰るとすぐに指輪を取り出して磨いた。取り出した指輪は、いつも磨いているのにどこかくすんで見えた。いっそ、指輪がすり減って無くなってしまえばいいとさえ思った。

ある日の自主トレ中、異変が起こった。暴力的なほどの揺れが身体に感じられた。ひょっとして、これが潜在意識との直結、すなわ

ち無限大のオーラの爆発か？　つまり、『無限なる英知との調和、そして一体感』なのか？　と、喜び勇んで目を開けると、放ったらかしにしていた書類やら、マグカップやらが床に散らばっていた。どうやら内面の爆発ではなく、実際に何かあったらしい。ロケットか隕石でも衝突したのだろうか？　俺は一階ロビーのテレビで確かめることにした。

一階ロビーには既に天使達が大勢集まって画面に食い入っていた。役職付きの大天使達は、自分のオフィスにテレビやパソコンがあるので、そこで情報収集しているのだろう。

画面に映っているのは人間界の海で、大西洋のど真ん中ということだった。そこには、ヘリコプターか天使かの空撮によっても、全貌が画面に入りきらないほどの大穴が開いていた。

その円周からナイアガラの滝も裸足で逃げ出すような、巨大瀑布（きょだいばくふ）が流れこんでいた。海が滝になって流れこんでも埋まらないということは、その穴の奥行きが尋常（じんじょう）な深さでないということだ。

もし、この穴が魔界につながっていたら……。

そう考えた俺は、サッちゃんの安否を確認するため、電話室へと急いだ。

電話室は混雑しているかもしれない。そう思いながら電話室に駆けこんだ俺だったが、大天使クラスでもないと魔界に電話などできないのだから、電話室が空っぽなのは当然といえば当然だった。人のいい父様も、魔界への直通番号まではさすがに教えてくれていなかった。

かけたくてもかけられない電話に苛々（いらいら）しながら、父様を捜しにいこうか迷っていると、父様が駆けこんできた。

「光希さん、もうかけましたか？」

「番号がわからなくて」

「ああ、そうでしたね。今かけます」

父様は何度もボタンを押し間違え、ようやく正しい番号を押し終えると、受話器を耳に当てて待った。

――幾ら待っても応答がないらしく、何度かけ直しても同じだった。
苦々しい表情で首を振りながら、父様は別のところへかけ直したようだ。
父様が魔界で知り合った友人から聞いた内容は、次のようなものだった。

穴は魔界まで続いているが、サタン様の力によって、被害の出ない荒野の低地に流入する海水を移動させている。かねてから魔界に海が欲しいと言っていたサタン様が、その予定地への海水供給路建設を命じたので問題ないだろう。被害者の報告も入っていない。

魔界に海が欲しいとは、気まぐれなサタンらしいが、地上の海が干上がったりしないんだろうか？　なんて心配しつつも、被害者なしの報告に俺達は胸を撫で下ろしていた。きっとサッちゃんは出かけていただけだったのだろう。父様と俺はそれぞれの持ち場に戻った。

自分の持ち場に戻った俺は、何か忘れている気がして考えると、それは、さっきの地震そのものの原因を確かめていないということだった。俺がもう一度テレビを見にいこうと仕事場のドアを開けると、ミカちゃんが立っていた。
「うわっ！　……やあ、ミカちゃん。怪我はない？」
ミカちゃんは問いかけに答えず、顔面蒼白で立ち尽くしている。

天界6

「どうした？　何か用があって来たんじゃないの？」
しばらく呆然としていたミカちゃんは、急に俺の胸に顔を埋め（うずめ）、火がついたように泣き出した。泣きわめくあまりに聞き取り難い（にくい）が、死にたくないとか殺されるとか言っているようだった。少し落ち着くまで泣かせて、部屋の中に連れていき、事務用の椅子を転がしてきて座らせた。
まだ喉をしゃくり上げているミカちゃんに目線を合わせて言った。
「何があったか、ゆっくりでいいから言ってごらん？」
しばらく沈黙したままのミカちゃんだったが、俺の目を見て、おずおずと切り出した。
「……お爺ちゃんがね、死んじゃったの」
「お爺ちゃんって神様だよね？」
「……そう」
俺は、神死亡という、宇宙で一番驚愕すべきニュースに驚いて声を上げそうだったが、なんとか堪えた（こらえた）。
「どうして死んじゃったと思うの？」
「あたしが死なせたから。……たぶん」
今度は神殺しが自分の仕業ときた。確かにそんな力を持っているとすれば、この子と数名以外には考えられないが、これは真実だろうか？　この子には妄想癖（もうそうへき）などないか？
「なぜそんなことしたの？」
「お爺ちゃんがね、もう眠るのも疲れた。殺してくれって言ったから」
「さっきの地震はそれと何か関係があるの？」
「あれはね、お爺ちゃんが、魔族どもを焼き払ってやりなさいって、キーをくれたからなの」
「何のキー？」

「大昔の戦争で魔界と地上を焼いた古代兵器。あたしのオーラを増幅して、魔界まで届く一撃をお見舞いしてやったのよ。痛快でしょ？　……あ、でも光希君も元魔族だから、こんなこと言ったら悲しい？」
「そうだね、悲しい。このことはガブリエル様か誰かに話した？」
ミカちゃんは、ガブリエル様と聞いて、また狂ったように泣き出した。
「……ガブちゃんに殺されるわ。いいえ、メッティも他の大天使も。死にたくないよ。あたしを連れて逃げて？　光希君、いいでしょ？」
ミカちゃんのおねだりに一瞬クラッときたが、叶えてやれる願いではなさそうだ。
「いいかい、ミカちゃん。この件にはなんだか不可解な点があるし、逃げて済む問題じゃない。みんなで考えよう。きっと誰も君を殺したりはしないから」
「ほんと？　絶対？」
「もし、理不尽な理由で君が殺されそうになったら、その時は一緒に逃げてやるさ。ただし、行き先は魔界か地獄になるかもしれないけどな」
「死んじゃうより、ましだわ」
ミカちゃんはまた俺の胸に顔を埋めた。頼るべきあてができて、安心したように。
「よし、じゃあガブリエル様に報告にいこうか？　一緒にいくから」
「うん」
心持ち血の気の戻った顔で俺の右腕を抱えながら歩くミカちゃんを連れて、ガブリエル様のオフィスに向かう。
エレベーターが直接出入り口になっているガブリエル様のオフィスに着くと、オフィスの主と父様がいた。泣き腫らした目をしているミカちゃんに少し驚いた様子を見せながら、俺達を来客用のソファに促す。
「どうしたの？　また何か壊した？」

なかなか切り出せないミカちゃんに俺は訊ねた。
「自分で言えるかい？」
ミカちゃんはブンブン頭を振って、俺の肩に顔を埋めた。
「では、代わりに話しますが、非常に衝撃的なことです。心して聞いてください」
「何よ、改まって」
「どうしたんですか？　光希さん」
二人が怪訝な顔をする。
「ミカちゃんは、お爺ちゃん、つまり神様を殺したかもしれないと言っています。そして神様から受け取ったキーを使って古代兵器を起動し、増幅したミカちゃんのオーラによって魔界を攻撃した。この二つです」
「ちょっと、あなた何を言ってるの？　冗談だとしても質が悪いわよ」
「もし冗談でないとすれば、事と次第によっては……」
俺は人差し指を口に当てて制した。その先の内容がなんであれ、また大泣きするのが目に見えていたから。
「俺としても半信半疑なんですが、裏付けを取ることは、そう、確認はできますか？」
「わかったわ。あなた達も一緒に来なさい」
四人そろって神の寝所を目指す道すがら、二人に、神の声に指示されたというミカちゃんの言い分などを話して聞かせた。
寝所の扉を開けて、ミカちゃん以外の全員が驚愕半分、やっぱりかという思い半分といった顔で立ち尽くした。
そこには神様と思しき小柄の老人が、胸にピンク色の美少女戦隊か何かのオモチャみたいな剣を突き立てられて死んでいた。
「参ったわね。まったく、なんてことしてくれるのよ……この子は」
ガブリエル様はミカちゃんに力なくげんこつをはる。ミカちゃんは俺に貼り付いたまま、ビクっと身体を硬直させた。
「神の声というのが気になりますが、これはわたし達だけでどうこ

うできる問題じゃありませんね」
「さすがにこんなこと隠し通す自信がないわ。ミカ、何とかしてあげるから、みんなにちゃんと話すのよ？　わかった？」
ミカちゃんは黙ってうなずいた。
「メタトロン、すぐに大天使会を招集してちょうだい」
「わかりました」

天界7

他の大天使達も大半が近所の庁舎にいたらしく、二十分もすると全員が集まった。

ミカちゃんは俺から引っ剥がされ、ガブリエル様に肩を抱かれながら会議室へと入っていった。

今は役職に就いていない父様と一緒に、会議室前のベンチで待機することにした。

「……ミカちゃん、どうなるんですか？」

「そうですね、最悪の事態も考えられますが、神なき今、あの子は天界の象徴とも言えますから滅多なことはないと思います。ガブリエルもついていることだし……。そう、思いたい……。ですが、あの古代兵器はかつてアトランティスと呼ばれた大陸を滅ぼした、忌むべき最終兵器なのです。神を葬っただけではなく、最終兵器のタブーまで犯したとなると……」

「アトランティスって、大昔に現代よりも優れた文明を持っていたっていう、あの大陸ですか？」

「ええ、正確には魔族発祥の地ということになりますが」

「と、言うと？」

「アトランティスは当初、天界を追放された堕天使達の流刑地でした。監視の目が届きやすいように、天界の真下に位置するあの大陸が選ばれたのです」

「その流刑地がどうやって、超文明に？」

「当時の天使長ルシフェルを処刑せず、追放したのが事の起こりでした。ルシフェルは『千年の眠りの刑』、つまり千年間凍った棺の中に封印する刑に処されたのですが、彼は甘んじて眠りについてなどいなかった。千年の間身動き一つできず、覚醒したまま狂気をさまよったことで、結果的に神に等しい力を得ることになってしまったのです。千年の刑期を終えた時、彼は天界に反旗を翻し、

当時は悪事を象徴する言葉に過ぎなかった『悪魔』を名乗るようになった。そして、流刑地で天界に恨みを持つ者を募り、無闇に物質化を用いて栄え、しまいに天界を脅かす国家、すなわち魔界を作り上げました」

「じゃあ、魔界は元々地上に？」

「ええ。その地上にあった魔界、つまりアトランティス大陸を地底深くに沈めたのが例の古代兵器です。あの兵器はかつての同胞であった大勢の堕天使達を焼き尽くし、一つの大陸を地中深くに沈めてしまった。その被害たるや、地球全体に影響を及ぼしかねないものでした。しかし、魔界の要人達は攻撃を事前に察知し、紋章を使って逃げおおせ、地中に出来た空洞を利用して新たな魔界を創り上げた。肝心なルシフェル以下黒幕達を葬ることもなく、ただの受刑者に過ぎないアトランティス市民に対する被害だけが大きかった最終兵器は、その後、永遠に封印されることになったのです」

「でも、今回はその……海だけだったし……」

「ミカ一人のオーラでは、到底かつての威力を再現するほどではなかったでしょう。人的被害が出ていないのは幸いでしたが……よりにもよって、禁忌の象徴を……それを大天使会がどう判断するか……」

父様は心底悔しそうな顔をして、自分の膝を拳で何度も何度も叩いた。そこに涙がポツリポツリと落ちて、俺もまた顔を覆って泣いた。

――時折ガブリエル様が大声を出すのが、漏れ聞こえてくる。

――永遠のように感じられた二時間ほどが過ぎ、大天使達が帰ってゆく。

会議室に入った俺達は、魂が抜けたような顔で立ち尽くすミカちゃんを抱いて泣き崩れる、ガブリエル様の姿に出会った。

そこに向かう間中（あいだじゅう）一人の大天使が俺達を監視していた。

辿り着いた先は近代的な作りの二階建てで、白く塗られているも

のの高い塀に囲まれ、重苦しい空気を醸し出している面積ばかりが大きい建物。拘置所だった。
所内に入ると、看守がミカちゃんに十字架の刻印が入ったごつい手錠をかけようとした。ガブリエル様は、
「わたし達が何とかするから、やめてあげて。それだけは……」
と、制した。
監視についてきた大天使がうなずくと、手錠を持った看守は敬礼して自分の持ち場に戻っていった。一行は別の看守に先導され、何度もカードキーで守られた鉄格子を通り抜けた。やがて俺達は、ベッドと洗面所しかないものの清潔で広々とした、大物用と思しき独房の前に到着した。
独房の前に直立不動で立っていた看守は、先導してきた看守に敬礼したあと、鉄格子の扉を開け、ガブリエル様を促す。ガブリエル様がミカちゃんをきつく抱き締めたあと、中に入れようとすると、ミカちゃんは半狂乱になって悲鳴を上げた。
「やだ！　ガブちゃんやめて！　光希君、メッティ助けてよ！　いやよ！」
強大なオーラを身体中から発散して逃れようとするミカちゃんを、ガブリエル様と父様がなんとか抱き締めて制する。ガブリエル様と父様は、ミカちゃんのオーラで全身にひどい火傷を負っているようだった。ガブリエル様は傷付いた身体もかえりみず、嗚咽（おえつ）混じりに言った。
「かばって……あげられなかった。ごめんね……。ミカ許して……」
父様がくしゃくしゃに泣き濡れた顔で叫んだ。
「ミカ……こんなことになるなら君をもっと自由に、普通の子どもと同じ道を歩ませてあげればよかった。重職に就け、神と接見できる立場になど……。なぜだ！　なぜこんなことになったんだ！」
ミカちゃんの狂って暴れるオーラで重傷を負いながらも必死の形相で抱き締める二人を、俺は黙って見ているしかなかった。俺は、あなた達ほど大人じゃない。いやがるミカちゃんを独房に押しこむ

なんて、できるわけがない。だが、本当は大人の二人だって、それは同じはずだ。俺は卑怯者だった。

看守が再度催促してきたのを合図に、二人は力まかせにミカちゃんを独房の中へと押しこんだ。扉が閉まり「ジー」といういやな音がして、ロックがかかる。独房の中ではオーラを使えないようになっているらしく、中にいるのは、

「出して、一人にしないで！　殺さないで！」

と、鉄格子をひたすらに叩くただの女の子だった。

結局俺は、錯乱したミカちゃんに声をかけてやることさえできなかった。嘘つきと叫ばれそうで、どうしようもなく怖かったから。

俺達は庁舎に戻ることも忘れて、帰宅の途についた。

家に帰り着くと、ミカちゃんのオーラで深い傷を負った二人は早々に寝室へ引き上げ、俺も自分のベッドに入った。一睡もできずに時計の秒針を聞き続けた。

――朝日が昇り、カーテンを開けた時にそれに気付いた。一通の手紙が観音開き（かんのんびらき）の窓の隙間に捻じこまれている。

「刑の執行は本日十五時。マスターキーを同封する」

ごく普通の明朝体（みんちょうたい）で印字された手紙は、この一行のみだった。同封されたマスターキーを見ると、灰色の無地ではあるものの、カードキーとして有効そうではあった。あの拘置所のものという保証はないが。

何かの罠の可能性もあるが、俺はミカちゃんとの約束を守ることができるかもしれない。そう思うと、躊躇い（ためらい）はなかった。部屋を片付け、出発の準備を済ませると、俺はこの家の二人に手紙を書いた。下手に証拠を残すとまずいので、今日までの居候生活に対する感謝の思いだけを綴った（つづった）短い手紙を。そして、俺はマスターキーが入っていた封筒と手紙をオーラで焼き消した。

持ち物はマスターキー一つのみ、心配なことは、どうやって可愛

いミカちゃんとの逃避行をサッちゃんに説明するかということだけ。おっと、調子に乗って本物の婚約指輪を忘れるところだった。俺はこれから重大な犯罪を犯そうとしているのに、魔界の歌など口ずさんでいた。

今はまだ九時前、時間はたっぷりある。

俺は拘置所に着くと、面会希望の旨を受付の看守に伝えた。通らなかったら厳しくても実力行使しかないと考えていると、あっさり一枚の書類にサインを求められた。シャツの中には魔族の徴があるっていうのに、この拘置所これでいいのか？　と苦笑しつつ、書類に向かう。ミッキー大島などという怪しい芸能人みたいな偽名を書きこんだ。

「ほう、あんた地上人上がりらしいが、善行を認められて天界にきたのか？　若いのに関心だな。大島ってことは日本人か？」

日本に興味があるという、受付の看守に適当な話をしてやると、楽しげに耳を傾け、やがて受話器を取った。

呼び出された看守に先導されて昨日通ったばかりの通路を進んでゆく。目当ての独房に着くと、ミカちゃんがベッドから飛び起き、気の抜けたような笑顔を浮かべながらも涙をこぼした。

「光希君、助けに……」

俺はミカちゃんをにらんで「だめ」と口を動かして制した。

「いま、天使長様はなんと仰いました？」

待機していた看守がミカちゃんに問う。

「い、いいえ、なんでも……」

完全に挙動不審のミカちゃんに助け船を出す。

「俺は彼女の魂を恐怖から救うために、やってきたんです。彼女は天使長と言えども、まだ脆い（もろい）。だから、せめて恐怖に震える心を少しでも助けてあげられればと……」

「そうか、そうだよな。こんなちっこいお嬢ちゃんが……やりきれねえよな。俺にも娘がいてな……」

先導してきた看守が咳払いして、相方を制した。
ミカちゃんは独房の中で、例のごつい手錠によって拘束されていた。恐らく、ミカちゃんの強大なオーラを封じているのだろう。念には念を入れてというわけか。
二人の看守を、応援を呼ばれる前に倒せるだろうか？　俺の力だけで、拘置所の看守全員を相手にするのは、ちょっと不安が残る。せめて、先導の看守だけでも帰ってくれれば……。　俺はとっさに思い付いたアイデアを実行に移した。ミカちゃんに余計なことを口走らせないで時間稼ぎする方法を。

天界8

俺は慣れないウィンクをして、ミカちゃんに合図を送る。
「ああ、僕の可愛い恋人よ。もう時間があまりない。せめて、こうして君と語り合う時間が少しだけでも長ければ……。ああ、時間の守人(もりびと)よ、僕の持つすべてを差し出すから、僕等を見逃し、しばらくの間、僕等の元を立ち去っておくれ」
恋人？　と一瞬首を傾げたミカちゃんだったが、俺が何を企んでいるかわかったのか、こう答えた。
「わたしの大好きな人。こうして語り合う時間が少しでも長ければと、わたしも思うわ。時間がわたし達のもとから立ち去ってくれればいいのに。せめて残された僅かな時の中で語り合いましょう」
「おい、何やってる？」
先導の看守が問いかけてきた。
「いえ、俺達、デートにはいつも芝居を見にいってたもので。彼女、女優に憧れてたんです。ほら、こんなに美人で可愛いでしょ？　きっと素晴らしい女優になれただろうに。でも、立場があるから芝居なんてさせてもらえなかったんです。だからせめて……せめて最後くらい、彼女をヒロインにして見送って……あげたい……なと……」
「あんな下手くそなのが芝居ってか？　まあ泣くな、続けろ」
俺達は芝居に戻る。
「ああ、愛しい人よ。君は、なんてかわいそうなんだ。君の心は迫りくる死の恐怖に打ち震えていることだろう」
「わたしはもう覚悟を決めたのよ。お星様になってあなたの幸福を見守るの」
「なんてことだ。僕の幸福は君の存在そのものなのに」
「ああ、なんてかわいそうな人。わたしはあなたの傍にいてあげられないのに」
「僕は法に忠実な神の下僕(しもべ)、だから君を見守ってやることしかでき

ない。せめて冥府にいったら死神となって、僕を迎えにきておくれ。この肉体が滅びても、二人の愛は永遠だから」
「愛しいあなた、わたしにはあなたの身体を滅ぼすことなどできないわ。だって、あなたが愛しすぎるもの。空っぽの器だったわたしの身体に、愛をいっぱい注ぎ（そそぎ）こんでくれた、わたしのたった一つの宝物だもの」
「この愛を、膨らみ続けるこの愛を、君に注ぐことがかなわないなら、僕の胸は張り裂けて君を追いかけ冥府にいけるだろう。ああ、こんな簡単なことに気が付かぬとは、なんという愚か者。ともに旅立ち、二人の魂を永遠に契ろう（ちぎろう）ではないか」
「まあ、なんて意気地（いくじ）のないことを。わたしのたった一つの生きた証を、たった一つの思い出を、あなたは壊すつもりなの？　さあ、わたしに口付けてすべて吐き出すのよ。滅びる運命（さだめ）のこの身体、処刑人より早く滅ぼしてちょうだい。あなたを蝕む（むしばむ）その愛で。あなたの愛で張り裂けるなら、わたしは少しも怖くない。幸福すぎて死んでしまうということだもの。だから、愛しいあなた、わたしに最期の口付けを……」
　顔を寄せると、ミカちゃんが「今よ」と囁いた。
　俺は振り向きざま、拳にオーラを込め、あろうことか寸劇に涙して顔を覆う看守に、
「すまん」
　と、声をかけながら殴り倒した。先導の看守は寸劇中にあきれて帰っていた。
　持ってきたマスターキーを通すとあっさり鉄格子の扉が開いて、ミカちゃんが飛び出してきた。
「来てくれなかったら化けて出ようと思ってたのよ？」
　と、拗ねた（すねた）ような鼻声で、それでも嬉しそうに言った。
「ねえねえ、光希君の苦しみをあたしにちょうだい？」
　ミカちゃんが目を閉じ、キスを待っている。
「ああ、僕の苦しみは君との口付けそのものだというのに……」

「もう、意地悪。このシチュエーションでキスしないなんて、王子様失格よ」
俺は倒れている看守を調べ、手錠の鍵を探した。
「しまった……。こいつじゃない」
「どうしたの？」
「手錠の鍵さ。それを付けてるとオーラを使えないんだろ？」
ミカちゃんは試しにオーラを溜めようとしたが、何も起こらなかった。
「ほんとだ。ねえ、どうしよう？」

天界9

「仕方ない、俺一人でもやってみるか。離れるなよ」
俺は倒れている看守のホイッスルを吹いた。……ちょっと濡れてて気持ち悪かった。
看守の群れが巣を壊された蜂のようにワラワラ集まってくる。
俺は即座に剣を取り出してミカちゃんを後ろから抱き、喉もとに剣を突きつけた。
「きさま！　なにをやっている？」
「ふはははは。天使長殿は我等の戦力としてもらっていく。いや、俺様のハーレムに加えるというのもいいな。どうせ殺すんだろ？こんな器量良しの娘を、ただ殺すなんて勿体ないじゃないか」
俺は自分のシャツを引きちぎった。
「そ、それは、魔界の徴！　きさま、日本人なら恥ってやつを知らんのか？」
受付の看守が真っ赤な顔で俺をにらんだ。
「サムライは謀反（むほん）ってやつを起こすもんなんだ。サムライだって人間ってことさ。よく覚えとけ。それより鍵だ！　手錠の鍵をよこせ！」
「させるか！　どうせ、天使長様は処刑を待つ身なのだ、脱獄されるくらいなら……」
俺はオーラを剣で増幅させ、受付の看守のすぐ脇を撃った。
「今宵の虎鉄（こてつ）は血に飢えているぜ？　さあ、早く鍵をよこせ」
「なめるな、小僧！　確保だ！」
号令とともに、大勢の看守達が飛びかかってくる。
俺が周囲にオーラを撒き散らすと、看守達は四方八方に弾き飛ばされた。
「そう死に急ぐなって。ほら、鍵をよこせ。さっさとしないと明日のお天道（おてんとう）さん拝めなくなるぜ？」

受付の看守がしぶしぶながら鍵を差し出した。俺はそれを引ったくると、ミカちゃんの手錠を外してやった。
「みんな、ごめんな。無事に逃げられればそれでいいんだ。天使長に挑むような真似はやめてくれよ？　命は大事だ」
呆気にとられる看守達をかき分けて、俺達は悠々と出口を抜けた。すると、そこに見慣れた顔があった。まだ傷も完全に癒えていない父様とガブリエル様だった。
驚いたことに二人は戦闘モードになり、俺達に襲いかかる。
「情にほだされ脱獄の手引きをするとは、見損ないましたよ、大沢光樹！」
父様がオーラをこめた拳で殴りかかってきた。パパほど怪力ではないが、スピードとオーラの迫力では父様のほうが上らしい。
将来の義理の父であり、手負いの父様に攻撃を仕掛けるわけにもいかず、防御に徹していると、ガブリエル様がミカちゃんを捕まえようとする。
「この期に及んで脱獄するなんて、そんな子に育てた覚えはないわよ！　わたしがこの場で成敗してあげるから覚悟なさい！」
とっさのことにミカちゃんと二人、防戦を強いられるが、なんだか様子が変だ。以前訓練した時と比べて、父様は明らかに手抜きとしか思えない攻撃をしてくる。ガブリエル様にしてもそうだ。まるで当たらない攻撃で派手な爆発ばかり起こしているように見える。
「ミカちゃん、強行突破だ！」
「おっけー」
俺達は全速力で天界の外れを目指した。
二人の追っ手は、
「待てー、脱獄者めー」
と、ふざけたような口調で叫びつつ追いかけてくる。
二人の行動の真意に気付いた俺達は、天界のギリギリ端っこまで来て、着地して待った。その間に黒いシャツを物質化して身に付ける。脱獄の手伝いまでして、いまさら天界のルールに遠慮する必要

はないだろう。
　すぐに追っ手の二人も到着した。
「よくやってくれたわ。ミカのやったことは確かに許されることじゃないけど、死刑はいきすぎよ」
「昨日から神の声について考えていたのですがね。ミカ、君はお爺ちゃんの声を聞いたと言いましたが、その声は本当にお爺ちゃんでしたか？」
「えと、わかんない。なんかね、最近お爺ちゃんのお顔を見にいくと、お爺ちゃんが喋ってるみたいな声が聞こえてきて、頭がポーっとなっちゃって、凄く気持ち良かったの。だから何度も何度もお爺ちゃんのお顔を見にいったんだけど、いつも気が付くと、自分のオフィスのソファで目が覚めるのよ」
「お爺ちゃんが亡くなった日はどうでした？」
「いつもと一緒だよ。目が覚めたらオフィスにいたから、もう一度お爺ちゃんのお部屋にいったの。そしたら、お爺ちゃんの胸にあたしの剣が刺さってたのよ。同じような夢を見てたから、きっと、あたしがやっちゃったんだなって思って、光希君のところにいったの」
「やはりそうでしたか。これは調査してみなくてはわかりませんが、ミカが手を下したにせよ、そうでないにせよ、何者かがミカを幻覚、幻聴の類で操った可能性が高いですね」
「なんですって？　じゃあ、ミカはちっとも悪くないじゃない。なんてことかしら。ミカ、怒ったりしてごめんね。……でもミカほどの子を操るなんて、いったい何者の仕業なのかしら？　気味が悪いわね」
　ガブリエル様がミカちゃんの頭を撫でると、ミカちゃんはガブリエル様に甘えるように抱き付いた。姉妹のような外見ながら、その光景は母と娘のようだった。
「ガブちゃん、ごめんね。傷痛む？　メッティもごめんなさい」
　父様もハグに加わって言った。
「いいんですよ、ミカ。君を信じてやらなかった馬鹿なわたし達を

許しておくれ」
　この親子みたいな三人の抱擁は、水入らずでさせておくのが一番だろう。
「さて、事件の真相も気になりますが、本物の追っ手が来る前にいくとします。本当にお世話になりました」
「サッちゃんに加えてミカまでお世話になって申し訳ありませんが、二人を頼みます」
「もちろんです。お二人とも、お元気で」
「いくあてはあるの？」
「とりあえず一旦魔界に戻って、地獄にでも潜伏して様子を見ようかと」
「それがいいわね。情報操作して、魔界で仕度していく時間ぐらいは稼いでおくわ。ミカ、光希君の言うことをちゃんと聞くのよ？」
「はーい」
「でもね、もしエッチなことされたら、その時はオーラ付きのビンタでもしてやりなさい」
「うん、そうする」
　俺は三人に背を向け、本物の指輪に付け替えた。指輪がきつくなった気がして無理矢理はめた。指輪のくすみが、もはや絶望的な黒に見え、何度も何度も指でこすり続けた。

天界１０

天界から空を駆け下りる。ミカちゃんは俺の周りにまとわりついては離れ、クスクス笑って上機嫌な様子だった。何度目かの接近で、俺はミカちゃんの左手を捕まえた。

「こら、遊びじゃないんだぞ？」

「そうかな～？　楽しい時には笑えばいいのよ。ほら、光希君も笑って？　難しい顔しても、笑っててもて、上手くいく時はいくし、駄目な時は駄目なものでしょ？　それなら笑ってなきゃ損じゃない」

それもそうだ。一番偉い天使さんが言うんだから、そのとおりなのかもしれない。

つないだ手を引き寄せ、真っ逆さまの自由落下の中、ダンスの真似事で踊った。天界からの追っ手が来るかもしれないし、魔界にすんなり入れるかどうかも不安だ。でも、だから、今を楽しんでおこう。そんな気分だった。

いよいよ海面が近付いてきて、例の大穴がただごとではない不気味さを醸し出している。俺はミカちゃんをお姫様抱っこのスタイルで抱きとめ、空中に静止した。

「ちゅーしてくれるの？」

ミカちゃんが目を閉じる。

「いや、ごめん。そうじゃなくってさ」

ミカちゃんはしぶしぶ俺の腕を離れ、空中に立つ。

「まだ、昨日の今日だからな。ヘリが飛びまわってるんだ」

「あ、ほんとだ……」

ミカちゃんが目を伏せる。自分のしでかしたことの重大さに気付いてしまったのだろう。

「反省しろよ？」

頭のてっぺんにコツンとゲンコツを載せたあと、ほっぺにキスをしてやった。ミカちゃんは可愛く舌を出して、頭をさすった。

「さてと、未確認飛行物体のスクープにでもされたら大変だ。どこか陸地に上がろう」
俺達は高々度まで逆戻りして、現物の世界地図を眺める。
「どこがいいかな？　俺、地理とか苦手なんだ」
「光希君にも苦手なことがあったのね。堂々としてるから、なんでも出来るのかと思った」
「おだてても、ちゅーはしないぞ？」
『堂々としてる』か。地上人だった頃は、『オドオドしてる』とか『挙動不審』なんて言われてた俺が。
「じゃあ、カリブ海の無人島は？　前にガブちゃんとお散歩に来たことがあるの」
「無人島なら都合がいい。夜中まで隠れよう。ところで、カリブ海ってどこだっけ？　聞いたことはあるんだけど……」
「もう……頼りない王子様！」
そう、それがお似合いなのかもしれない。
ミカちゃんに手を引かれ、アメリカ合衆国の南、中央アメリカでいいんだったっけ？　のあたりの環状に連なる島々を目指した。
「え～と、どの島だったっけ……あ～、もう！　わかんない！」
それでもミカちゃんは止まろうとしなかった。
「おいおい、大丈夫なのか？」
「当たって砕けろよ！」
細く、か弱い見た目の少女が、なんとも頼もしかった。
俺達は中央アメリカの、とある島に降り立った。ものは試しと逆五芒星を描き、魔界に入れないかどうか確かめてみたが、やはりだめだ。
紋章がフェードアウトで消えて、昼寝でもしようかと木陰を探していた時だった。
「オラ！」
「……お、おら」
日本の方言で言うところの『俺』ではなく、たぶんスペイン語か

何かの『ハロー』だ。
「可愛い子ちゃん連れて、こんな茂みで何やってんだ？　昼間っから仲良く『しけこもう』ってか？」
　こんがり日焼けした男がニヤニヤしながら言った崩れた英語を、何故か聞き取ることができた。きっと、魔族の徴のおかげなのだろう。
「しけこむって、な、な、なんすか！？」
「な～に、照れることはねえって。だが、この辺はまずいぜ？　ヤクの精製所なんかがあっから、コソコソ怪しいことやってると撃たれっちまうぞ」
「ヤク？　撃たれる？」
「なんだ、観光客か？　迷子にでもなったか？」
「い、いや。そういうわけでは……」
「そうだ！　いい場所知ってるからついてこい」
　男はさっさと歩き出してしまう。俺達は仕方なく追いかけることにした。
「さあ、着いたぞ。喉乾いたろ？　ちょっと待ってな」
　ボロボロの小屋に入ると、煙草のものとも違う、変な匂いが立ち込めていた。部屋の真ん中には、元々は白かったと思われる黄色いシーツがかかったベッドだけがあった。
「なんか、嫌な予感がするな」
「そ、そうだね……逃げ……」
　振り返ると、例のこんがり男が見たこともないデザインの缶入り飲料を持ってきた。
「ビールでいいだろ？　クサは？」
　クサ、草というのは、おそらく……。
「あの、お構いなく。やっぱ俺達……」
「まあまあ、遠慮するなって。まず一杯やれよ」
　男はブシュっと缶ビールを開けて、俺に手渡す。
「あの、お金とか持ってないし……」

男が怪訝な顔をする。
「なんだって？　金も持たずに、こんな田舎に観光にくる奴がいるか？　あんちゃん、ジョークのセンスねえな。人がせっかく案内してやったんだから、やることやったら、さっさと払って帰りな」
「だから、払うもなにも、お金なんて持ってないですよ」
「んだと？　このクソガキ！」
男はドアをバタン！　と閉めて出ていった。
「逃げたほうがいいな。これはきっと、外国人観光客をはめるボッタクリ宿か何かに違いない」
振り返るとミカちゃんが缶ビールを飲んでいた。
「うわ！　なにやってんだ！」
「……にが～い。でも、冷たいよ？　光希君ももらったら？　せっかく出してくれたものを飲まなきゃ失礼よ」
「人の話を……」
そこへ、こんがり男が、身長二メートル弱はあろうかという筋肉のかたまりを連れて戻ってきた。
「さあ、出すもの出せや」
「だから、お金は……」
「あるよ。ほら！　おじさん、ごちそうさまでした」
ミカちゃんは丁寧にお辞儀してビールのお礼を述べた。俺にウィンクして見せたのは「光希君の背中に隠れて物質化でお金を作ったけど見逃してね」という合図だったのだろう。しかし、差し出したお札には、えらく大人びた雰囲気のミカちゃんの肖像画が描かれていた。
「そのお金じゃ駄目なんだって！」
「あ、いっけない。てへ」
自分にゲンコツを張って見せるミカちゃん。可愛いけど、可愛いけど……。
こんがり男がミカちゃんから天界のお金を引ったくる。
「なんだ、こりゃ？　見たことのねえ札だな？　ん……、どっかで

見た顔……。って、こりゃおめえの顔だろうが！　子ども銀行の金じゃなくて、米ドル札を出しな！」
「失礼ね！　子ども銀行じゃなくって、天……」
俺は慌ててミカちゃんの口を塞いだ。
「確かに、案内もしてもらったことだし、ビールももらっちゃったからお礼はしたいんですが……」
ポケットを探ると、十字架入りの指輪があった。
「これで勘弁してもらえませんか？　これ、有名なミッキー大島のリングなんですけど……」
男達は顔を見合わせ、首を横に振った。まあ、無理もない。つい数時間前に考えた俺の偽名なのだから。
「そんな野郎は聞いたことがねえ。せめて宝石でも入ってりゃな」
「ああ、それなら……。ちょっとその前にトイレにいっても？」
「下手なこと考えるなよ？」
筋肉男がミカちゃんの手首をつかむ。
「ごめん、すぐ戻るから」
「は、早くしてね？」
薄っぺらいドアを開け、見た目、臭いともに悲惨な状況のトイレに入って、大粒ダイヤが入った指輪を物質化した。
「さあ、彼女を放してください」
ドアを開きながら、そう言ったのだが……筋肉男が床にのび、こんがり男がぼう然と立ちつくしていた。
「ミカちゃん！」
ミカちゃんは気まずそうな顔で、
「ごめんね。でも、……この人がお尻触るんだもん！」
ハッと目を上げると、こんがり男が銃を構えてミカちゃんを狙っていた。
「待て、それは駄目だ」
俺はミカちゃんを抱いて振り返り、身代わりになる。
「なんだ、その女。どうやってホセを……手が……手が光った……」

化け物でも見るような顔で俺達を見ている。
「まあ、落ち着いて銃をしまえって。それを撃ったらさすがに冗談ではすまない」
だが、忠告を無視して拳銃が乱射された。男は「ジーザス！」とか叫んで半狂乱になっていた。その『ジーザス』の仲間に銃を向けているとも知らずに。
地上人の銃で殺されるはずもなかったが、さすがに頭にきた。俺はオーラでバリアを張ってミカちゃんを守りつつ、すぐそばをかすめる銃弾を素手で捕まえた。
「いいか？　おまえは悪い夢を見たんだ。ホセのような大男を一瞬でノックアウトする女の子がいるか？　それに、銃弾を素手で受け止める奴は？」
男はぶんぶんと首を振る。
「そうだ。おまえは薬のやりすぎで悪い夢でも見たんだろう。さあ、目を覚ませ！」
俺の拳が男のみぞおちに食い込む。ホセと二人仲良くベッドに寝かしつけて、小屋を出ようとした時、ミカちゃんが言った。
「お金払ってないよ？」
身体じゅうの力が抜けそうになったが、払わないとミカちゃんの気がすまないのだろう。だが、さすがに宝石を渡すのはまずい。あくまでも、こいつらは恐ろしい夢を見ただけなのだから。
「悪事の資金源になるのも嫌だが……仕方ない」
俺は十ドルほど物質化して、こんがり男のポケットにねじこんだ。
「これで十分だろ」
ビールに酔って眠くなってしまったミカちゃんをおぶって歩き回り、森を見付けて身を隠す。ミカちゃんの世間知らずっぷりを思い出し笑いしつつ、俺は少しの間目を閉じた。

天界１１

気が付くと日は沈み、夜になっていた。晴天の空には大きな満月が浮かんでいて、オーラで照らさなくとも視界に困ることはなかった。

「光希君、もう夜中になったみたいだよ？　街も真っ暗だった」

俺が寝ている間に偵察してきてくれたらしい。無謀を叱りたい気もしたが、俺だって寝てしまったのだ。

「じゃあ、そろそろいってみるか」

「ねえ、何か気付かない？」

女の子がこう言う時は……。

「あ、服替えた？　うん、似合うよ」

さっきまで着ていたのと大して違わない気がしたが、他には髪も靴も変わっていないし、アクセサリーもしていない。つまり、服を替えたに違いないのである。

「正解！　物質化してみたの。おかしなところ、無い？」

ミカちゃんはゆっくりと一回転して、俺に白いワンピースをチェックさせる。

「大丈夫。でも、その薄い服で大丈夫かな？　例の大穴に入って濡れたら透けちゃうかも。まあ、それはそれで……」

薄手のワンピースは、地底探検用としてはちょっと頼りなく思えた。

「あ、それってセクハラ発言！」

ミカちゃんが手にオーラをためてニヤニヤしている。とはいえ、本気でビンタする気はないようだ。

「よし、じゃあいくか」

俺が飛び立つと、ミカちゃんが「まてーエロ魔族ー」と叫びながら追い付いてきた。

大西洋をしばらく東に飛んだ俺達は、海水が流れこむ巨大な滝に飛びこんだ。予想どおり、テレビクルーや軍のヘリは見当たらなかった。途中の海上に幾らかの船はいたが、真っ暗闇を音も無く高速で飛ぶ二つの人影など、まず見付けようがなかっただろう。

――真っ暗な垂直の洞穴に、海水が流れこむ轟音（ごうおん）だけが響いている。

暗闇を落下する恐怖からか俺の腕にしがみ付いてきたミカちゃんのために、オーラで周りを照らす。俺達は自由落下に更なる速度を加えた。深度が深まるにつれ、気温がどんどん高くなってゆく。大量の海水も沸騰しているのか、水蒸気で視界が埋め尽くされる。この穴まではサタンの力も及んでいないらしい。

俺達の身体に限って自然現象で回復不能な負傷をすることなどありえないのだが、好き好んで熱湯の滝に触れたいとも思わなかった。そこで、オーラを楕円形のバリアにして二人の周りに張り巡らせ、更に下を目指した。

古代兵器で増幅したミカちゃんのオーラ砲といえども、ここまで来るとだいぶ減衰（げんすい）していたようで、洞穴が徐々に狭くなってゆく。

最深部に到着すると、そこに暴力的な滝はなく、せいぜい打たせ湯のような無数の熱湯の筋が、直径数メートルの池に流れこんでいるだけだった。池の水面にサタンのものらしきオーラの気配を感じる。のぞきこむと、池の直径そのままの、黒い金属の壁が見えた。サタンが建設を命じた『海水供給路』とは、この池からつながったパイプのことなのだろう。

「この先はもう魔界らしい。このオーラって水の中でもいけるかな？」

「平気だよ。前にガブちゃんと二人で海底を歩いたことがあるけど、なんともなかったもん。お魚さんがとっても綺麗だったよ～」

「へぇ～。そんな使い道は思いつかなかったよ。でも、それならいけそうだな。そうそう、君に徴をあげなくては」

「魔族の？　そういえば光希君、まだ魔族だったのね」

「ああ、気持ち悪いかもしれないが、我慢してくれ」
「もう平気よ。あたし、なんであんなに魔族を毛嫌いしてたのかな？」
「父様が言ってた幻覚と何か関係があるのかもな」
「そうよね。今思うと、お爺ちゃんがあんな意地悪なこと言うわけないもん。ねね、徴って痛い？」
「今の君なら大丈夫。受け入れる気持ちがあれば痛くないよ」
「よかった。じゃあ、ここにお願い」
ミカちゃんは、悪びれもせずにスカートを捲り（めくり）上げ、左内ももの付け根辺りを指差す。
「そ、そんなところに？」
「ここのほうがセクシーで格好いいでしょ？」
「好みにもよると思うけど、君がそう言うなら」
俺は小さな純白の布きれからできるだけ意識を切り離しながらも、指先にオーラを込め、瑞々しい（みずみずしい）太ももに放った。
「これでミカちゃんも魔族の仲間入りだ」
「ありがとう、光希君。じゃあいこっか」
俺はミカちゃんに手を握られたまま、もう一度バリアに気合いを込め直す。
「せーの」とかけ声をかけて、パイプの中に飛びこんだ。
――パイプに詰まらないように、俺達は抱き合ってオーラの潜水艦に揺られていた。母親の胎内ってこんなだったのかな？　なんて気持ちがいいんだろう。それに、ミカちゃんが華奢なくせして柔らかい……。ミカちゃんの、甘酸っぱい柑橘（かんきつ）を思わせる心地よい香りにクラクラしながら、揺れの心地よさにウトウトしながらしばらくの時が過ぎ、俺達はパイプから吐き出された。
「やあ、誰かと思えば光希君じゃないか。よく魔界に戻ってきたね」
闇の中、パイプの出口近くの空中に、緑のオーラを懐中電灯代わりにしてサタンが立っていた。
「サ、サタン様……」

嬉しそうに俺の肩を叩くサタンだったが、ミカちゃんに気付いて驚きの表情を見せる。
「これはこれは、天使長ミカエル殿ではありませんか。ということは、光希君が堕としてきてくれたんだね？　大手柄だぞ、光希君」
「そ、そんなことは……」
「どうした？　浮かない顔をして。僕に目を合わせられないようだけど、何かやましいところでもあるのかい？」
「いえ、決してそのような……」
サタンが俺の耳元に顔を寄せ、ヒソヒソ話をする。
「ひょっとして、例の砲撃は天使長殿の仕業なのか？　あれは天界の最終兵器の一つだからな。神が眠っている今、あれを使えるのは天使長殿か、一部の大天使ということになるよな？　さては、天使長殿と逃避行してきたな？」
「いえ、その……」
「心配するな。天使長殿の責任は追及しない。歓迎の意味を込めて特赦（とくしゃ）としてあげよう。こうして、海も生まれつつあるしな」
「ありがとうございます！」
サタンがミカちゃんの手を取って口付けする。
「魔界へようこそ。天使長殿」
「よ、よろしくお願いします、サタン様。こうしてお目にかかれて光栄です」
「あはは、堅苦しい挨拶は抜きにして、魔界の自由を満喫されるといい」
「サタン様のお許しを得られれば、もう安心だ。よかったな、ミカちゃん」
……サタンは信用ならない。後でミカちゃんには説明しよう。
「だが、僕が許しても、一部の過激な民衆には通用しないかもしれないよ。魔界人は自由が売りだからね。地獄にでも隠れて様子を見るというのはどうだい？　可愛い婚約者を差し置いて天使長殿とキスの一つでもすれば、この場で送ってやってもいいよ。随分と仲良

しみたいだから」
　サタンは大声で笑った。
「まあ、冗談はいいとして、婚約者ちゃんに会ってしばらく羽を伸ばしていけよ。天使長殿を連れ帰ったほうびとして、マスコミはしばらく黙らせておいてやるから。テレビで天使長殿の名前が出るまでは安心しててていいよ。それから、地獄行きのあてがなかったら城に来いよ。それともあてがあるのかい？」
「ありがとうございます。あてが見つからなかったら、お手数をおかけするかもしれません」
「遠慮なく言ってくれ。じゃあ、海の溜まり具合もチェックしたし、先に失礼するよ」
　俺達は、頭を下げて見送った。
　つながれた手の中に、二人の冷や汗が混じり合っていた。こちらの計画も、ミカちゃんとの仲もお見通しというわけか。それにしても、ミカちゃんの特赦やマスコミの件は、きちんと実行してくれるんだろう。
　天界の姫君とも言えるミカちゃんは、魔界人に顔を知られている可能性もあると考え、だて眼鏡など物質化してミカちゃんに着けさせた。ガブリエル様とサタンの情報操作が失敗するはずもなく、まだ過激派に襲われることなどないだろうが、これで有名人見たさに人が集まることも少しは防げるはずだ。
　俺達は、とりあえず懐かしの我が家に向かうことにした。

第四章　地獄

とうとう帰ってきた。
魔界の懐かしい闇の中、薄暗い明かりに照らされる住み慣れた我が家も、今はギロチンが待ちかまえる処刑場に見えた。
リビングの扉を開けると、そこには婚約者の留守をいいことに憧れのサタン様を家に引きこみ、逢瀬（おうせ）を重ねるふしだらなサッちゃんの姿が……あるはずもなく、急な婚約者の帰宅に大きな目を見開いて硬直したあと、俺に飛び付き、キスの嵐を浴びせてくるサッちゃんがいた。
俺の頬を涙が伝った。サッちゃんも泣いている。しかし、俺の涙の意味は一つじゃなかった。
会えなかった数ヶ月分を一気に取り戻そうとするかのような熱烈な口付けに、いつ舌を噛み切られるかと怯えながらひたすら耐えていると、背後からにわか眼鏡っ子の咳払いが聞こえた。
「あのー。お気持ちはわかりますが、そういう羨ましいことはあたしが見てないところでやってもらえますか～？」
なおも吸い付いてくるサッちゃんを引っ剥がしてミカちゃんを紹介する。どうやら、小さなミカちゃんが俺の背中に隠れて見えていなかったらしい。ミカちゃんを発見すると、
「なんて可愛らしい子なの？」
と、奇声を発してミカちゃんに抱き付いた。
ミカちゃんの素性や事件の流れをダイジェスト版で聞かせている間も、サッちゃんはミカちゃんの頭を撫でたり、手を握ったりして、
「かわいそうに、大変だったわね」
と、労をねぎらってみせた。
話しもそこそこに、サッちゃんはミカちゃんを寝室に連れていってしまった。

ソファに座っていた俺の背後で扉が急に開いて、俺は跳び上がった。
「どうしたの？　光希」
「い、いや、あの子は？」
「お風呂に入れて寝かしつけたわ。疲れていたんでしょうね。わたしにあれこれ光希のことを聞きながら、いつのまにか眠ってた」
「あの子とのこと疑ったりしないの？」
「いやだわ、あんな純粋な子に悪戯したの？」
「するわけないじゃないか。俺には君だけだよ」
「あ、そうそう」
サッちゃんが俺の左内ももをギューっとつねった。
「な、なんだよ？　急に」
「どうしてあんなエッチなところに徴を付けたの？」
「あれは、あの子がそうしてくれって言ったから……すまん」
「ミカちゃんって天使というより、男心をくすぐるニンフみたいだものね。きっと自然にそういう悪戯をしてしまう子なんだわ。気を付けてね」
「わかってるって。俺には君しかいないんだ」
「信用しておくわ、ダーリン。わたしが光希だったら、ミカちゃんと内緒のキスぐらいしていたかもしれないけど」
「そ、そんなにあの子を気に入った？」
「ええ、あんな可愛い子、見たことがないわ。ガラスケースに入れて飾っておきたいくらい」
「俺なら君を部屋に飾っておきたいよ。君はセクシーなのに清楚で可愛いし、なんと言っても君のほうが美人だからな。うん、大人の魅力ってやつだよ……あは、あはは」
「ねえ、わたしに会いたかった？」
「もちろんだよ。一瞬たりとも君を忘れたことなんか……」
「嬉しいわ……わたしだって、ずーっと光希に会いたかったんだから」

先ほどミカちゃんに中断された口付けの拷問を再度受ける。
「ねえ、どうしたの？」
「なにが？」
「あなた、キスが下手になったわ。いつもなら放してくれないぐらいなのに」
「ああ、色々とあったからな。ちょっと疲れてるんだ」
「そう。長い旅だったものね。それで、これからどうするつもりなの？」
「さっき話したとおり、あの子を魔界に長居させるのはちょっと危険だと思うんだ。それで地獄にでも潜伏させようかと思うんだけど、どうかな？」
「そうね、地獄は退屈なところだけど、命には代えられないものね。地獄に友達がいるから連絡してみるわ。本当はサタン様に送っていただきたいけど、そんな勿体ないことしたら罰（ばち）が当たってしまうから」
「サタン様に会いたいなら遠慮することはないって。どういうわけか俺を気に入ってくれてるみたいだから。な、会いたいんだろ？」
サッちゃんは既に電話をプッシュし終わっていた。
久々の会話なのか、大いに盛り上がっているようではあるが、サッちゃんが一方的に話しているようでもある。
相手はいったいどんな人なんだろう？　いかつい鬼女（きじょ）とかじゃないといいな。などと考えているとサッちゃんは受話器を置いた。
「部屋は幾らでもあるから、いつでも来るといいって。わたし達も一緒にいってしばらく地獄暮らしでもしましょうか？　ミカちゃんも光希がいないと不安がるわ、きっと」
「そうだな。君の友達にあの子が慣れるまでは一緒にいてやったほうがいいかもな」
「じゃあ、ミカちゃんが起きたらデパート巡りに連れていって、一休みしたら出発しましょう」
「デパート巡り？」

「ええ。しばらくミカちゃんはお買い物にこられなくなるのよ？
わたしもミカちゃんに付き合って、しばらくお買い物にはこないわ。
だから、いっておかなきゃ悔いが残るじゃない。これってわたし達
にとっては大問題だわ」
「そうなんだ……あはは」
「あなたも荷物持ち兼護衛として来てくれるでしょう？」
「も、勿論。じゃあ、あの子が起きたら俺も起こしてよ。ちょっと
寝ておくから」
「わかったわ。おやすみなさい、ダーリン」
　おやすみのキスを受けた俺はシャワーを浴びたあと、うなされな
がら眠った。いかつい鬼女に八つ裂きにされる夢を見た。

地獄2

突然、激しく身体が上下に揺られ、地震か？　と慌てて眠い目をこじあけると、俺のベッドの上で飛び跳ねるちびっ子……ではなく、ミカちゃんがいた。お尻に手を当ててミニスカートをかばってはいるが、肝心の白い布は丸見えだった。これもニンフ的悪戯ってやつなのか？

「やっと起きた。お寝坊さん」

「おはよう、ミカちゃんはよく眠った？」

「うん、ぐっすり。サッちゃんが待ってるから早く降りてきてね」

「了解」

『サッちゃん』か。もう仲良くなったらしい。サッちゃんはあのことを知っても仲良しでいられるだろうか？　……そんなわけないな。あっさり戻っていったところを見ると、サッちゃんに気をつかってはいるらしいが。

リビングに下りていくと、サッちゃんがコーヒーを手渡しながら俺におはようのキスをした。

だいぶお待ちかねのサッちゃんと、既にだて眼鏡をかけてやる気満々のミカちゃんに気をつかって、一息に熱いコーヒーを飲み干した。口と喉の粘膜が一枚剥ける（むける）のがわかる。目を白黒させる俺の顔を指差して笑う二人に、

「いこっか」

と、声をかけて、パンデモニウム中心街を目指した。

何軒ものデパートや専門店をまわり、

「あれ可愛い」

「これ素敵」

と、キャーキャーいってはしゃぐ美人姉妹のような二人に付き添っているのも悪くなかった。やましいところがなければ、目を細め

ていつまでも眺めていられただろう。しばらくして限界を感じた俺は「本屋にいるから」とサッちゃんに告げて立ち読みに向かった。地獄は退屈だというから何冊か仕入れていってもいいだろう。

――しばらくすると両手いっぱいに戦利品を抱えて歩いてくる二人が目に入り、俺は目星を付けて持ち歩いていた本の数冊をレジで清算した。

「いっぱい買ってもらっちゃった」

「お、よかったな」

「父様が電話でね、家に残っている魔界のお金はあげるから、好きに使ってかまわないって言ってくれたのよ。わたし達もしばらく戻ってこないだろうから、ミカちゃんにプレゼントをあげてもよかったわよね？」

「もちろん。で、サッちゃんも満足した？」

「ええ。これでしばらくは大丈夫よ」

二人は顔を見合わせて「ねー」と笑い合う。

「なんだか急に娘ができた気分だわ」

「あたし、子どもじゃないよ～」

ミカちゃんが頬を膨らませて抗議した。

「そうだったわね。ごめんなさい」

サッちゃんは顔を赤らめて俺に訊ねた。

「……ねえ光希、わたしミカちゃんみたいな可愛い女の子が欲しいわ。光希はやっぱり男の子がいい？」

「えっと、そうだな、そこまではまだ考えてなかったよ。さてと……」

俺は地上流家庭サービスの真髄（しんずい）である『最上階レストラン街での昼食』を提案し、二人の手から荷物の分担を受け取ってエレベーターに乗りこんだ。まあ、昼食といっても、昼という概念がない魔界では窓の外も暗く、ただの食事なのだが、そこは気分の問題だ。

レストラン前の見本をみんなで眺めて注文を決定しておくという『地上流の作法』を踏襲（とうしゅう）しつつ、見慣れたメニューの中にグロテス

クな『純魔界料理』を見つけてげんなり顔を見合わせていると、入店待ちの列は着々と消化され、俺達の番がきた。
「注文決まってる？」
「決まったわ」
「おっけー」
席に着いて、ウェイトレスにそれぞれの注文を述べる。
物質化が得意なコックさんでもいるのか、あっという間に注文の品が運ばれてきた。
俺が頼んだピザは一見地上のものと変わりがないが、謎の赤黒い物体が紛れこんでいた。これはサッちゃんに訊ねたりしないほうが賢明だろうか？
ヨーロピアンなお姫様的ファッションを好むわりには和風にも通じているサッちゃんの前に天ぷら定食が、ミカちゃんの前には黒猫の顔のプレートに載ったお子様ランチが運ばれてきた。
――食事が進んでいくと、ミカちゃんが俺のシャツの袖をクイクイっと引っ張って青い顔をしていた。指差すほうを見てみると、猫のプレートの目のところに剣の形をした楊枝が刺さった……が、あって、ミカちゃんはプルプルと震えている。
「いやな予感がしたから見ないようにしてたんだけど、やっぱりこれって……」
「……たぶん。無理に食べなくていいよ」
「……サッちゃんはこういうの好き？　これ……いる？」
人にものを勧めるのに、引きつった顔でプルプル震えて指差すのもどうかと思うが、無理もない。
「やだ、まだこんなものをお子様ランチに載せる店があったなんて、あきれたわ。これで隠しておきなさい」
そう言ってサッちゃんは紙ナプキンを一枚抜き出し、問題のプレートにかぶせた。
残りのお子様ランチを続行する気がなくなったミカちゃんに、例の赤黒いトッピングを除けたピザや天ぷらをわけてやったりしたあ

と、サッちゃんに選んでもらった無難なデザートにしばしの安らぎを感じて昼食は終わった。
一階でサッちゃんが買い忘れた化粧品を買い、両手に荷物いっぱいの俺達はタクシーを拾って家に帰った。
一息ついたあと、女性陣は今日買ってきたものも含めて荷造りを開始した。
荷造りを終えてリビングに顔を出したミカちゃんは、白いロリータを着てテディベアを抱えていた。
「サッちゃんからお下がりもらっちゃった～。似合う？」
「可愛いよ。やっぱりミカちゃんには白が似合うな」
サッちゃんも白い服なんて持っていたとは意外な発見だった。頼めば白も着てくれるのだろうか？
俺の荷造りはといえば、さっき買ってきた本だけをサッちゃんのトランクの一つに間借りさせてもらって完了。必要な物があったら物質化すればいいや。

地獄3

さて、どうやって地獄にいくのかなと思っていると、サッちゃんが、

「ちょっと待ってて」

と、電話に向かう。

「今から来てもらえるかしら？　ええ、もう準備はできているわ」

などと話して受話器を置いた。電話の相手について詮索してみようかと思っていると、玄関のチャイムが鳴った。

「いくわよ」

サッちゃんに促され、女性陣のトランクを幾つも手伝って玄関に向かう。

玄関先では、まったくと言っていいほど生気の感じられない青白い顔の女の子が、サッちゃんの熱烈なハグを受けていた。彼女もまた真っ黒なロリータを着ているが、サッちゃんとは少し傾向や着こなしが違うようだ。なんだか病的というか、恐ろしげというか……退廃？　なるほど、こういう雰囲気を持っているのが『ゴスロリ（ゴシックアンドロリータ）』なのだろう。

頭にかぶったボンネットから淡い水色の髪をのぞかせるその子は、にらまれただけで凍りついてしまいそうな冷たい感じの美人だが、サッちゃんの肩越しに黙礼（もくれい）してきたところを見れば悪い人ではなさそうだった。見た目の年齢はサッちゃんや俺と同じくらい、つまり十六、七歳といったところか。なんだか一気にロリータ祭りだな。

「この子はタナトスちゃん。冥府からの指示で命を刈り取ってきたりする係の地獄人なの。主に地上人の寿命調節をする実行部隊というところかしら。任務の関係でタナトスちゃんのように魔界の徴を持った地獄人は、魔界と地獄をいったり来たりできるのよ」

「こんにちは。よろしく」

ザ・無口といった印象の黒い口紅を塗られた薄い唇が、必要最低

限の言葉を発した。続いてサッちゃんが俺達を紹介する。
「こっちの可愛い子はミカちゃん。天使長ミカエルといえば、あなたも知っているでしょう？　それと、そこで荷物持ちしているのが、わたしのダーリンよ。もう何度も話したから名前は知っているわよね？」
「大沢光希。彼は初対面ではない。リスト入りして、何度か機会をうかがったことがある」
「なんだって？　その時は、俺を殺しにきたのか？」
「そう。サキュバスやパパ達がいたから手を出せなかった」
「今もその、リストに？」
「だいぶ前にリストから除くよう指示された。それ以前に魔界人を一方的に刈り取ることなどできない。だから、もう大丈夫」
「もう、どうしてそんな大事なことを教えてくれなかったのよ？」
「聞かれなかったから」
「そう。まあいいわ。じゃあ、そろそろお願い」
タナトスちゃんは、なんらかの紋章を描くこともなく右手に身長よりも長い大鎌を発生させた。そのまま室内でも遠慮することなく大きくバックスイングして、表情一つ変えずに空間を切り裂いた。
チラっと俺達を振り向いて、
「こっち」
と、つぶやいたタナトスちゃんに従い、俺達は空間の裂け目に入ってゆく。
裂け目を抜けると、城と呼んでもいいような石造りの洋館の前に出た。『多少の歴史がある』程度ならサッちゃんの好みにピッタリだろうが、『朽ち果てる寸前』で地下に拷問部屋を想像してしまうぐらいだから、いくらサッちゃんでも……いや、好きかも。
地獄の空は相変わらず赤い陽炎に覆われていて薄暗かったが、電灯なしでも視界があるのは、やはり便利なものだ。
いくら地獄に住む死神少女の屋敷とは言っても、中に入ってみれば……。やはり、外観のイメージを裏切らない廃墟（はいきょ）のような空間だ

った。
　黒一色の高級そうな調度品がそろっているものの、血塗られたいわくや呪いがかかっていてもおかしくない雰囲気があった。石の床では砂埃が吹きすさび、高い天井には今にも落ちてきそうな壊れたシャンデリアが下がっていた。石が剥きだしの壁には、巨人が姿見に使えそうなサイズの割れた鏡がある。遠慮なく鎌を振りまわして割ってしまったのかもしれない。
　ミカちゃんは恐れをなしてサッちゃんの手をつかみ、俺の顔を振り返っている。
「な、なんだかお化け屋敷みたいなところだね」
　と、引きつった顔でミカちゃんは言った。
「し、失礼だって。そんなこと言っちゃ」
　俺が注意すると、サッちゃんは手をヒラヒラさせて言う。
「タナトスちゃんはそんなこと気にしないわ。とっても大らかな人だから」
「気にしない。久しぶりのご馳走を連れ帰って、わたしは機嫌がいい」
　ミカちゃんは不安そうだった顔を、とうとう蒼白にして、サッちゃんの腕にしがみ付いた。
「冗談。わたしは人を食べない」
　そのままタナトスちゃんの案内でしばらく屋敷内を探検した。
「この部屋には入らないほうがいい。ミカは特に気を付けて」
「な、なにがあるの？」
　ミカちゃんが必死に訊ねたが、タナトスちゃんはクスクス笑うだけだった。
「また冗談よ。タナトスちゃんもミカちゃんを気に入ったんでしょう？　こんなに上機嫌なタナトスちゃんって久しぶりだわ」
　タナトスちゃんはこっくりうなずいて、ミカちゃんにウィンクする。壊れた人形の瞬き（まばたき）みたいなぎこちないウィンクが、さらにミカちゃんを震え上がらせた。

続いて、
「この部屋には暗闇の呪いがかかっている。サキュバスは入らないほうがいい」
と、タナトスちゃん。
「わ、わかってるわよ、もう！」
ミカちゃんが興味津々の顔で訊ねる。
「サッちゃんは暗闇が怖いの？」
「う、うるさいわね！　お化け出すわよ！」
「暗闇を怖がるお化けなんて、怖くないもん」
ミカちゃんがケラケラ笑いながら駆け出すと、サッちゃんが追いかける。
「待って」
と、タナトスちゃんが制するより早く、二人は突き当たりの部屋に入った。
「あの部屋には何があるの？」
「わたしの宝物。だから、最も恐ろしい罠を仕掛けてある」
「最も恐ろしい罠って……」
「入った者が一番恥ずかしいと感じる記憶の映像が現れる。多くの場合、恥ずかしすぎて記憶の奥底に封印した、忘れたつもりになっている羞恥（しゅうち）の対象」
「それはまた悪趣味な……でも、理にかなってるな」
「お上手ね。でも、あなたにはサキュバスがいるから、だめよ」
断じてほめてないし、口説いてもいない。この子はいったい、どういう思考回路をしてるんだろう？　と、いささか無遠慮な視線をタナトスちゃんに投げかけていたらしい。
「だめ。観察されるのは嫌いじゃないけど、サキュバスを裏切れない」
口角が毎秒数ミリずつ持ち上がるとでも言ったらいいのだろうか。微笑んでいるというよりは、何か重大なことを企んでいそうな表情。だが、なんとなくわかる。彼女は照れているのだ。……たぶん。

「……二人を助けに入ったほうがいいかな？」
「サキュバスを妻にしたいなら……」
「そ、そうだよな。ちょっといってくるよ」
と、扉のノブに手をかける。
「……やめておいたほうがいい」
「え？　それはつまり、サッちゃんを妻にしたいならやめておいたほうがいいってこと？」
「そう。本人が見れば深いトラウマに。同性に見られれば、殺し合うか、生涯の親友に。異性に見られれば……それが、大事な人なら……生きてはいられない。そういうパターンが多かったように思う」
「……ってことは、過去に犠牲者が？」
タナトスちゃんは、ふと目をそらした。
「ごめん。余計なこと聞いちゃったかな？」
タナトスちゃんはフフフフと笑うだけだった。正確に五回『フ』の音をカウントした感じの笑いが、まるで屋敷全体に木霊（こだま）したようだった。
やがて二人が引きつった赤い顔で出てきて、抱き合って座りこんだ。泣き出しそうなほどの涙目が、罠の恐ろしさを物語っている。
「い、いまのは、な、な、内緒よ？」
「う、うん。あ、あた、あたし達、おと、おと、お友達だもんね～。……あは……あはは……あはははは」
何を見たのか知りたいが、知ったら終わりな気がする。知らんぷりしてあげるのが二人のため、いや、俺のためにもなるだろう。
その部屋を最後に探検を打ち切り、部屋割りを決めることになった。快適で安全な部屋がきちんと人数分あるのだが、
「あたしはサッちゃんと一緒がいい！　ね、いいでしょ？　サッちゃん！」
「そうしましょう！　わたし達親友だもの！」
と、いうことで二人は相部屋になった。お互いを監視して他言を防ぐか、傷をなめ合うか、どちらにしろ、どうしても一緒にいたい

らしい。『仲良きことは美しきかな』である。

地獄4

『最も恐ろしい罠』のトラウマをなんとか乗り越えたのか、ミカちゃんは何もない地獄の暮らしに不満を述べだした。しかし、それを見かねたサッちゃんとタナトスちゃんに、着せ替え人形よろしくご自慢の衣装をとっかえひっかえ着せられておもちゃにされているうちに、天使のスマイルを取り戻した。そもそも、サッちゃんとタナトスちゃんは魔界のロリータ専門ショップで出会い、意気投合したところから友達になったのだとか。

天界で禁止されていた分、物質化にはまったミカちゃんは面白がって色々出していたが、珍妙なものばかり出して散らかしては、タナトスちゃんにあっさり消し去られていた。少し気の毒になって思いつく限りの娯楽品を物質化してやっていたが、俺自身、屋敷にこもる生活にうんざりし始めていた。

そんなある時のこと、三人娘による『お洋服談義』についていけないものを感じた俺は、自室のベッドに腰掛けて読書をしていた。扉が三回ノックされ、返事をする前にミカちゃんが飛び込んでくる。

「みーつき君。あ～そぼ」

いやな予感がした。

今も続く苦しみの元凶となる間違いを犯してしまった日に聞いた言葉だった。

「サッちゃん達と話してたんじゃないの？」

「あたしはロリータのことあんまり知らないもん」

「なるほど。ロリータ談義にあぶれたってわけか」

「ねえ……」

ミカちゃんの瞳が妖しい色を帯びている。

「俺は、もうこれ以上、サッちゃんを……」

「いいでしょ？　あと一回だけ……これで最後だから」

ミカちゃんが俺の首にまとわりつく。

「だめだ……よ」
ミカちゃんが俺の顔を押さえて、強引に口付けてくる。
――その時、大きな音を立てて扉が開け放たれた。
「ちょっと！　なんか目つきがいやらしいと思ったら、何やってるのよ！」
「サ、サッちゃん！　ち、ち、違うんだ、その、あの……」
「光希は黙ってて」
「へ？」
「ミカちゃん、こっちに来なさい」
「いやよ～、サッちゃん打つ（ぶつ）つもりでしょ？」
「言い付けを破ったんだから当然よ。あなたも天使長ほどの子なら潔く（いさぎよく）なさい」
ミカちゃんはあとずさりしていたが、いよいよあとがなくなった。
「光希、ちょっとあっち向いてて」
「え、どうして？」
「いいから」
後ろを向くと、納得がいった。
「いや～放してよ～」
ペチン、ペチンという音が、部屋の壁に響き渡った。
「痛いってば～。もうしないから～」
「前もそう言ったじゃない。嘘つく子は嫌いよ」
「嘘じゃないもん、光希君を脅かしてなんかいないってば～」
「じゃあ、強引に迫ったんでしょ。あなたみたいな子がああいう目で男の子を挑発してたら、いつか怖い目に遭うわよ？　そんなことになったら、わたしはガブリエル様や父様になんて謝ればいいの？」
「それは～、そうだけど～許して～光希君助けて～」
呼ばれて振り向くと、スカートを捲り（まくり）上げられた、あられもない姿のミカちゃんが目に飛びこんできた。
「光希！」
サッちゃんににらまれて、俺はまた壁に向き直った。

――百回数えていたのか、そのあたりで音が止んだ。
「光希、もういいわよ」
振り返ると、お尻を押さえたミカちゃんが涙目で立っているのが見えた。
「これは、いったい……」
「魔界の家で光希が寝ていた時にね、ミカちゃんが『寂しいからチューして』って目を潤ませて言ったのよ。あんまり可愛かったからキスしてあげたら、なんだか本格的になってしまって……。まさか光希にこんなことしてないわよね？　って聞いたら、顔を真っ赤にして黙りこんだの。それで問いただしたら全部白状したから折檻したのよ」
「じゃあ、あの時から知ってたのか……」
「ミカちゃんに言われる前から何かあるのは気付いていたわ。あなたに浮気は無理だってわかったでしょう？　魔が差したとはいえ、ミカちゃんにいけないことを教えたのはあなたよ。だから、罪の意識に苦しんでもらったの。少しは懲りた？」
「ああ……結婚前に不倫オヤジの心境をたっぷりと味わったよ」
「馬鹿ね。ガブリエル様にばれたって、引っかかれたぐらいで済んだでしょうに。彼女、一見クールに見えるけど、とても優しいお姉さんなのよ？」
サッちゃんが所有権を主張するような濃厚な口付けをくれた。久々の気兼ねないキスに、俺は膝から崩れ、不覚にも涙が出てきてしまった。
「もう……。泣くほど我慢していたなんて。本当にお馬鹿さんだわ」
もう二度と放さない。そんな気持ちで熱烈な「ただいま」のキスをサッちゃんに浴びせる。無我夢中でサッちゃんをベッドに押し倒し……。
「あ、あの～、もうお部屋に戻ってもいい？　その……『続き』はまだ見たくないかな～なんて……」
俺達は我に返って飛び起き、咳払いなどする。

「ご、ごめん。ミカちゃんには刺激が強かったかな……あはは」
サッちゃんが髪の乱れを撫でつけながら言った。
「ミカちゃん、寂しいのはわかるけど、今度やったら絶交よ？　あなたを置いて魔界に帰っちゃうからね？　だから、どんな方法でも光希とキスしたり、エッチなことをしてはだめよ？　わかった？」
「は～い。ごめんね。……ガブちゃんもメッティも、もう大人だからだめって、キスしてくれないの。だから、ちょっとキスしたかっただけなのよ。二人の仲を壊そうなんて思ってなかったの。本当にごめんなさい」
それ以来、ミカちゃんは相変わらず微妙な行動はとるものの、キスをせがまれることはなくなった。
代わりにサッちゃんやタナトスちゃんに迫ったり、テディベアにキスしたりしているところを見ると、本当に寂しかっただけなのだろう。だが、そんな問題行動も、ある時を境にピタリと止んだ。タナトスちゃんが、見ているだけで背筋も凍るような獰猛（どうもう）なキスをしたのを最後に。

地獄5

サッちゃんとの間に平和が戻り、しばらく経ったある時のこと。玄関の扉の下に封筒が滑りこまされていた。俺宛の手紙だった。ミカちゃんを脱獄させた日のことを思い出しながら封を切ってみると、精鋭隊慰労パーティの招待状だった。サタンのサインが文末にほどこされている。

天界に飛ばされたあと、父様と二人で精鋭隊の任務や閻魔大王、サタンについて話したことはあったが、結局すべては憶測にすぎず、スマートな解答を導き出すまでには至らなかった。

さて、この招待状はどうしたものだろう。時間は大安売りするほどたっぷりと余っているから、閻魔との一件や、サタンの不可解な点などを説明して議論してみてもいい。だが、サタンと聞いて目を輝かせる我が婚約者を目にするのはちょっと癪(しゃく)だ。

――いろいろ考えた末、召集がかかったとだけ伝えてパーティにいってみることにした。

タナトスちゃんに送ってもらって魔界入りした俺は我が家に立ち寄り、パパが帰っていないか確かめた。帰った痕跡は見当たらなかった。

――城には他界に飛ばされた者以外の精鋭隊がちらほらと集まりだしていた。兵士向けのパーティということで、残酷な何かがふるまわれるのではと心配していたが、いわゆる普通のご馳走と酒がじゃんじゃん出てくるだけの集まりだった。

サタンのお出ましを心待ちにする者もあったが、サタンは天界との停戦交渉会談が長引き、出席できなくなったと使いの者がアナウンスした。地獄にいて知らなかったが、つい最近、ミカちゃんの砲撃に怒った過激派の一群が天界にテロを仕掛け、それがきっかけで小競り合いになったのだとか。お互いのトップは開戦を望んでいな

かったので、サタンが出向いて大天使の誰かと話しをしているというわけだ。
――結局パーティにパパは現れなかった。
隊員から聞いた噂によると、パパは闇魔の言ったとおり、サッちゃんによく似た女の子ばかりを集めたハーレムで、享楽（きょうらく）の日々を過ごしているそうだ。
ハーレムの場所を聞いたので一目会ってから帰ってもよかったが、魔界の父として尊敬し始めていたパパが堕落している姿など見たくなかった。だから「無事らしい」とだけ、サッちゃんには知らせることにした。
見知った隊員の「街に出て飲み直そう」という誘いを断り、タナトスちゃんに電話をかけた。

地獄の屋敷に戻ると、俺の目の保養所……ではなくて、女性陣二人がいなかった。
「あれ？　二人は？」
「さっきサタンが来て連れていった」
「なんだって？」
「パーティに華が欲しいから、美しい君達を是非にと。わたしも誘われたが、サタンに義理はないので断わった」
「それで二人はほいほいついていったのか？」
「ミカは退屈していたし、サキュバスはサタンの誘いを断われない」
「なんてこった。あの尻軽娘！」
「そうではない。サキュバスはサタンを崇拝（すうはい）している。愛しているのは光希だけ」
「そうなのか。友達の君がそう判断するなら今のは取り消そう。だが、サタンは天界に停戦交渉にいっていると聞いたのに……影武者でもいるのか？」
「サタンは本人に間違いなかった。ただし、そもそものサタンがサタンであるかどうか、わたしにはわからない」

「それはいったい……？」
「ここに来たサタンは魔族に崇拝されているサタンに間違いなかった。でも、わたしには元々彼がサタンだとは思えない。別人がサタンを名乗っている可能性がある」
「やっぱり奴には何かあるってことか。そのことはサッちゃんに言ってないのか？」
「説明しようとしたが、噛み付かれた」
「やれやれ。でも、なぜ君はサタンが偽者だと？」
「魔界人は自力で地獄への出入りなどできない。地獄人が導かない限り。でも、サタンは自らの力で地獄を出入りする。サタンは地獄人の力を持っている」
「ってことは地獄人が魔界に入りこんで王をやってるのか？」
「断言はできない。でも、単純な魔族の王ではないと思う。魔界人はサタンを盲信（もうしん）しすぎている。だから疑いを持つことすらしない。二人を止められなくて、残念」
「いや、奴ほどの力なら、用があれば無理にでも連れていっただろう。それより二人の行方だ」
それから俺は魔界を、タナトスちゃんは地獄を捜しまわったが、二人の消息をつかめぬまま気持ちばかりが焦って時が流れた。
タナトスちゃんは、その無愛想に似合わず、美味い手料理など作って慰めようとしてくれたが、俺の気分が晴れることなどなかった。俺は俺自身の本拠地を魔界の我が家に戻すことにした。

父様からたまに電話がかかってくるのだが、心配をかけるだけかけても仕方ないと思い、二人のことは伏せておいた。大天使会は神殺害と魔界砲撃事件の真相が不明なものの、ミカちゃんが自分の意思で行った犯行ではないという結論に達したそうだ。いずれ神の後継者として天界に戻る必要があるので、伝えておいてほしいとのことだった。
受話器を置いて、誰も帰ってこないリビングで一人泣いた。

「ミカちゃん、どこいった？　もう天界に帰れるんだぞ……。サッちゃん、いつまでお預け食わせるんだよ……。帰ってきて、キスしてくれよ……」

――俺は誰の目をはばかることもなく、溢れる涙を拭いもせずに泣き暮らした。一度堰を切った涙を止める方法がわからなくなっていた。

そんなある時、玄関にまた一通の手紙が届いているのを発見した。見覚えのある封筒には、やはりサタンからの手紙が入っていた。

「君の可愛いお姫様達は僕が預かってるよ。なに、心配するな。まだ手は付けていないさ。閻魔の社まで来るんだ。早くしないと彼女達を誘惑しないとも限らないよ。特に君の婚約者は僕に夢中のようだからね。急げよ、光希君」

俺は手紙を破り捨てるとオーラを込めた足で踏みにじり、手紙を灰にした。

「サタン、おまえが何者であろうと俺は決して許さん！」

タナトスちゃんに連絡して地獄に着くと、俺は戦闘モード全開で飛び出す。しかし、翼を持たないタナトスちゃんが身体一つでスーっと追いついてきて、俺の手をつかむ。

「待って。わたしもいく」

「君を巻きこむわけには……」

「あの時止められなかったわたしには責任がある。それに二人は友達。光希も友達。一人ではいかせない」

「……わかった。君がいてくれると心強い。いこう！」

再び飛び出しかけた俺の手をタナトスちゃんが引っ張る。

「そっちじゃない。ついてきて」

結局、タナトスちゃんに先導してもらって、閻魔の社を目指すことになった。

地獄6

「この先は修羅道(しゅらどう)。好戦的な霊魂達が朽ち果てた身体を引きずり、閻魔大王の許しを得るまで傷付け合う恐ろしいところ」
「タナトスちゃんは、その修羅道を抜けたことは？」
「用がある時は大王が迎えにくる。一人で挑んだことはない」
「大王か……。社にはあのおっさんもいるのかな……」
「気を付けて。亡者どもが狙っている」
そう言われて前方に目をこらすと、地上では異常発生した虫のような亡者の群れが蠢いて（うごめいて）いた。亡者達は騎士や武士などの鎧や軍服に身を包み、虫に食い荒らされたような肉体、骨だけになった身体といった死体そのものの姿で、敵も味方も認識していないようなでたらめな合戦を繰り広げていた。それでいて、息もできないような腐臭が漂う辺りまで来ると、亡者達の目が、目のない眼孔が、こちらに殺意を向けているのがはっきりとわかる。それとともに、変わった形の山だと思っていたものが数体の岩石巨人だったと気付いた。
俺達が近付いていくと、亡者達は一斉に空に浮かんできて行く手を阻む（はばむ）。
「やるか」
「ここから先は一本道」
タナトスちゃんは鉄仮面のような無表情のまま、次々に亡者の首をはねてゆく。俺も負けじと亡者を斬り捨てる。大して強くもないが、数が尋常ではない。
大地を揺るがして巨人が俺達に迫る。その巨体に似合わぬスピードで俺達を叩き落そうと巨大な手のひらが宙を舞う。街に出てきた時とは違い、確実に俺達を殺そうとしている。
亡者達が四方八方から錆びた剣や槍、アーミーナイフを振り下ろし、それらをかわしたり受け流したりしながらの攻防は果てしなく

続いた。
「小僧、身体だ！　生きた身体をよこせ！」
「こっちは娘だ！　生身の美味そうな娘がいるぞ！　食ってやろうか、それとも百年ぶりの……。へっへっへ」
「骸骨野郎が何言ってやがる！　俺が先だ！　娘をよこせ！」
「きさま！　上官を差し置いて娘を一人占めする気か！」
「おっと、大尉殿、悔しかったら肉の身体でも持ってきやがれ！」
亡者が亡者を斬って捨てる。俺達の肉体を羨むように足首をつかんで、地面に引きずり下ろそうとする。
一体ずつ倒してもきりがないと悟った俺達は、武器で増幅したオーラを広範囲に放ち、団子状に群がる亡者を蹴散らした。しかし、まだ大量の亡者とともに、巨人が数体残っている。

――もう地上でいうなら数日はそうして戦っていたかもしれない。死んでも別の身体をすぐに得られるのか、どこからか湧いてくる亡者達に、俺達は進むことも退くこともできない状況で苦戦を強いられた。
魔族の身体は疲れない。それは地獄人のタナトスちゃんも同様のはずだ。だが、精神は確実に疲弊（ひへい）し始めた。肉体だ娘だと絶えず喧嘩する声も耳を素通りしていった。時折振り返って励まし合うが、タナトスちゃんですら眼光の鋭さに陰りが見えてきた。修行してきたとはいえ人間上がりの俺など、もっとひどい疲れ顔をしていただろう。
そこへ少し離れた場所から亡者の奇声が上がった。背後を取られないように背中合わせで戦っているタナトスちゃんとはまた別の方向からだった。目の前の亡者を倒してそちらを向くと、そこにはパパがいた。
「よう、やってるな！　光希！」
パパは大斧から光弾を放って、亡者を消滅させながら近付いてきた。

「パパ！　どうしてこんなところに？」
「それがよ、例のハーレムに人妻が混じってやがってな。サタン様に地獄送りにされちまったってわけよ。俺も焼きがまわったな。それで暇だからってぶらぶらしてたらおめえらが楽しそうなことやってたってところだ」
「まったく、パパほどの人にあんな弱点があったなんて」
「まあ、俺様も男ってことよ。ただな、サッちゃんに似た女を大勢はべらせたって虚しいばっかりだったぜ。これで良かったのかもな。勘弁しろよ」
「でも、どうして俺より先にサッちゃんに気持ちを伝えなかったんです？　俺と出会う前に」
「それは闇魔の野郎が言ったとおりさ。俺はサッちゃんに何か言って逃げられるのが怖かったんだ。笑いたきゃ笑え」
「きっとサッちゃんはパパの気持ちを聞いてたら俺になんて……」
「まあ俺様ほどのハンサムでつえー男が、サッちゃんの一人や二人落とせねえわけがなかったんだがな。今となっちゃあ、息子みてえな光希にあの子をまかせられて後悔はしてねえぜ」
　言うべき言葉が見つからなくて、俺は手を差し出した。しっかりと握手をして、パパとのわだかまりに終止符を打つ。
「ところでおまえら、修羅道の亡者は一気に消し去らないと、死にやしないぜ？　間抜けなことやってると死んじまうぞ」
「大王といれば攻撃されなかったから、気付かなかった。すまない、光希」
　タナトスちゃんが少しだけ頬を赤らめて謝った。
「気にするなって。どっちにしても俺一人だったらやられてたかもしれないんだし」
　――消滅狙いで攻撃することで、亡者の数は幾らかずつでも減るようになっていった。
「ところで、タナトスちゃんよ～。今度、可愛い友達紹介してくれよな」

「真面目に付き合うなら」
「わーってるって。俺も今度こそ懲りたからな。そういえば、タナトスちゃんも長いこと一人だろ？　寂しかったらおっちゃんが抱っこしてやるぜ？」
「考えておく」
「やっほーぃ。聞いたか？　光希。考えとくってよ。こりゃあ、いいところ見せなきゃな！」
　本性をあらわして元気いっぱいのエロ親父は口先だけでなく、巨大爆発で亡者どもをみるみる倒し、巨人の眉間に身体ごと突っこんで貫いた。
「よし、光希。これからは俺とタナトスちゃんの初デートの時間だ。事情はよく知らねえが、急いでんだろ？　さっさといきやがれ」
「でも、まだ亡者が」
「邪魔だ邪魔だ。俺様は残りの亡者どもを格好良くやっつけて、タナトスちゃんから勝利のキッスをもらうんだ！　どうだ？　美女とハンサム野郎でちょっとした映画みたいだと思わねえか？」
　美女と野獣なら文句なしで主役になれると思うんだが……。
「わかりましたよ。じゃああとを頼みます。タナトスちゃん、パパがいやだったら逃げていいからな」
「いやじゃない。彼はハンサム。それに頼もしい。とても可愛い人。浮気だけが心配」
　まあ、山羊っぽい顔の良し悪しはよくわからんが、タナトスちゃんがいいなら好きにすればいいさ。
「二人とも気を付けて」
「おまえのほうこそ……死ぬなよ、婿殿」
　パパが極太レーザーみたいなオーラで切り開いてくれた道をめいっぱいのスピードで飛び、俺はついに修羅道を抜けた。

地獄7

二人のおかげで数にものをいわせた亡者達との戦いから逃れ、目的地を目指して飛びながらも一息ついていると、前に一度来た巨大な社がおぼろげに見えてきた。

もうすぐだ、無事で待っていてくれ。祈るような気持ちで飛び続ける俺の目に、荒野にポツンと立つ、一人の人影が飛びこんできた。

――血飛沫色（ちしぶきいろ）のオーラに包まれた、俺が知る魔界人の中で一番見慣れた彼女の姿がそこにあった。

相変わらず装飾過剰な黒い衣装を身にまとう彼女だが、今の彼女こそはゴスロリと呼ぶにふさわしい、退廃（デカダン）を備えた地獄の姫君（ひめぎみ）だった。

彼女が手に持った二振りの剣につぶやくと、それらは紅蓮（ぐれん）の炎を身にまとう。再会のキスをくれるような状況ではなさそうだ。

「目を覚ませ、サッちゃん！　俺がわからないのか？」

「あなた、なぜわたしの名を知っているの？」

「俺と君は将来を誓い合った婚約者同士じゃないか！　奴を倒したら今度こそ俺達は……」

サッちゃんは一瞬何かを思い出したような表情を見せたが、すぐに頭を抱え、呻き声を上げる。

「頭が、頭が割れそう。あなたがわたしの婚約者？　わたしはあなたなど知らない。わたしがお慕い（おしたい）するのはあのおかただけよ」

「頼む、目を覚ましてくれ。俺はサッちゃんを傷付けることなんてしたくない」

サッちゃんの赤い瞳が鋭く俺をにらむ。

「……その気になればわたしをどうにでもできるような口ぶりね。このわたしを愚弄（ぐろう）するとは恐れ入ったわ。修羅道を抜けたぐらいでいい気になってわたしを慮る（おもんぱかる）なんて、笑わせてく

れるわね。覚悟なさい！」
　サッちゃんの右手に握られた長剣が空（くう）を袈裟斬り（けさぎり）にすると、俺に向かって腹を空かせた火龍のごとき炎が食らい付いてきた。
「やめろ！　俺は、君を……」
「お黙りなさい！　わたしに無礼な口をきいたこと、たっぷり後悔しながら死ぬがいいわ！」
　操り主の影響なのか以前より格段にレベルアップしているサッちゃんの攻撃が勢いを増してくると、さすがに俺も逃げきることがかなわず、戦闘体勢をとらざるを得なかった。俺は力を温存させるためにしまっておいた剣を、素早く描いた紋章から引きずり出した。
　剣でサッちゃんの火龍を受け止めると、その衝撃でお互いの身体が数百メートルも弾き飛ばされた。
　次の瞬間、遙か彼方に飛ばされて見失ったはずのサッちゃんが、俺の懐に入りこみ、左手の細身の剣で、腕が何十本にも見えるような猛烈な連続突きを浴びせてくる。俺は辛うじてかまえた剣で受け流し続けた。
「防戦一方では、あなた死んでしまうわよ？　まぁ、攻撃したところで結果は変わらないのだけど」
　サッちゃんはなまめかしく唇を濡らしながら不気味な笑い声を上げた。
「俺は戦いたくない」
「この期に及んでまだそんなことを。いいわ、あれだけの大口を叩くからには骨のある奴なのかと思ったけど、見込み違いだったようね。女々しい奴の相手をしている暇はないの。今楽にしてあげる」
　一瞬俺から距離をとったサッちゃんは右手を肩の上に、左手を腰だめにかまえると、土煙を巻き上げて再接近してくる。
　三倍速のデスメタルをＢＧＭにしたような残酷な剣舞（けんぶ）に見舞われる中、俺は考えた。
　サッちゃんを説得することは不可能のようだし、どうすればサッ

ちゃんを傷付けずにサタンのもとまで辿り着けるだろう……。
答えはシンプル。三十六計逃げるに如かず。サッちゃんを振り切ってどうにか目的地を目指すしかなさそうだ。素早いサッちゃんから逃げ切れる保証はないが。
サッちゃんの間合いを完全に無視して、俺は全速力で目的地を目指す。
意表をついて飛び立ったので、なんとか振り切ることができるかもしれない。
――と思った数秒後、俺の背後から亡霊のごとき囁きが聞こえた。
「ふふふ……逃がさない……」
保証はないと言ったものの、こんなにすぐに追い付かれるとはちょっと計算違いだった。やはり、サッちゃんの素早さにはかなわない。
もう躊躇って（ためらって）はいられない。俺は急停止すると振り向きざまに突きを繰り出した。
「……え？」
確かな手応えがあった。
命中したらどうなるかなんて考える余裕はなかった。猛烈な勢いで俺を追いかけてきた勢いも加わって、サッちゃんの身体は剣の鍔（つば）の辺りまでめり込んでいた。
心臓の鼓動に合わせて吹き出す返り血が、サッちゃんの温もりを容赦なく伝える。
鳩尾（みぞおち）を貫いた異物を見下ろして、サッちゃんは信じられないといった表情で立ち尽くしている。
サッちゃんの身体がワナワナと震えるのが、剣を握り締めたまま硬直した俺の手に伝わってくる。
二人の足元に生まれつつある、毒々しいほどに赤い水たまりが、悲惨な事実を物語る。
……もう、助からない。
愛しい人は両手の剣すら握っていられなくなって、二つの金属音

が荒れ果てた地獄の大地に木霊（こだま）した。

地獄8

「怖いわ……わたし、死ぬの？」
さっきまでの凶悪な表情からは想像もつかなかったような心細げな声で、サッちゃんは言った。
懇願するかのような視線を向けてくるサッちゃんに、俺は何も言ってやれなかった。
とどめの一撃を刺した張本人に、どんな思いやりの言葉をかけてやる資格があったのだろう。
固まった拳をどうにか開いた俺は、サッちゃんの傷口にオーラを当てた。
せめて、一秒でも長く。せめて、痛みだけでも。
「ねえ、何か言ってよ……。とても不安なの。死にたくない……」
サッちゃんは胸を貫く剣もそのままに、俺にもたれかかるように抱き付いてきた。
子猫のように震えるサッちゃんの肩を、そっと抱き締めてやった。
いつもの甘い香りがした。
サッちゃんの歯がギリギリと音を立てて噛み締められる。
何かと戦うように必死の形相で息を荒げている。
その視線はどこにもピントが合っていない。
苦しさのあまり錯乱（さくらん）しているのだろうか？
……せめて、楽にしてやるしか。
サッちゃんは震える身体を何とか立て直し、急に穏やかな表情を見せると、俺の目をのぞきこみながら言った。
「間に合ったわ……。あなたにお別れを言いたくて」
「だめだ。お別れなんて言わないでくれ」
俺はサッちゃんの治療を思い出し、熱いものが止めどなく流れ出す傷口にオーラを当てた。
「サタン様の力を振り切ったわ。今となってはもう、手遅れだけど」

「これも、やはり奴の仕業だったのか」
「光希、わたし何てことをしてしまったのかしら。怪我はない？　ところで、不意打ちなんてずるいじゃないの。あとで折檻してやるんだから」
「サッちゃん……」
「なによ、泣いてるの？　これからサタン様を倒しにいくのでしょう？　そんな弱虫では彼に勝てないわよ？」
「俺……俺、何てことを……」
「馬鹿ね。あなたがこうしていなかったら、わたしがあなたを刺していたかもしれないわ、だから後悔なんかしちゃだめよ」
「サッちゃん、死ぬ……っな。君……が死んだ……ら俺はどうやって生きていけばいいんだ！」
「もう、仕方のない子ね。そんなことでは心配で眠れないじゃないの。笑顔を見せて？　ダーリン」
「でき……るわけないっ……じゃない……っか……」
「ふふふ。泣き虫さんね」
サッちゃんが、俺の頬を伝う涙をそっと拭う。
俺は刺さったままの剣をサッちゃんの背中の後ろで折り、血だまりの中にサッちゃんを抱いて座った。
長い、長いキスをした。
サッちゃんは眉間の皺（しわ）を、ホッとしたように緩めた。
「あのドレスをもう一度着て、あなたの横に立ちたかったわ」
「そう……だよ。約……束した……じゃないか。俺の好きなドレ……スを着て、式が終わっ……たら……って」
「馬鹿……」
青白い顔で精一杯微笑むサッちゃんが痛々しかった。
血がしたたる気配が弱まり、サッちゃんの呼吸が一息ごとに細くなってゆく。
「好き……よ……光希……大……好き……わた……しの……ダー……リ……ン」

それがサッちゃんの最期の言葉だった。
サッちゃんの腕が意思を失って地面に落ち、俺は大声で泣いた。涙も枯れ果てろと泣き続けた。血だまりなんて嘘だったと思いたかったから。そんなもの本当は初めからなかったというほどに、俺の涙で洗い流してしまいたかったから。
血だまりが消えれば、サッちゃんが可愛い舌をちろっと出して、笑ってくれるような気がしたから。

地獄9

いつしか血だまりは乾いていた。
俺はサッちゃんに「痛いけど我慢してね」と謝って、忌々しい（いまいましい）剣の残骸を抜き去った。
剣を放り投げた俺は、またサッちゃんを抱いて座り込んだ。
……もうどうでもいいや。
君がいないこの世界に、俺の欲しいものなんて何も残っていないんだから。
もう、どうでもいい。
天使も悪魔も、地上に生きる人間も。夢も希望も愛だって、みんななくなっちゃえばいい。
なんだかもう身体が動く気がしないや。
ごめんよ、ミカちゃん。
君を助けてあげられそうにない。
みんなありがとう。
ほんとうに。
俺はサッちゃんを抱いたまま、ここにいます。
ずっと
ずっと
二人が砂になって消えてしまうまで。
さようなら。

――どうやら俺は、お寝坊さんのサッちゃんを抱いたまま、また眠っていたようだ。
サッちゃん、おはよう。
今度こそ君がおはようのキスをしてくれて、暖かいベッドで目覚められればよかったのに。俺は飽きもせずにまた現実に戻ってきてしまったんだね。

俺は、ホッとした表情で固まったままの寝顔に、おはようのキスをしてやろうと思った。だが、身体を動かそうとすると強烈な倦怠感が襲ってきて、言うことを聞かない。

なんだこれは？

そう言おうとしても声を出すのが面倒で泣き出しそうになる。身動き一つ取れない中で困惑していると、一つのおぞましい欲望が俺の中で芽生え、瞬く間に抗い難い（あらがいがたい）力となって暴走を開始した。

「サッちゃん、君は美味そうだな」

自分の言葉が信じられなかった。だけど、そう言ったほうが気持ちいいし、身体が言うことを聞くんだから仕方がないさ。

俺の欲望は急激にエスカレートする。

サッちゃんを食いたい。そうしたほうがいいに決まってるじゃないか。こんなに美味そうなサッちゃんを今まで食わなかったのが馬鹿みたいだ。

「サッちゃん、悪く思うなよ。俺の糧になって、ともに世界を再構築しよう。選ばれた民のみが住む理想の世界だ」

俺はサッちゃんが愛した黒いロリータ衣装をずたずたに引きちぎり、サッちゃんの身体を貪り（むさぼり）食った。普段の俺ならとっくに気が狂っていたはずの凄惨な光景も、なぜだか心地よくてどうにも抗えない。

「ひゃはははは。美味いぞサッちゃん！　どうしてもっと早く食わせてくれなかったんだ？　ダーリンを喜ばせたかったんだろ？　こんなメインディッシュを隠しておくなんて、君はなんて悪い子なんだ」

サッちゃんを跡形もなく食い尽くし、口を拭った俺の中で、次の欲望が湧き上がる。

「娘だ。生きた娘をよこせ！」

そうだ、ずっとサッちゃん以外にも抱きたい娘がいたじゃないか。

そう、それだ。もう我慢なんていらないさ。

俺は吸い寄せられるように、遠くに霞んで（かすんで）見える閻魔の社を目指し、飛び立った。

地獄１０

社に着くと、玉砂利の庭にサタンが立っていた。
「お目覚めになられたようで何よりです。ルシファ様」
「アーリマン、よく俺を目覚めさせた。苦労をかけたな」
これはいったいなんだ？　こいつはサタンだ。俺は何を言っている？　なぜサタンは俺をルシファと呼ぶ？　そう考えると頭が割れそうになって、俺は再び欲望に従うだけの傍観者になった。
「滅相も（めっそうも）ない。わたしのシナリオはご堪能いただけましたかな？」
「ふん、まわりくどいことを。おまえらしいな」
「例の娘を召し上がって力も回復なされたようで。味はいかがでしたかな？」
「ああ、美味かった。愛した娘というのは、なかなかの魔味だった。まだまだ食い足りないが、とりあえずは十分だ。それより、いつまでそんな格好をしている？」
「そうでしたな。そうそう、このサタンや闇魔大王もなかなかの美味でしたぞ」
サタンの身体が、深緑色のグロテスクなトカゲ人間に変身した。
「なぜ俺に残しておかなかった！」
「シナリオに必要でしたのでね、奴等の力と姿が。あなたを捜し出し、成長をお助けした苦労の前払いとしてお許し下さい」
「まあいい。ところでアーリマン、ミカはいるか？」
「はい。ここにお連れしております」
どうやら、このサタンだった奴はアーリマンというのが本当の名前らしい。さらには、俺がルシファということのようだ。
アーリマンは社の奥に入っていくと、しばらくしてミカちゃんを連れて戻ってきた。
ミカちゃんは、なんだか焦点の合っていないような目でこちらを

見ている。
「ミカエル様、兄上様が戻られましたぞ」
「光希君がルシファ兄様だったのね。ずっと、ずっと会いたかったわ。兄様」
「これで役者はそろいましたな。さて、早速ですが世界の再構築に出かけるとしませんか？　さあ、冥府へ参りましょう」
「まだだ。俺は娘を抱きたい。ミカを抱くからベッドの用意をしろ」
「ルシファ様、今なんと？」
「ミカを抱くと言ったんだ、早くしろ」
アーリマンが当惑顔（とうわくがお）で何やら考えこんでいる。
「なぜだ？　なぜルシファ様がそんなことを……」
「待ちきれない！　ミカ、こっちへおいで。兄様と仲良くしよう」
「はい、兄様」
ミカちゃんが白いブラウスのボタンを一つずつ外しながら、こちらに向かってくる。
「なりません！　あなた達兄妹ほどの大きすぎる力が交わって子でも宿せば、手の付けられない何かが生まれるやもしれません。おやめください」
アーリマンがミカちゃんの腕をつかんで引き止める。
「アーリマン、放して。あたしは兄様に抱かれたいの！」
「なりません！　それだけは我慢なさってください」
「ゴチャゴチャうるさいぞ、アーリマン。邪魔をするならおまえは用済みだ。運動前の飯にしてやろうか？」
「な、なぜなんだ？　なぜわたしの操作が効かない？」
「操作？　また何かくだらないことを企んでるな？　おまえ」
「い、いえ、なんでもありません」
「まあいい。おまえは指をくわえてミカが踊る姿でも見てろ」
「アーリマン。あなたはよく働いたから、そこにいてもいいわよ。ごほうびとして、あたしを見せてあ・げ・る」
アーリマンは額を押さえて、何やら考えこんでいる。

「さあ、おいで。ミカ」
「はい、兄様」
ミカちゃんを抱擁(ほうよう)し、キスをしようと顔を近付けた時だった。
背中に焼けた鉄でも押し当てられたような熱さが感じられた。
アーリマンだった。
大ぶりの曲刀をかまえたアーリマンが、オーラをたくわえて斬りかかってくる。
「血迷ったか？　アーリマン。よほど死にたいらしいな。いいものを見られるチャンスを逃しやがって、馬鹿な奴だ」
「なぜだ？　どこで計算を間違った？　なぜおまえは言うことを聞かない？」
「ごちゃごちゃうるさい！　死ね！」
アーリマンに向けて指先からオーラを放つと、今までの俺とは比べものにならないほどの大火力がアーリマンに命中する。特大の光弾をまともに受けたアーリマンは、社の塀を突き破ってどこか遠くへ吹き飛ばされていった。
俺はミカちゃんとのキスを再開しようと顔を近付ける。ミカちゃんの顔を両手ではさみ、口付けると、ミカちゃんが俺の顔を押し返して真っ赤な顔で言った。
「ちょっと光希君、どさくさに紛れてチューしないでよ！　サッちゃんに絶交されちゃう！」
「え？」
身体が言うことを聞くようになっていた。
嵐のような欲望が消え去り、試しにげんこつで自分の頭を殴ってみたりしたが、ちゃんと動く。
「ミカちゃん、俺達いったい……」
「これがアーリマンの力みたい。あたしがお爺ちゃんを死なせた時も、こんな風に身体が言うことを聞かなかったの。湧き上がってくる気持ち良さに逆らうと、だる～く、頭がいた～くなるのよ」
「なんてことだ。俺はサッちゃんの亡骸を……食っちまった」

「サッちゃん……死んじゃったの……？」
「サッちゃんも操られていて、戦ってる最中に……。その時俺は操られてなかったんだ……たぶん。でも、ああするしか……ちくしょう！」
「仕方がなかったのよ。みんなあいつに仕組まれていたんだから。サッちゃんだって、きっとわかってくれてるわ」
しばらく抱き合って静かに泣いたあと、ミカちゃんが言った。
「あたし達兄妹だったのよ？　たぶん、アーリマンが言ってたことは嘘じゃないわ。光希君、凄く強かったもん。光希君はルシファ兄様なんだよ？」
「そうなのかもな。でも、サッちゃんがいなくなった今、俺には力なんてもう必要ない。早くサッちゃんに会って謝りたいんだ」
「だめよ、光希君。そんな卑怯なこと考えてたらサッちゃん悲しむよ？　きっと振られちゃうんだから。そんな弱虫言ってたら」
「そうだ！　俺がルシファなら、冥府にいってサッちゃんを呼び戻せるんじゃないか？　魔界の家にサッちゃんを復活させればいいだけのことじゃないか。ベッドの中で生き返らせれば夢だったとか言ってごまかせるさ。ミカちゃん、冥府にいく方法って教わってないか？」
「だめ！　そんなことしたらアーリマンと変わらないじゃない。私利私欲のために死者を復活させるなんて、それこそサッちゃんに怒られるわ。もうお爺ちゃんも、閻魔大王も、サタンもいないのよ？　あたし達がしっかりしないと世界がめちゃくちゃになっちゃうわ。だから、頑張ろう？」
「ああ……」
「恐ろしいことだけど、結局サッちゃんは光希君に食べられて光希君の一部になったのよ？　恋人と一つの身体を分け合って生きるなんて素敵……でもないか。でも、サッちゃんならきっと許してくれるわ」
「そうだといいけど……」

「光希！　あなた、わたしを食べるなんて大それた真似をしてくれたんだから、良い世界を作るために活躍しないと折檻よ！」
うなだれていた俺は、慌てて顔を上げた。
「冗談きついよ、ミカちゃん」
「でも、サッちゃんなら、あんなふうに言ったと思うの。ねえ、頑張ろう？　お兄ちゃん」
「え？」
「お・に・い・ちゃ・ん」
ミカちゃんが俺の鼻をそっと突っついた。
「お兄ちゃんか……」
「そうよ。これからはミカって呼んでね？　元気を出して。あたしの頼もしいお兄ちゃん」

地獄１１

俺は、ミカの心配顔を申し訳なく思いながら帰り道を飛んだ。
帰りの修羅道は、パパ達のおかげで数えきれる程度の亡者しか残っていなかった。
「亡者のみんな、集合〜」
コソコソと様子をうかがう亡者達にミカが声をかけた。
亡者達が恐る恐る集まってくる。
「あんたら何者だ？　大王よりやばそうなオーラを感じるぜ？」
「あたしはミカエル。こっちはルシファ兄様よ」
亡者達から歓声が上がる。
「大王の気配が消えたようだが、死んだのか？　だとしたら、あんたらが俺達に許しを与えてくれるんだろ？　なあ、なんでもするよ。だから、頼むよ！」
「そのつもりで集まってもらったのよ。みんないっぱい反省した？　もう誰も傷付けちゃだめよ？」
亡者達は口々に反省した旨を叫んでいる。
だが、その中で、生き残っていた軍人の亡者と骸骨の上官が何か言い合っていた。
「そこ！　仲良くするの？　しないの？　居残りさせちゃうよ？」
二人は言い合いをやめてミカに頭を下げる。
「閻魔さんのやりかたがわからないから一旦冥府に送るけど、怖がらないで。きっと楽しい世界にして、あなた達が戻ってくるのを待ってるから。今度はいい子になってね。みんな」
亡者達はそれぞれの宗教の祈りのポーズで、ミカに感謝の意を表した。
「じゃあ、またね」
ミカが得意の巨大光弾で、整列した亡者達を消し去った。
みんな、ホッとしたような、いい顔をして旅立っていった。

タナトスちゃんの屋敷に着いたが、留守のようだった。
中に入ってみると、テーブルの上にメモが残されていた。
「パパと魔界の家にいる。いつでも電話して」
ミカが受話器を置くと即座にタナトスちゃんが現れて、俺達を魔界の家へと連れ帰ってくれた。
「よく帰った！　おまえ、見違えたな。そっちのちっこい嬢ちゃんもすげーオーラだが、なんだ、その底知れないオーラは。おっと、ところでよ、あのあと様子を見にいこうと思ったんだがな。タナトスちゃんがものすげえ勝利のキッスをしてくれたおかげで、引っ込みつかなくなっちまってよ。おまえと天使長さんがいれば大丈夫だろうと思って、さっさと帰ってきちまったぜ。どうせ俺達がいっても足手まといだったろうからな。勘弁しろよ」
「あなたがパパさんね？　あたしはミカエル。みんなはミカちゃんって呼んでくれるの。光希君はね、ルシファ兄様だったのよ？　パパさん」
「なんだと？　嬢ちゃんが天使長さんか？　光希がルシファ様だって？　どおりで底知れねえわけだ。こりゃ、これからは光希様って呼ばなきゃならんな」
「やめてくださいよ、パパ。俺はそんなんじゃ……」
「そうか。まあ、そうだよな。俺様が育ててやったからおまえは強くなったんだ。これからはタナトスちゃんと一緒に楽な暮らしをさせてもらわなきゃならん。なんせ、俺様は魔王ルシファのお師匠様だからな。ところで、サッちゃんはどうした？　一緒じゃないのか？」
俺はパパの前に土下座した。
「サッちゃんは……俺が……」
「急にどうした？　何かあったのか？」

「パパさん、怒らないでね。操られたサッちゃんを、光希君が死なせてしまったの。そのあと、操られた光希君は、サッちゃんを……食べちゃったんだって。でも、仕方なかったのよ。アーリマンっていう悪い奴が、あたし達みんなを操っていたんだから」
パパがオーラ全開で俺に殴りかかってきた。
「やい、光希！　てめえならサッちゃんを幸せにしてやれると思って見守ってやったのに！　食っただと？　死んで償え（つぐなえ）！　今すぐ追いかけてサッちゃんに謝れ！　俺と旦那の可愛いサッちゃんを返しやがれ、このくそガキ！」
以前の俺ならとっくに死んでいたであろう殴打も、ミカとタナトスちゃんがどうにか止めてくれた。
「光希を責めないで。あなたもわかってるはず。サキュバスは何があったとしても光希を許す」
「そうよ、パパさん。サッちゃんのダーリンを殴ったら、サッちゃん悲しむよ」
「いいんだ、二人とも。パパ、俺を……殺してください。やっぱり俺は……死んで……サッちゃんに謝りに……いきたい……」
再び土下座した俺の頭に、重いげんこつが一発落ちてきた。
「いつまで泣いてやがる！　もう二度と操られないように、精神の鍛錬もみっちりさせてやるから覚悟しとけ。……殴ったりして悪かったな。とりあえず風呂でも入ってさっさと寝ろ」
ミカとタナトスちゃんのオーラが当てられ、殴打の痛みが軽くなると、俺は風呂に入ってサッちゃんのベッドで眠った。約束のウェディングドレスを抱いて。
久しぶりにサッちゃんの夢を見た。
楽しい披露宴だった。
みんなとても楽しそうに笑っていた。
披露宴が終わって、もう一つの約束を果たしてくれた。
トランクスに不祥事を起こしてしまった。
サッちゃんが、胸の上に座っていたような気がした。

地獄12

――しばらくの時が経って、俺は我が城の花壇にいた。

サッちゃんの花を少しもらってきて植えてある。ようやく、この花を見ても涙をこらえられるようになった。サッちゃんの墓を作ってやろうかとも思ったが、亡骸は俺の中に眠っている。俺は生きた墓標だ。そう思えば、俺はずっと存在し続けなければならない気がした。

結局、タナトスちゃんに百人の証人を集められ、あっさり結婚させられた元遊び人は、時折、師範の立場で俺をしごきにやって来る。もう命を刈りたくないというタナトスちゃんを、俺は闇魔に代わって解任してやった。あの家は美女と野獣の愛の巣になっていた。

「お兄ちゃん」

ミカが白いドレスのスカートをなびかせ、駆けてきた。手にはヒールが高めの靴を引っかけている。もうすぐ神を引き継ぐ天使長として、友好国のお姫様的待遇を受け、窮屈しているようだ。

「もういくのか？　寂しくなるな」

「これからはいつでも会えるわ。徵がなくても入れるようになったし」

そう、徵がないと魔界に入れなかったのは、サタンを騙った（かたった）アーリマンが魔力でバリアを張っていたからだった。天界との敵対関係も奴が裏で糸を引いていたらしい。

「魔界をちょっとだけ秩序のある場所に、天界をもうちょっと気楽なところに。楽しい世界になるよう、お互い頑張っていこう。寂しくなったらいつでも顔を出せよ。俺も遊びにいく」

「そうするわ、お兄ちゃん。あ、そうそう、徵を消してもらわなきゃ。一応ね」

城の図書館にあった古い文献から得た方法で、ミカの内ももから徵を消した。

「ありがとう。あたしの身体はお兄ちゃんと、未来のダーリンにしか見せてあげないって決めたの。サッちゃんみたいな素敵なレディを目指すわ」
「それがいいな。でも、噛み付くようなところは真似するなよ？」
ミカが俺の手を緩く噛んだ。
「サッちゃんの代わりよ。あたしの先生なんだから、悪口言っちゃだめ」
俺は逆五芒星を描き、ミカを連れて地上に上がった。
「じゃあ、またな」
「戴冠式（たいかんしき）には、来てくれるでしょ？」
「もちろん。公務に入ってるけど、個人的にも楽しみだよ。パパ達も連れていく」
「式が終わったら、ガブちゃんのところでパーティしよっか？」
「そうだな。二人によろしく」
「わかった。じゃあね～」
ミカが飛び立っていった。
ドレスのスカートからいいもの見えたが、妹のを見ても仕方ないか。

――ダンッ――

なんだ今の？
「……？」
振り返ると背後に、アーリマンが立っていた。
俺の背中に曲刀が突き立てられている。
「てめえええええ……生きてやがったのか！」
まずいところまで刺さっているのか、思うように力が入らなかったが、俺は再生した剣を取り出した。
アーリマンは手のひらにオーラをたくわえ、更なる一撃を放った。
俺は辛うじて剣で弾き返した。

着弾した辺りの地面が巨大な爆発を起こす。
「おまえ……何者だ……？」
「わたしは冥府の評議員二人を食ったのだ。あの時はわたしも混乱していたからな。あの程度でわたしが死んだとでも思ったか？　ルシファよ。さあ、おまえも食ってやる」
アーリマンに斬りつけるも、かわされてしまった。
俺の懐にアーリマンが入りこんで、オーラをたくわえた。

……殺られる。

「あたしのお兄ちゃんになんてことするのよ！　馬鹿！　死んじゃえ！」
騒ぎを聞きつけたのか、戻ってきたミカが特大のオーラを手のひらに溜めて、アーリマンに放った。
一瞬振り返ったアーリマンに、俺もすかさず光弾を放つ。
二つの巨大光弾に挟まれたアーリマンは逃げる間もなく、今度こそ消滅した。
「お兄ちゃん……大丈夫？」
ミカが曲刀を抜くと、吹き出した血がミカの真っ白いドレスを汚した。
オーラを当ててくれているが、身体じゅうがひどくだるい。
「ミカ、俺、もう頑張らなくてもいいみたい。やっぱ、サッちゃん待ちきれないってさ」
膝がガクガクと震え、俺は立っていられなくなった。

……俺の人生、いつもこうだ。
あと一歩で可愛い嫁さんをもらって、楽しく暮らせたのに。
せっかく、ミカと二人で世界を救うヒーローになってやろうと思ったのに。
結局、モテナイ軍団にいた時と何も変わっちゃいない。

幸せは美味そうな匂いだけ嗅がせて、いつも隣のテーブルに運ばれていくんだ。

「……お兄ちゃん、やだよ。せっかくお兄ちゃんって呼べたばかりなのに。せっかくあたしにも本物の家族ができたのに！」

俺は力を振り絞って紙とペンを物質化し、一筆(いっぴつ)書いてサインした。

「ミカ、俺の亡骸を魔界に連れていってくれ。そして、大臣にこの手紙を渡してほしい。信用できる奴等を選んだから心配いらない。大変だろうがミカに魔界を任せる。これからはミカが全世界の女王様だ。きっと楽しいところになるだろうな。ミカの作る世界」

「わかった。わかったから死なないでよ……お兄ちゃん」

身体を支えきれなくなった俺をミカが膝枕して、頬を撫でてくれる。

温かくて、柔らかいな。ミカの太もも。

……もうすぐだよ、サッちゃん。

……今、いく。

「ミカやみんなに会えて、楽しかったよ。ありがとう」

「やだよ、死んじゃやだ～。あたしを一人にしないでよ！」

ミカの熱い雫(しずく)が頬を打つ。

「ミカには仲間がいるだろ？　みんなミカを手伝ってくれる。ミカを愛してくれる。天界の二人も、パパもタナトスちゃんも……だから……がんばって……俺の可愛い……ミカ……」

「だめだよ！　お兄ちゃん！　置いてかないで！　いやよ！　お兄ちゃん！　おにい……」

終章　エピローグ

やれやれ、いつまで待たせれば気が済むんだ？
俺は本屋で時間をつぶしていた。
しばらくすると待ち焦がれた彼女が、書店の自動ドアを入ってきた。
今日は舌を噛みそうな名前のロリータショップがバーゲンをしているというのでカミさんを乗せてきたはいいが、生身の少女人形達の熱気に押されて、俺は書店に避難していたというわけだ。
大きな紙袋を両手に提げて、愛しい妻がこちらにウィンクしている。
「サッちゃんもいい歳して好きだな、ロリータ」
「あら、まだわたし二十三よ？　それに、ロリータは精神が大事なの。永遠に可愛いお人形さんでいたいのよ」
「まあ、君が可愛いのは俺にとっても嬉しいことだけどな」
「そうよ、愛しいダーリンのために、一番素敵な姿でいたいの」
おっと、いかん。書店内で、ただでさえ目立つロリータ娘と大声でこんな会話をしていたら、ただのバカップルだ。
――サッちゃんを促して書店を出ると、駐車場を清算して、しばしのドライブ。

ちょっとした穴場の海浜公園に到着し、ベンチに二人で腰かけた。
服とそろいの黒くてフリフリな日傘を肩に置いたサッちゃんは『不思議の国のアリス』のイラストが施された大きなトートバッグから、二人分にしてはちょっと多すぎるくらいのサンドイッチを取り出した。
「あと六ヶ月か。楽しみだわ」
「名前の候補考えた？」
「うーん。光雄とか光子とか、光を入れるのはどうかしら？　あな

たから一文字もらって。でも、光希より素敵な名前なんて思い付かないわ」
「君から一字もらって幸を入れるのはどう？　日常の些細（ささい）な幸せを、幸せだと感じられる子になってほしいから。いっそのこと女の子だったら、その子も幸子にしたいな。君みたいに可愛い子に育って、モデルとかアイドルとかになるよ、きっと。休日には親子でロリータとか着ちゃってさ。あ、でも君には悪いけど、これからの子に幸子っていうのはちょっと古風か」
　そんな生まれる前からの親馬鹿っぷりを二人で満喫していると、目の前にデジカメを持った女の子が歩いてきた。
「あのー、シャッター押してもらえますか？」
「うん、いいよ。どれ、貸してみて？」
　その女の子は奇遇にも白いロリータを着ていた。同色のヘッドドレスと、健康的な長い黒髪のコントラストが魅力的だった。
　これはサッちゃんと話が合いそうだななんて考えながら、指定された、海がよく見えるポイントに駆け足する。
「撮るよ～」
「おっけー」
　写真の撮れ具合をチェックしにきた女の子が、ふいに言った。
「今度こそ幸せになってね、お兄ちゃん。ちょっとだけズルして大サービスしといたから」
　お兄ちゃん？　この子より年上だからなのかな。
「ありがとう。でも、俺はもう十分幸せだよ。可愛いカミさんがいるし、つかもうと思えば、幸せはそこらじゅうに転がってるみたいだからね。でも、ちょっと尻に敷かれてるかな。なんて言ったら噛み付かれるか」
「ごちそうさま」
「あ、ごめん、そういうつもりじゃ……。そうだ、よかったらうちのカミさんと話していかない？　見てのとおりロリータ仲間なんだけど」

「うん、そうする！　……でも忙しいから、ちょっとだけ」
二人でサッちゃんのいるベンチに戻ると、サッちゃんがサンドイッチを女の子に差し出してすすめた。遠慮がちに一口かじった女の子の笑顔は、まるで天使のようだった。
「そのお洋服ってどちらのショップ様なの？　あまり見かけないデザインに見えるけど」
「これはね、たぶん今は売ってないお洋服なの。今は遠いところにいっちゃった、とっても素敵なお友達があたしにくれたのよ」
「そう。残念だわ。可愛いから要チェックと思ったのに」
「お姉さん、ひょっとして赤ちゃんがいる？」
「よくわかったわね。まだそんなに膨らんでいないのに」
「あたし勘が鋭いんだ。触ってもいい？」
「いいわよ」
女の子がサッちゃんの下腹部に手を当てると、なんだかその手が白く輝いた気がした。まあ、真っ白で綺麗な手だからそう思っただけかもしれない。日差しも強いことだし。
「きっと元気な赤ちゃんが生まれるよ」
「そうだといいわね。ありがとう」
「お姉さん、写真撮ってもいい？　ロリータ仲間に出会った記念に」
「いいわよ。わたしなんかでよければ」
「じゃあ、お兄ちゃんも並んで、熱々カップルさんの図で」
「俺？　まあ、いいけど」
女の子は俺達の写真を念のためと言って数枚撮った。続けて女の子とサッちゃんとのツーショットや、どういうわけか俺とのツーショットなどを撮らせ、最後にデジカメを手すりに置いて、俺が二人に挟まれるという図で撮ることになった。顔を見合わせた白と黒のロリータ娘は、クスクスと悪戯っ子のように笑いながら、俺をギュウギュウ抱き締めた。
「どうもありがとう。あたし、これから外国にいっちゃうから、もう会えないかもしれないけど、写真大切にするね。お幸せに」

「ありがとう。あなたもね」
女の子が立ち去ろうとした時、サッちゃんが呼び止めた。
「あなたのお名前、聞いてもいいかしら？」
「ミカよ。カタカナで、ミカ」
「いい名前ね……」
ミカちゃんはバイバイと手を振って、元気いっぱいのスキップで去っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5929c/

サキュバスサッちゃん

2011年9月10日03時15分発行